

An aerial photograph of a town, likely Otsu, Japan. The image shows a dense residential area with many blue-roofed houses, interspersed with green fields and patches of forest. A prominent river or canal runs through the town, and a railway line is visible. The overall scene is a mix of urban development and natural landscape.

大宰府条坊跡

観世音寺土地区画整理に伴う
発掘調査(1)

大宰府町の文化財第5集

1982

大宰府町教育委員会

(表紙) 大宰府条坊跡
航空写真
撮影 1977.10

(題字) 大宰府町
町長 有吉 林之助

卷首図版



S D 001出土 墨書土器 (本文20頁参照)

序 文

このたび昭和54年度に行われた太宰府町観世音寺土地区画整理に伴う発掘調査の概要がまとまり一般に公表できる運びとなった。思えば昭和48年に歴史の都市、太宰府町を今後無秩序な開発から抑制し、住民の生活環境の改善と保護を行なう目的で区画整理の基本案が樹立され、福岡県都市計画課及び福岡県教育委員会文化課との調整、協議がとられてきたのであるが、その結果、昭和48年に区画整理の名称を観世音寺土地区画整理事業として基本調査を実施し、区画道路を鏡山猛氏復原による大宰府条坊跡推定案に合わせて設計するなど、古代都市と現代都市を総合した太宰府町独自の都市計画となった。しかし、このような歴史風土づくりの中に全く問題点がないわけではなかった。区画道路の建設は掘削工事などを伴い、いかに歴史都市の復原という形をとっても地下に埋没した古代の集落、墳墓などを無傷のまま保存できるわけではない。したがって昭和54年度工事着工と同時に遺跡の発掘調査を実施することとなった。本書はこうして大宰府条坊の解明に挑んだ発掘調査報告の第1集である。連日の悪天候、不十分な調査体制から発掘調査がいき届かなかった点は非常に残念であるが、本文にのべるような新しい考古学的知見をもたらしたことによって、いささかでも大宰府の解明に役立つことであれば望外の喜びと感ずる。順調な調査を与えて下さった土地所有者の方々の理解と、現場の作業に従事された地元の人々に対しても厚くお礼申し上げたい。

太宰府町教育委員会
教育長 陶山 直次郎

目 次

大 宰 府 条 坊 跡

	頁
I 序 章	
1、調査の経過	1
2、大宰府の周辺遺跡	2
3、調査の概要	4
II 遺 跡	
1、各トレンチの調査	6
2、第6トレンチの調査	8
3、第18トレンチの調査	10
4、第19トレンチの調査	11
III 遺 物	
1、土器	12
2、瓦類	28
3、石製品、金属製品	29
4、木製品	30
IV まとめ	
1、遺跡の特色と年代	33
2、土器の年代について	34
付 編 陣ノ尾遺跡 第2次調査	
I はじめに	1
II 遺構と遺物	
1、陣ノ尾1号墳	2
2、陣ノ尾2号墳	7
3、墳墓	8
4、その他の遺構と遺物	10
III まとめ	
1、1号墳の特色と年代	13
2、弥生時代小児甕棺について	14
3、歴史時代の土器について	14

挿 図

大 宰 府 条 坊 跡	頁	19	S D 001上層出土土器	15
図 1 観世音寺地区大宰府条坊跡現状	1	20	S D 001下層出土土器	17
2 周辺遺跡現状	2	21	S D 001下層出土土器	19
3 主要遺跡分布図	3	22	第 6 トレンチ出土墨書土器	20
4 大宰府条坊図	4	23	第 6 トレンチ周辺出土土器	21
5 条坊地割図	4	24	第18・20トレンチ淡茶色粘土出土土器	22
6 昭和54年度調査地位置図	4	25	S E 005出土土器	22
7 各トレンチ発掘状況	6	26	S D 010出土土器	23
8 トレンチ配置図	7	27	竈製作模式図	24
9 第 6・9 トレンチ	8	28	S K 015出土土器	25
10 S D 001土層図	8	29	S K 015出土土器	27
11 第 6 トレンチ周辺図	9	30	その他の陶磁器	28
12 S E 005	10	31	文字瓦拓影	28
13 S E 005	10	32	打製石器	29
14 第18・20トレンチ	11	33	その他の石製品・鉄製品	29
15 第18トレンチ土層模式図	11	34	木製品の出土状態	30
16 第19トレンチ	11	35	S D 001木製品	31
17-1 土師器の器種分類	12	36	S D 001木製品	32
17-2 須恵器の器種分類	13	37	遺跡の範囲	33
18 製作手法の分類	13			
付 編 陣ノ尾遺跡 第2次調査				
図 1 陣ノ尾遺跡全体図	1	13	S X 05	8
2 1号墳土層図	2・3	14	鉄製品	8
3 1号墳石室	折込み	15	S X 04	9
4 1・2号墳地形図	3	16	S X 04	9
5 1号墳出土土器	4	17	S X 04甕棺	9
6 耳環	5	18	その他の土器	10
7 鉄製品	5	19	包含層出土土器	10
8 鉄製品	6	20	石製品・鉄製品	11
9 2号墳石室	7	21	軒瓦・文字瓦・平瓦拓影	12
10 2号墳出土土器	8	22	平瓦拓影	12
11 2号墳鉄製品	8	23	筑前国分尼寺出土軒瓦	13
12 S X 05	8			

例 言

1. 本書は太宰府町が1979年度に国、県費の補助を受けて実施した太宰府条坊跡発掘調査報告の第1集である。今回の報告は観世音寺土地区画整理事業に伴うものである。
2. 調査は太宰府町教育委員会が主体となり、教育長・陶山直次郎の総括のもとに、社会教育課長・木本茂、西山義則、社会教育課文化財係長、黒板力、同文化財係主事・岡部大治が庶務をとり、文化財係技師・山本信夫が発掘調査を担当した。
3. 本書の作成は山本があたり、図面の作製については岡部の協力をえた。製図は島田まゆみが行なった。
4. 遺構の写真は山本が担当し、遺物の写真は岡紀久夫氏が撮影した。写真の一部は石丸洋氏（九州歴史資料館学芸二課）の撮影したものを使用した。また航空写真は国際航業株式会社の作業による。
5. 図3使用の地図は、国土地理院1977年作成1：25,000「太宰府」「二日市」「福岡南部」「不入道」の一部である。
6. 本書の編集は山本信夫が担当した。

大宰府条坊跡

I 序章

1 調査の経過

昭和46年、太宰府町は観世音寺地区に区画整理事業の計画を立案したが、計画された区画整理地域は大宰府政庁跡、学校院跡、観世音寺跡など国の特別史跡のすぐ南に近接した条坊跡であり、埋蔵文化財の保護が検討された。該当する大半の土地は、水田、畑、住宅地域で都市計画化の普及が遅れていることから、あまり開発の手を受けておらず、自然にみられる水田のゆるやかな畔、土手の雑草のゆらめきは、史跡の町として風情を強くいだかせ、同時に地下の遺跡が荒らされることなく保存されている感を与えていたのである。しかし区画整理の施行は土地の大きな変質を伴うものであり、大宰府条坊跡を中心とした遺跡の破壊に危惧の念をいだかせた。このような計画案については、福岡県教育委員会と協議が図られ、区画道路については大宰府条坊跡復原案をとり入れた形で設計し、近代都市と文化遺産を可能な範囲で両立させようとする方法となった。また土地の掘削を表土のみにとどめて、土盛成形を主体とする工法がとられた点は、遺跡を破壊から防げる有用な方法であった。しかし道路については基礎掘りや、今後の各種工事が伴うことを考慮すると、たとえ土盛りなどによる工法をとっても遺跡は今後破壊していくことが、必至と思われた。こうして埋蔵文化財の発掘調査については、主として区画道路内の完全な調査が十分な体制のもとに実施されることが必要と考えられたが、十分に大規模な調査に応じよう組織化が進まないまま計画は具体化し、昭和54年10月、工事は着工され、砂煙をあげて行きかう工事車輛の中で発掘調査は開始された。折りしも太宰府町の調査主体は大宰府町宮ノ本遺跡の調査を行っており、12月になって宮ノ本遺跡の終了と同時に区画整理の調査に着手した。現地は調査予定箇所を残し、周囲は運搬土砂で埋没するありさまで調査の計画性をいっそう損なう状況であった。冬の悪天候の中で作業は進められたが調査の結果、木簡などを出土する奈良時代の遺構や平安時代の井戸、溝など重要な遺構の所在することが確認され、調査費、期間に影響されながらも予想以上の成果をあげ、翌55年1月14日まで、のべ21日間にわたる調査を終了した。



図1 観世音寺地区大宰府条坊跡現状

調査期間	1979.12.8～1980.1.14
区画整理 予定面積(全体)	80ha
昭和54年度 施行面積	15ha
発掘調査面積	540㎡(トレンチ数47本)

表 1

2 大宰府の周辺遺跡

太宰府町は福岡市から約10km南へ位置し、北は大城山（標高410m）東は宝満山の支脈、また南西は天拝山、牛頸山に挟まれた東西3km、南北2kmの平野に所在する。大宰府は7世紀後半以降、西海道の政治、経済的中心として歴史に登場する。太宰府町、筑紫野市にまたがる平野部には東西各12坊（約2.6km）南北22条（約2.4km）に区画された条坊跡が施行されたと推定され、その北辺には大宰府政庁跡、学校院跡、観世音寺跡および子院跡が位置した。郭内には般若寺跡、杉塚廃寺跡、さらに北西に筑前国分二寺跡、南に武蔵寺跡など奈良・平安時代の文化を象徴する寺院跡が所在する。政庁跡の西には瓦窯や「遠賀団印」、「御笠団印」の出土地が知られ、北西に博多側からの侵攻を防ぐ水城跡、北の四王寺山中に朝鮮式山城として名高い大野城跡があり、大宰府を防衛した軍団の活躍を物語る。政庁跡、観世音寺跡から大野城跡に及ぶ一帯は国の特別史跡として指定をうけ、発掘調査、整備が進行しているが、南側の条坊一帯、周辺の丘陵地帯においては宅地化などの開発が活発で、ここ数年來に行なわれた開発に伴う調査によって、重要な遺跡があいついで知られるようになった。左郭八条六・七坊、十条八坊の一帯は、福岡南バイパス建設に先だつ発掘調査によって平安から室町時代に至る大規模な集落、墳墓が検出され、また政庁跡から西南に2.3km離れた郭外の丘陵地には、学校建設に先だつ調査により買地券、青銅製鳥花文鏡などの特殊遺物を副葬した宮ノ本墳墓群^{※2}の所在も知られている。このように周辺は大宰府との関連を物語る歴史的素材が次第に明らかになりつつある。

※1 前川威洋ほか『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1～8集 福岡県教育委員会（1970～1978）

※2 山本信夫・高倉洋彰・横田義章・中間研志『宮ノ本遺跡』『太宰府町の文化財第3集』太宰府町教育委員会（1980）

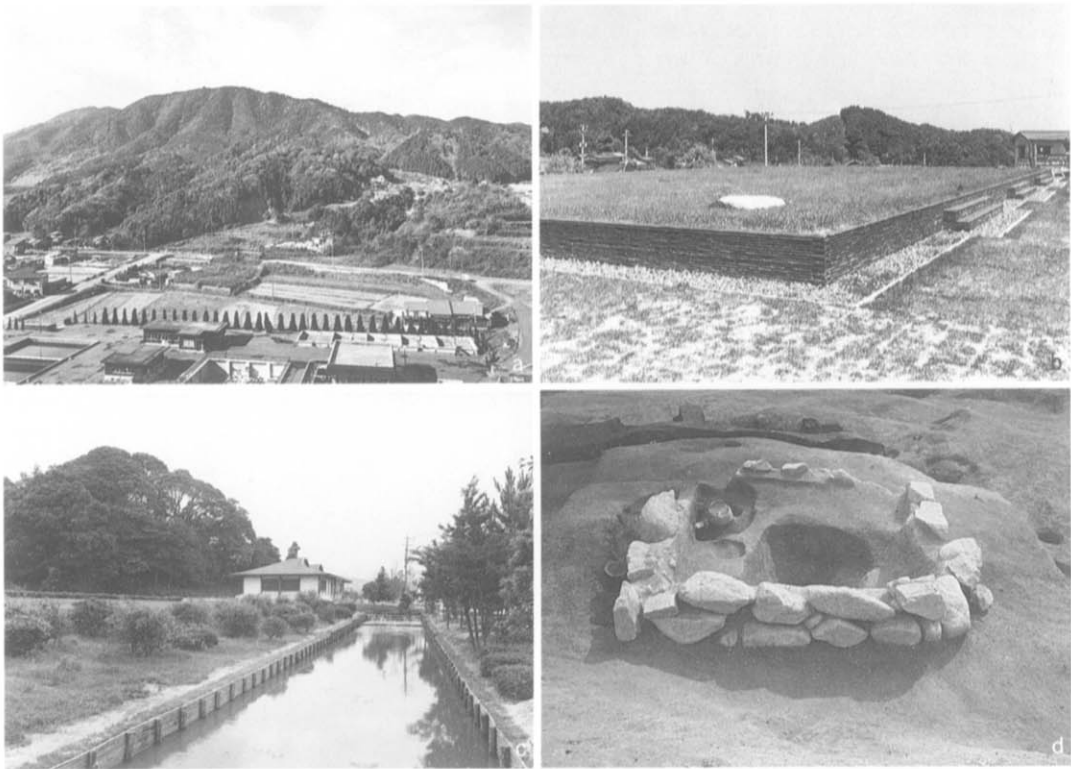


図2 周辺遺跡現状

- a. 大野城跡（東から） b. 筑前国分寺講堂跡（整備後）
c. 大宰府政庁跡と大宰府展示館 d. 宮ノ本遺跡1号墓



図3 主要遺跡分布図 (1/40,000)

- | | | | | |
|-----------|------------|--------------|------------|-----------|
| 1. 大宰府条坊跡 | 2. 水城城 | 3. 陳ノ尾遺跡 | 4. 筑前国分尼寺跡 | 5. 筑前国分寺跡 |
| 6. 国分瓦窯跡 | 7. 御笠団印出土地 | 8. 速賀団印出土地 | 9. 大野城跡 | 10. 岩屋城跡 |
| 11. 浦城跡 | 12. 原遺跡 | 13. 御笠川南条坊遺跡 | 14. 君畑遺跡 | 15. 般若寺跡 |
| 16. 神ノ前窯跡 | 17. 長浦窯跡 | 18. 向佐野窯跡 | 19. 宮ノ本遺跡 | 20. 剣塚古墳 |
| 21. 杉塚魔寺跡 | 22. 唐人塚遺跡 | 23. 塔ノ原魔寺跡 | 24. 桶田山遺跡 | 25. 武藏寺跡 |
| 26. 道場山遺跡 | 27. 市の上遺跡 | | | |

3 調査の概要

大宰府条坊跡については図4のように鏡山猛氏の復原案にもとづいて条、坊の区画を表示する方法がとられてきた。現在までの調査結果によれば復原条坊案に対応する明確な遺構が捉えられておらず、遺構にもとづく正確な条坊基準線の設定ができない状況であるが、従来の復原案による一区画=108mの条坊区画設定をそのまま採用して遺跡の地点を表示するものとした。

遺跡の名称については一般的に土地の小字名を採用している所が多いが、大宰府跡では従来から平城宮跡で使用している分類法に従い^{*2}図5に示すような略号と地割を設けている。この地割図に従うと、昭和54年原発掘調査地点は図6に示すように6AYQ、6AYV、6AYRに及ぶ広範囲な地域である。このような広大な範囲の調査はまさに条坊跡の解明に絶好のチャンスではあるが、町の対応組織としては長期的な発掘計画、十分な調査体制の実現化が困難な状況に置かれ、やむなく狭いトレンチを広い範囲に入れて遺跡の分布を確認することとした。トレンチの設定は区画道路内を中心として、推定条坊線にほぼ直交させる形をとり、また周囲よりも0.5~1m前後小高い微高地などにも多くする方法を構じたが、このように広範に及ぶトレンチについては、本書での記述に混乱をさけるため調査時に付したトレンチ番号をそのまま採用し、各トレンチの番号、地割、条坊復原案による区画の表示、現在の行政区の地番については一括して表2に印した。本文中の記述についてはトレンチ番号で統一して表示した。遺跡の実測図は国土調査法第Ⅱ座標系を基準として作製したものである。

本文中に用いる遺構の表示法は表3のように平城宮の分類法にもとづき略号表示することにした。SD001と表示された第1項のSは遺構、第2項のDは分類された遺構である溝を示し、001は検出遺構の個有登録番号をさす。条坊地域については今後も多数の調査が予想されるので、今回からこのようにシステム化した一連の方法をとっていきたい。今回の個有番号の001~019は昭和54年度調査の条坊内遺構に付し、020~029はすでに報告済みの昭和55年度左郭八条七坊の調査^{*3}に付している。

*1 鏡山猛「大宰府の遺跡と条坊(一)」『史淵』16、17(1937)

*2 奈良国立文化財研究所「平城宮跡発掘調査報告Ⅱ」(1962)

*3 山本信夫「筑前国分尼寺跡、陣ノ尾遺跡」『太宰府町の文化財第4集』(V、左郭八条七坊の調査)太宰府町教育委員会(1981)

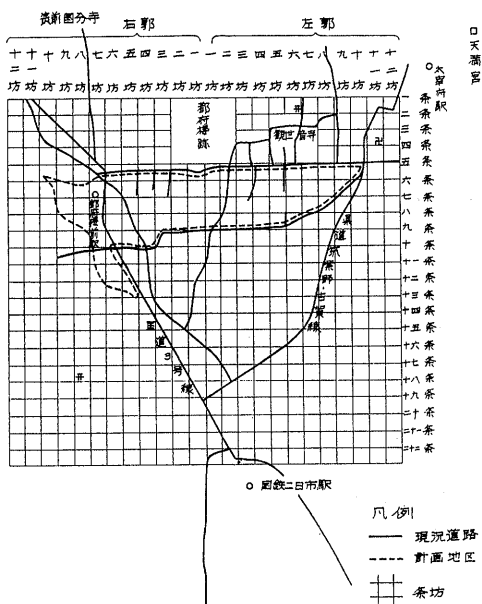


図4 大宰府条坊図

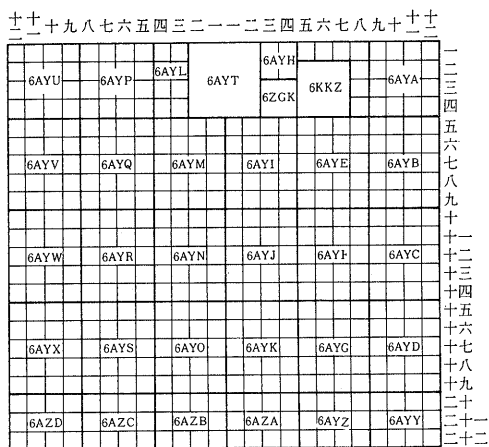


図5 条坊地割図

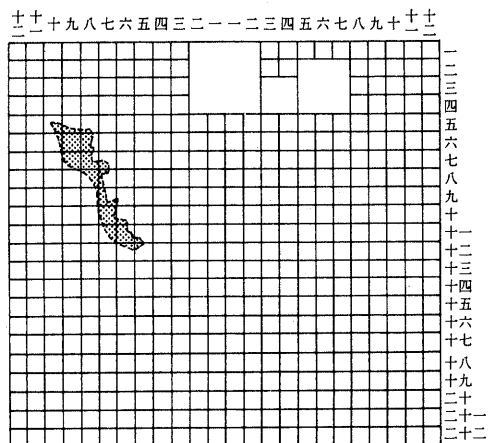


図6 昭和54年度調査地位置図

調査日程

(1979)		(1980)
12.8~11	第1~7トレンチ発掘。 他はバックフォーによるト レンチ発掘。	1.8 第19-B・C、23、24トレン チの調査、井戸の検出。 1.9 バックフォーによる第6ト レンチの排土作業。 1.10 第6、18トレンチの写真 撮影、土層図作製。 1.11 第6トレンチS D001の拡張。 第18トレンチ井戸の写真撮 影、基準点測量、レベルの 移動。本日が発掘作業を終 了。 1.12 平板測量、実測図作製。 1.14 平板測量、実測図作製、調 査終了。
12.12	第1、5、6、8トレンチ 発掘。	
12.13	第6、8、9トレンチ発掘。 他はバックフォーによるト レンチ発掘。	
12.14	第6、9~12トレンチ調査。	
12.17	第11~13トレンチ調査。	
12.18~19	第15~17トレンチ調査。第 10~15トレンチ埋めもどし。	
12.20	第18~21トレンチ調査。	
12.22~24	第6、16、17トレンチ調査。	
12.25	バックフォーによるトレン チ発掘。	
12.26	第19、21、22トレンチ調査。 第16、17トレンチ写真撮影。	

S-遺構	
A	柵・土塁・塀
B	建物
C	廊
D	溝
E	井戸
G	苑池
H	広場
K	土壇
X	その他

表3 遺構の表示法

トレンチ 番号	地割略号	推定条坊	地番	トレンチ 番号	地割略号	推定条坊	地番	
1	6AYQ-D	右郭六条八坊	大字通古賀字半田326-1	19	6AYR-B	右郭十条六坊	大字通古賀字西ノ後531	
2	〃	〃	〃 〃 312	20	〃	〃	〃 〃 530	
3	〃	〃	〃 〃 325	21	〃	十一条六坊	〃 〃 552-1	
4	6AYV-A	六条九坊	〃 〃 329	22	〃	十条六坊	〃 〃 554	
5	6AYQ-D	七条八坊	〃 〃 317-1	23	〃	十一条六坊	〃 〃 553	
6	6AYQ-C	七条七坊	〃 〃 283	24	〃	十条六坊	〃 〃 530	
7	〃	〃	〃 〃 〃	その 他の トレン チ	6AYV-A・B	五条九・十坊	〃字半田339、342 322、323-3、319 316-1	
8	6AYQ-D	七条八坊	〃 〃 317-1			6AYQ-D		六条十坊
9	6AYQ-C	七条七坊	〃 〃 283		6AYQ-C			九条七坊
10	〃	〃	〃 〃 〃			6AYR-C	十条七坊	〃字西ノ後526、554、557 〃前田中439-1
11	〃	〃	〃 〃 316-1		6AYR-A		十一条六坊	
12	〃	〃	〃 〃 283			十二条五坊		
13	〃	〃	〃 〃 〃					
14	〃	〃	〃 〃 〃					
15	〃	〃	〃 〃 316-1					
16	〃	〃	〃 〃 283					
17	6AYQ-D	七条八坊	〃 〃 318-1					
18	6AYR-B	十条六坊	〃 字西ノ後530					

表 2

Ⅱ 遺跡

1 各トレンチの調査

各トレンチの発掘調査結果から、遺構面の存在が確認されたものは第6トレンチ及び周辺の第9～17の各トレンチを含む一帯と第18～24のトレンチを含む一帯の2ヶ所に大きくわかれ、他のトレンチは1～2mの灰色砂の堆積からなる土層で、調査区の南東から北西へ流れる鷺田川の氾濫地帯であったと推定される。しかし第2～4トレンチについてみると砂の堆積土中に越州窯系青磁片、定窯系白磁片、円筒埴輪片などの遺物を含んでいることから遺跡の周辺部にあたるのが想定され、すぐ東側の住居地域となっている西鉄都府楼前駅周辺の微高地上に遺跡が存在した可能性を強くしている。

第5トレンチでは、黒色砂の埋土からなり須恵器片を含む落ち込みを土層断面に認めたが、狭いトレンチ内では遺構であるか否か判断できなかった。この落ち込みは弥生時代の磨製石斧を出土した灰色砂から切り込んだものである。

第17トレンチの南端では地山の灰色粗砂より落ち込みを認めたが遺構の内容は把握できていない。

第21トレンチでは表土下0.3mで黄灰色粘質土が検出され、これから切り込むピット状のものがみられる。黄灰色粘質土は無遺物層である。この南側のトレンチは一段低く、全く土質を第21トレンチとは異にする砂の堆積土であり、先述した川の氾濫とみられるので第21トレンチは遺跡の南限界を示すと考えられる。

第22、23トレンチは表土下0.3mで地山の暗茶色粘土がみられ、地山上に奈良、平安時代の細片化した土器片をかなり含んでいる。今回は範囲を広げることができなかったが周辺に遺構の存在する可能性が強い。第22トレンチの西側は砂の堆積で氾濫原とみられ、遺跡の西限界を示すものであろう。これらトレンチの周辺部は今後の調査によって遺構の存在が明らかになってくるものと思われる。

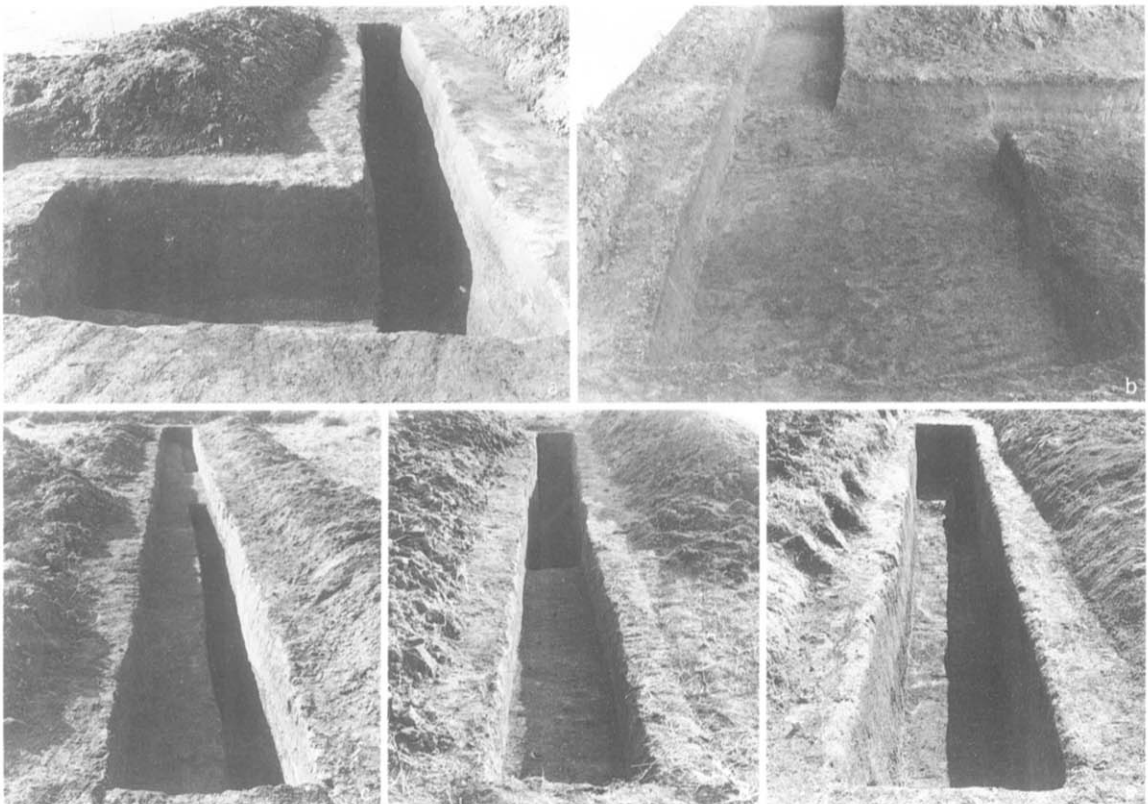


図7 各トレンチ発掘状況 a. 第7・16トレンチ(東から) b. 第9トレンチ(西から)
c. 第11トレンチ(東から) d. 第15トレンチ(北から) e. 第17トレンチ(北から)

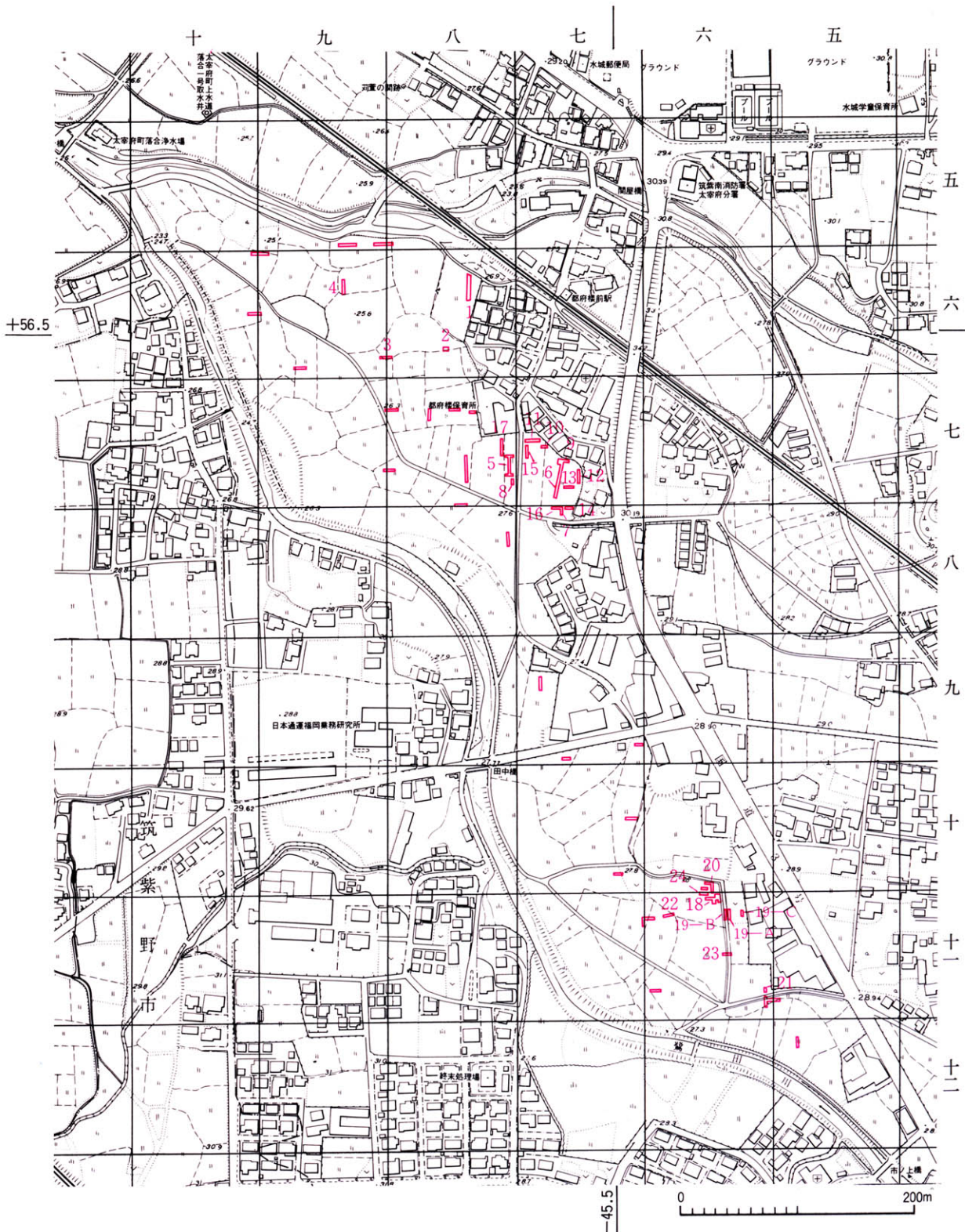


図8 トレンチ配置図 (1/5,000)

2 第6トレンチの調査 (図版1)

検出した主要な遺構は溝1条である。

土層 図10に示す6暗灰色土以下の層は古い堆積土であり、上から6暗灰色土、7黄灰色粘質土、13灰色粗砂の順に堆積し、13は地山で土器などを含まない。6にはかなり遺物を含んでおり、7の上面に上層の遺構の存在する可能性がある。6、7は発掘区の北側でうすくなり地山の灰色粗砂が次第に高くなる。したがって北側の方にかけて遺構の所在する率が高い。第6トレンチ北側を拡張して第9トレンチとしたが他に遺構は検出されていない。第10、11、12、14トレンチなども第9トレンチの地山面とほぼ同一レベルにある。SD001は地山の灰色粗砂から切る。

SD001 (図版1) 堆積土は上から9茶色粘土(最上層)、10灰色粘土(上層)、11暗灰色粘土(下層)、12暗灰色微砂質粘土(最下層)の順に堆積し、9は間層でうすく、12はほとんど遺物は認められない。堆積土は植物の腐植した有機質層でとくに11の中には木簡をはじめとした木製品、昆虫の羽根、植物の種子、葉などを多く含んでおり、池ないしは溝などの堆積土と思われたが、周辺に補足したトレンチの状況からみて溝と判断される。すなわち第13、16の落ちこみは堆積土、出土遺物などからみて第6トレンチの遺構の延長と考えられ、第12トレンチは地山まで浅く遺構の延長部は検出されないことから、南側に屈折した溝状遺構であろうと考えられた。西側については第15トレンチに検出された落ちこみの堆積土が第6トレンチのものと類似しており延長部の可能性をもっている。しかし周囲の全面発掘に及んでいないのでSD001は池、土壌などの可能性も否定できない。なお第13トレンチについては区画道路外であるので将来の調査を考え、埋土上層のみの発掘にとどめた。第6トレンチで検出した両肩部の幅は3.5m、深さは0.7mである。

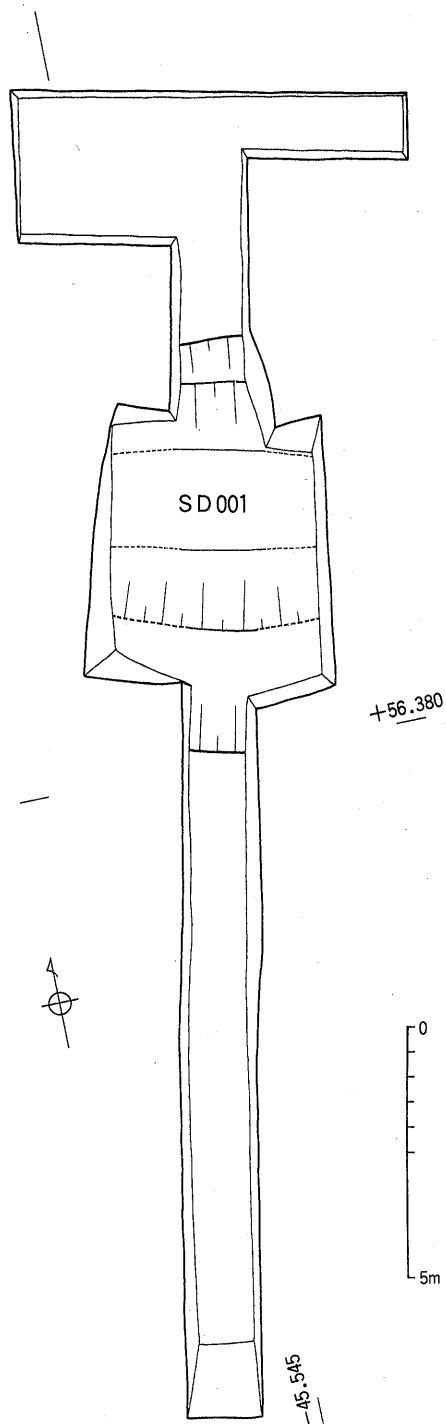


図9 第6・9トレンチ (1/150)

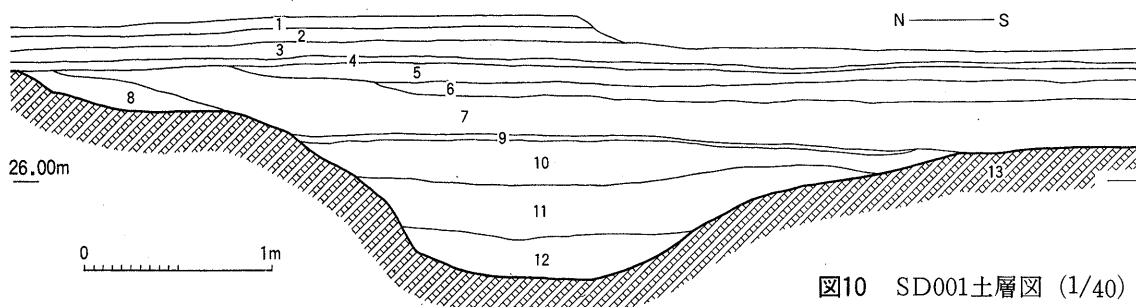


図10 SD001土層図 (1/40)

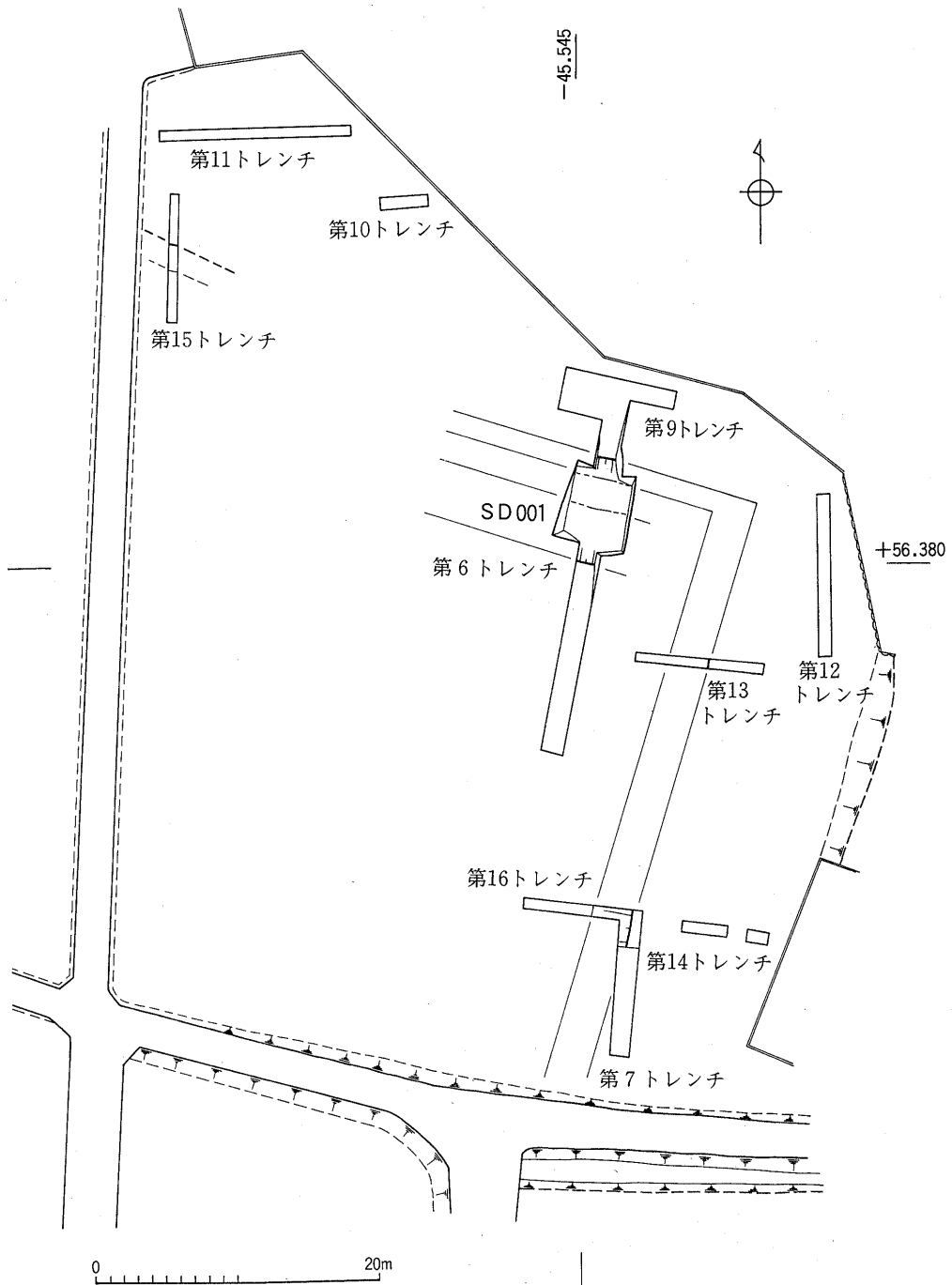
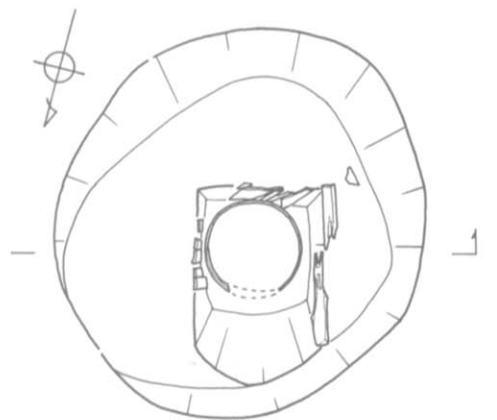


図11 第6トレンチ周辺図 (1/500)

- | | | |
|-----------|--------------|-----------|
| 1. 表土 | 8. 灰白色砂 | } SD001埋土 |
| 2. 床土 | 9. 茶色粘土 | |
| 3. 黄褐色土 | 10. 灰色粘土 | |
| 4. 茶褐色土 | 11. 暗灰色粘土 | |
| 5. 灰褐色砂質土 | 12. 暗灰色微砂質粘土 | |
| 6. 暗灰色土 | 13. 灰色粗砂 | |
| 7. 黄灰色粘質土 | | |



27.60

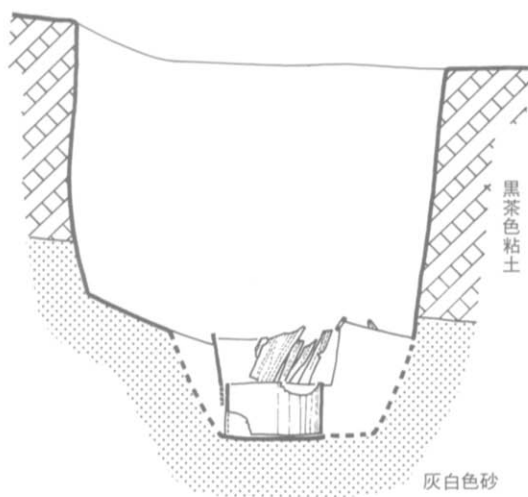


図12 SE005 (1/30)



図13 SE005 北から

3 第18トレンチの調査 (図版2)

検出した主要な遺構は井戸1基、ピットなどである。

土層 (図15) 第18トレンチの土層は上から表土、床土、淡茶色粘土、黒茶色粘土の順に堆積する。黒茶色粘土は地山で遺物を含まず、SE005、ピットはこの上面から切る。周辺の第20、24トレンチも第18トレンチとほぼ同様な堆積状況を示し、地山面まで20cmとごく浅い。このことから過去に上面の削平をかなり受けていると思われる。

SE005 (図版2) 黒茶色粘土から切る。掘形の上面は径1.5の円形で深さは1.5m。黒茶色粘土下の湧水層である灰白色砂まで掘り下げている。底部に井戸部材が残存しているところから、かろうじて井戸の構造を知ることができる。構造は縦板に方形井戸枠を組み合わせたものと考えられ、西壁に枠組みに使用した横棧がある。底部は径38cm、高さ20cmの曲物が一段据えられる。現在、大宰府周辺で検出された井戸と比較すると、このタイプのものはかなり多く認められているもので、11世紀後半から12世紀後半頃に盛行したものと考えられている。

その他のピット トレンチ内で検出された小ピットは埋土に含む遺物で検討する限りでは奈良、平安時代のもものと推定され、これらの遺構を覆う淡茶色粘土に包含される遺物についても7世紀後半から11世紀前後にかけてのものであることから、この地域には奈良、平安時代の遺構が中心を占めていると考えられる。

*1 横田賢次郎「大宰府検出の井戸—とくに形態分類を中心として—」
『九州歴史資料館研究論集』3 (1977) この分類に従うとSE005はⅡ-Aに属するものと考えられる。

4 第19トレンチの調査 (図版3)

検出した主要な遺構は溝1条、土壇1基その他ピットなどである。

土層 トレンチ内の土層は上から表土、床土、茶褐色土、黄灰色粘質土の順に堆積し、黄灰色粘質土は地山で遺物を含まない。検出された遺構はすべて黄灰色粘質土から切る。表土から地山までは堆積土が30cmで浅く、周辺地域は過去に削平を受けていると考えられる。

SD010 (図版3) 東西溝で第19-A、B、C、トレンチにわたって延長部13mほどを検出した。19-Aトレンチにおける溝の幅は1.6m、深さは0.4mである。19-Cトレンチは区画道路外にあたるので溝は今後の調査のため未発掘のまま埋めもどしを行なった。溝の上面は削平をうけているので、本来は2m以上の幅を有しているものと思われる。

SK015 (図版3) 第19-Bトレンチで検出された土壇で全体を発掘していないため規模は不明だが南北の長さは2.9m、深さは0.2mである。上面はかなり削平されたものと思われる。

SK011 その他のピット SX011は第19-Bトレンチで検出され、南北の長さは0.7m、深さは0.1mである。埋土から黒色土器Aの椀c、土師器坏aを出土している。坏aは10世紀前半頃と考えられるもので、SD010などと近接した時期の遺構と推定される。検出した他の小ピットについては出土した土器片などで検討するかぎりでは奈良、平安時代の時期に考えられ、また第18トレンチ周辺と同様に中世以降の遺物をほとんど出土しないのも特色である。

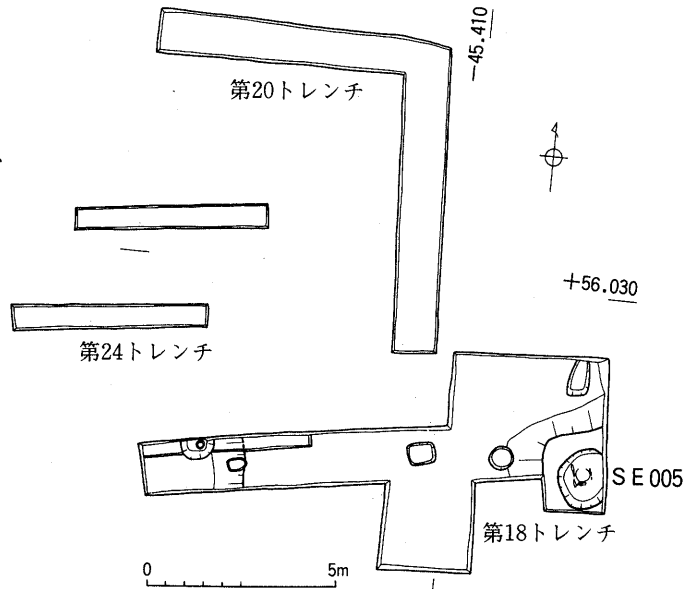


図14 第18・20トレンチ (1/200)

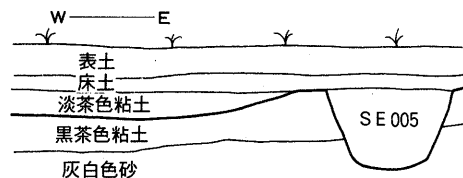


図15 第18トレンチ土層模式図

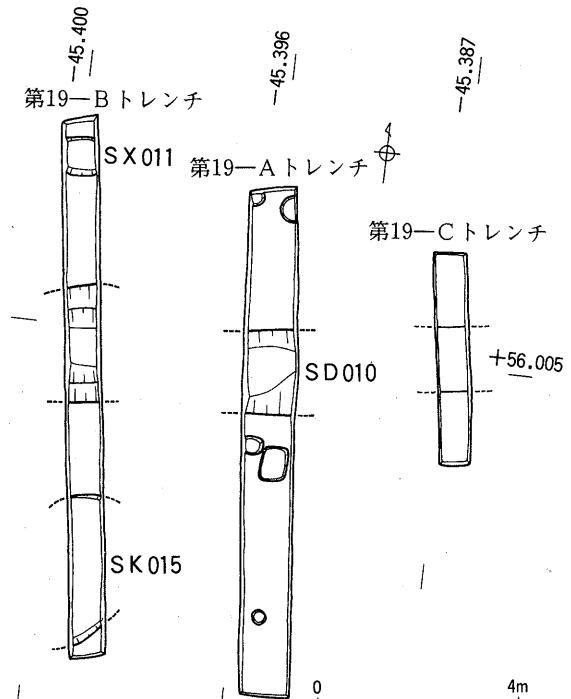


図16 第19トレンチ (1/150)

Ⅲ 遺物

1 土器

歴史時代の土器は多種多様ななかにも手法、器形について時代的変遷としてパターン化されるものがある。こうしたものについては極力分類化を図り、今後の報告と関連させていきたい。器種分類^{*1}については類別した器種、坏、蓋…に分け、器形の変化したものについてa、b…の符号を打つ、さらに細部の特徴からa1、a2…などの数字番号を加え、各器種の大小については器種の前に大坏、大碗などをつけて表わすことにしたい。手法については図18に一部を示した^{*2}

土師器の分類 (図17-1)

蓋 a はつまみがなく、c はつまみのあるもの。内外にみがき a を行なったものも多い。

坏 a は奈良時代以降続く一般的な器形で、法量の変化と底部外面の切り離し、調整法などの違いによって時期的に変遷をたどれることから年代推定の基準となっている。d は体部に丸味を有し、底部径は小さく、体部との境はシャープにつくられるもので内外にみがき a を施す。8世紀後半を前後してみられ同じ時期の坏 a と比較すると精製された土器である。丸底の坏 a は11世紀後半代を前後してみられるもので坏の底部を丸く突出させた際、外面下位に指頭圧痕がつき、内面にはみがき b が施される。高台をつけた c もある。

小皿 a は10世紀代に坏 a から分岐し、以後法量を変化させながら変遷する一般的な器形で、器高に対し底径の大きいものである。c は a に高台のつくものである。

皿 a は高台のないもの。

中碗 c は高台のつく口径11.0~13.0cm前後の中形の碗で体部に丸味をもつ c2 と外側へひらく c1 がある。

碗 中碗よりひと回り大形の碗で a は無高台のもの、c は高台のつくものである。

以上のほか記号化した坏 b、小皿 b などは今回出土しておらず記述を省いた。またその他の壺、甕、高坏、鉢などの器形については本文を参照されたい。

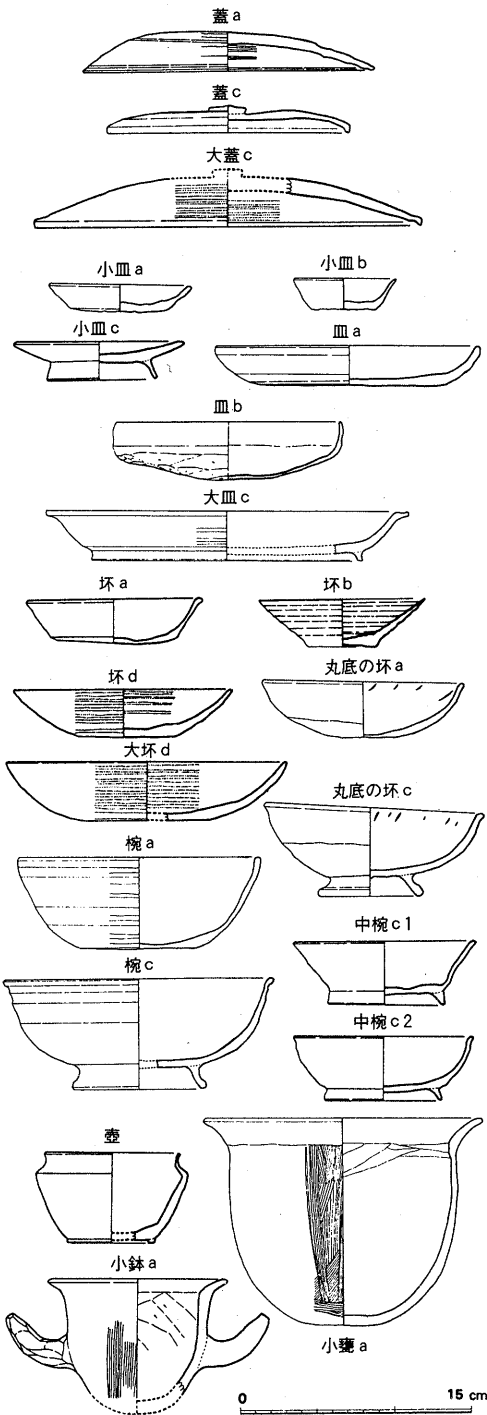


図17-1 土師器の器種分類 (1/5)

須恵器の分類 (図17-2)

小蓋 a はつまみのつかない小形の蓋で、小形の坏 c とセットになる。

蓋 a はつまみがなく、c はつまみをもつ坏蓋で口縁の断面形により1~3に分類される。c1 はかえりを有し、c2 は下方に長めの屈折部をもつもの、c3 は三角形のものである。坏 a、c とセットになる。

大蓋 c つまみのつく大形の蓋である。

壺蓋 a aは短頭壺aの蓋である。

坏 aは無高台、cは高台がつき、蓋a、cとセットをなす。

椀 cは高台のつく椀である。

皿 aは無高台の皿である。

大皿 c cは高台のつく大形の皿である。

他の器形については本文中を参照されたい。これらの分類については未知の器形も今後増加してゆくと思われるのでその都度、補足したいと考える。

陶磁器の分類

大宰府周辺出土の輸入陶磁器については、坏、椀、皿などに限って分類が行なわれており^{*3}、本書もこの例に従った。

製作手法の分類 (図18)

調整法などの図化にあつては図18のように分類した。

- 1 シャープな段、稜を表わす細線の実線。横などでへら削りの境にも使用する。
- 2 鈍い段、稜を表わす細線の長い破線。横などで、へら削り、指頭痕、なでなどの稜線にも使用する。
- 3 刷毛目、かき目を表わす。
- 4 細線の一点鎖線。陶磁器などの施釉された範囲、あるいは釉のかき取り部分を表わす。
- 5 細線で重ね焼きの目あと、焼台のあとを表わす。
- 6 細線の破線で付着物(煤など)を表わす。
- 7 みがきa。回転台を使用したへらみがき。
- 8 みがきb。丸底の椀、坏など内面に施され、みがきaよりも幅の広いへら、こてなどの調整具を器面にあて平滑にする。工具をあてた際の刻線が放射状に残る。へらなで、こてあて痕ともいわれる。
- 9 みがきc。黒色土器、瓦器などに施されるジグザグに交叉させたへらみがき。

土器計測表

坏、皿、小皿、丸底の坏の法量については、他の遺構との比較を考慮して別表にまとめた。他の器種の法量については編年上の要素として捉えられていないので除外した

*1 「平城宮報告Ⅱ」では一例をあげると坏AⅠcのAB…は類別した器形、I、Ⅱ…は大小関係、abc…は手法の特徴を表示している。
 *2 *1のように手法abc…を器種に付け加える分類法も考えられるが、ここでは土器の一つを、ある手法に製作者の特徴が加えられた総合的作品と理解し、分類された器形に備わったものとして土器分類の中には記号化して付け加えなかった。
 *3 横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4(1978)

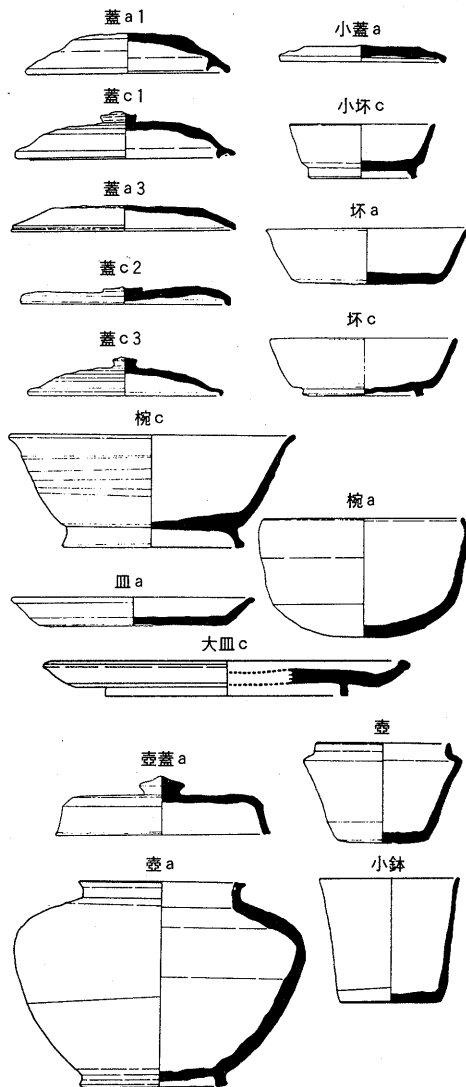


図17-2 須恵器の器種分類 (1/5)

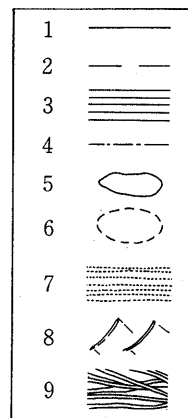


図18 製作手法の分類

S D001上層出土土器 (図19 図版4)

土師器 (1~5)

皿b (1) 皿としたが形のうえでは坏に入るものかもしれない。口縁部はわずかに内湾し、体部中位で大きく上方へ屈折する。底部は丸味をもつ。口縁部内外は横なでされ、内面はなめらかである。底部外面には手持ちによるへら削りがみられ、外周に沿って削った後、中央部を縦、横平行に削り、器肉を薄くしている。精良な胎土を用い、淡赤灰色をなす。口径は15.0cm、高さは3.9cm。

蓋c (2) 口縁部破片で内外面はみがきaが施され、赤褐色をなす。

高 坏 (3) 皿の破片とも考えられ、内外面はみがきaが施され、淡赤褐色をなす。

小 甕a (4) 口縁部はゆるく外反し、底部は丸味をもつ。内面は縦のへら削り、外面は幅3mmのあらい縦の刷毛目が施される。茶灰色を呈し、外面には煤が付着する。

鉢 (5) 焼塩土器といわれるもので、内面に編物状のものをあて、外面から指で押えた型づくりによる製作と思われる。赤灰色を呈し堅く焼成され、胎土に粗砂を含む。口縁部外面の一部は火熱でガラス状に吹き出している。図は破片から復原したもので口径は10.0cm、高さは8.3cm。

須恵器 (6~28)

蓋c2 (7・8) 口縁部が比較的長めに下方に屈折するタイプのもので、内外面は横なで、天井部の外面はへら削り、内面はなでを施す。

蓋c3 (6・9・10) 蓋c2に比べ口縁部が断面三角形をなすタイプで、9はしっかりした三角形をなすが、6・10はやや退化的で丸味をもつ。10は扁平化した器形である。調整はc2と同じ。

大蓋c (11・12) 11の口縁部は下方に長く屈折するが、12の口縁部は断面三角形をなす。

坏a (13) 体部内外面は横なでされ、底部はへら切り後、外周に沿ってへら削りを加える。内面はなでが施される。

坏c (14~19) 高台部の断面は、四角形状を呈するもので、14、16、18、19の高台はやや大きくて高く、15は小さくて低い。体部内外面及び高台部は横なでされ、14、17、19は体部外面下位にへら削りをとどめる。底部内面はなでが施される。

碗c (20.21) 21は体部外面から高台部にかけて横なでされるが、20は体部中位から下位にへら削りをとどめ、その後軽く横なでされている。体部内面は横なで、底部内面はなでが施され、20の底部外面には幅2mm程の板状圧痕がある。

皿a (27) 体部と底部の境はシャープな稜をなし、体部は外傾度が大きい。底部の外周はへら削りされ、その内側に板状圧痕がある。

壺蓋a (22) 口径16cm前後に復原され、体部内外面は横なでされる。

小 鉢 (23) 黄灰色粘質土から出土した破片と接合したもので、体部内面は横なで、体部外面の中

A	B	口径	器高	底径	C	D
坏 a						
1	13	15.0	4.3	10.4	○	×
皿 a						
1		19.0	2.4	14.0	×	×
2	27	20.5	2.1	16.4	○	○

表4 S D001上層出土須恵器計測表 単位cm
A 番号、B 挿図番号、C 内底なでの有無
D 板状圧痕の有無

下位はへら削りされた後、口縁から下位に横なでを施し、底部外面はへら削りされる。内面には茶褐色の漆膜があり、漆入れとして使用したものと考えられる。口径は8.0cm、高さは8.1cm、底径は5.4cm。

その他、24は壺の底部、25は甕の口縁部、26は平底の鉢bの口縁部である。28は高坏の口縁部で口縁端部を水平につくる。

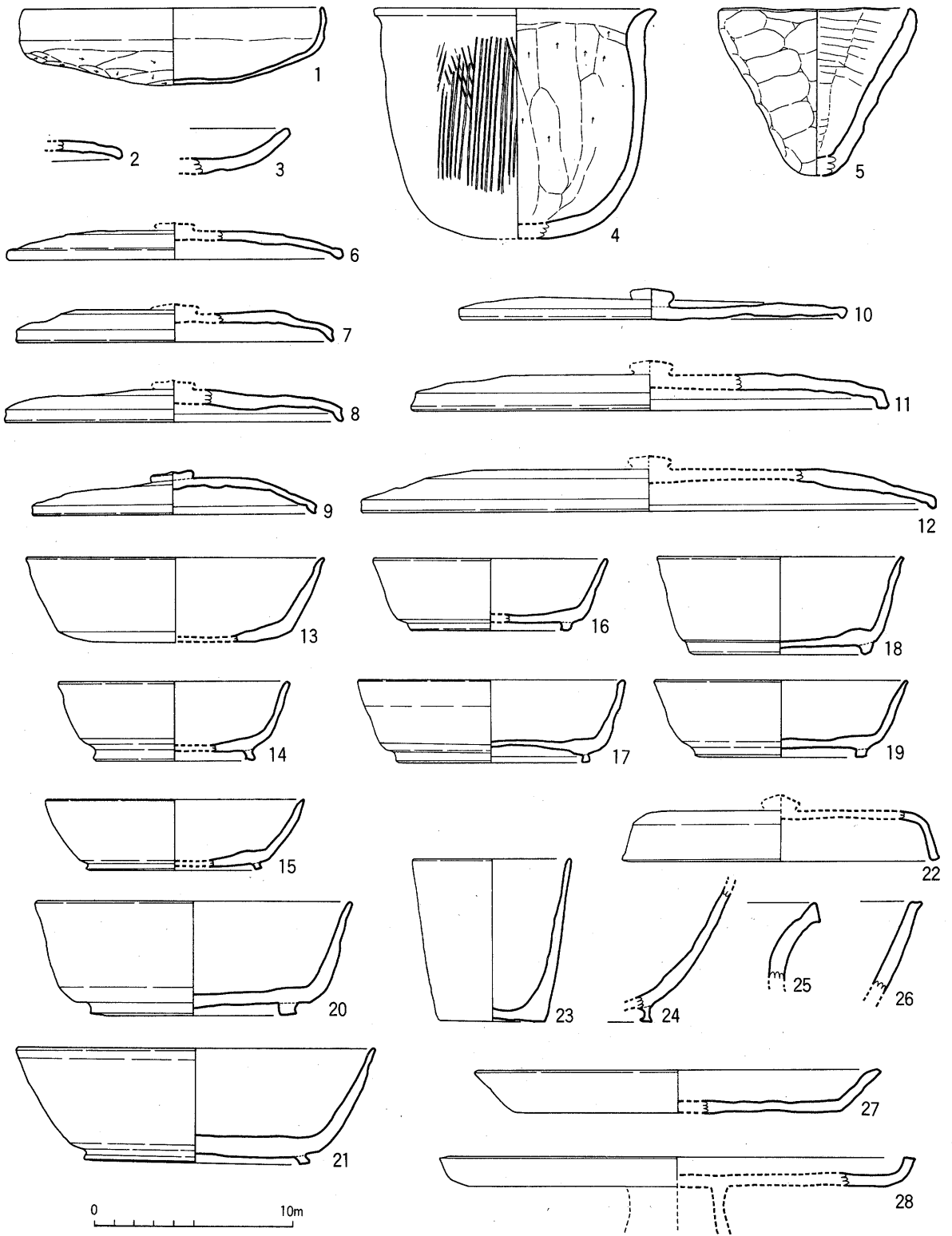


图19 SD001上層出土土器 (1/3)

S D 001下層出土土器 (図20・21、図版5～7)

土師器 (図20、図版5)

蓋c (1～3) 口縁部の断面は三角形を呈するもので、1、3は風化、磨滅して不明瞭であるが体部外面から内面全体にかけてみがきaを施していると思われる。天井部外面はへら削りされる。2の体部内外面は横なで、天井部内面はナデが施される。天井部外面はへら削りを行なっているが通例のものとは異なり、へら削りの稜線はシャープで器面は滑らかである。成形後、乾燥した段階で行なわれたものと思われる。

皿b (4) 口縁端部はわずかに内湾し、体部は中位で上方に屈折する。底部はやや丸味を有する。口縁部内外面は横なで、底部内面は調整不明瞭であるが、滑らかであり、ひっかいたような傷が多い。底部外面は手持ちによるへら削りを数方向から行なって器肉を薄くしている。胎土は緻密で焼成良く茶灰褐色を呈する。口径は15.0cm、高さは2.7cm。

皿a (5～7) 5の体部外面上位から内面は横なでされ、内面中央は軽くなでが施される。体部外面の下位は蓋cの2と同様なへら削りがなされシャープな稜を持ち、器面は滑らかである。底部外面はへら切りされ、幅1mmの板状圧痕が2方向にある。茶灰色を呈する。6の内外面は磨滅し、調整は不明瞭であるが体部外面は横なでされたものと思われる。7の口縁部は外反するもので内外面は磨滅している。口径11.0cm前後と思われる。

碗a (8、9) 8、9は器形、調整を類似するもので、体部はやや内湾ぎみに開き、底部は平坦で体部との境はシャープである。体部内外面は横なで、底部内面はなで調整され、体部外面中位から底部外面はへら削りして器肉を薄くしている。体部外面下半のへら削りは乾燥時に行なったもので、蓋cの2、皿aの5と共通の手法である。精良な胎土で淡茶灰色をなす。8の口径は18.8cm、高さは5.4cm、底径は11.9cm。9の口径は19.0cm、高さは5.1cm、底径は11.1cm。

大椀c (10) 底部の器肉が厚いことから大形の椀の底部とした。器面は磨滅するが内面はみがきaを加えたものと思われる。

高 坏 (11) 皿状をなす坏部の口縁部外面から内面全体にわたって細かいみがきaが施され、内面中央には漆状のものが付着している。坏部外面は口縁部を除いてへら削りされる。脚部内外面は磨滅して調整は不明瞭である。口径は26.7cm、高さは7.4cm。

甕a (12) 口縁部の内外は横なでを施し、体部内面はあらくへら削りされて口縁部との境にシャープな稜をつくる。

小甕a (13、14) 13の口縁部は短かめに外反し内外面は横なでされる。体部外面は刷毛目調整、内面はへら削りされる。外面には煤が付着する。14の口縁部は13に比べ長めに外反するもので、内面は横の刷毛目がある。体部外面は磨滅により調整が不明瞭であるが、縦の刷毛目調整と思われる。体部内面は斜めにへら削りされ、口縁部との境に鈍い稜線をなす。13の口径は18.5cm、14の口径は18.5cm。

A	B	口径	器高	底径	C	D
皿 a						
1	5	17.7	2.7	12.3	○	○
2	6	(20.0)	2.8	(15.0)	不明	不明

表5 S D 001下層土師器計測表 単位cm
A 番号、B 挿図番号、C 内底なでの有無
D 板状圧痕の有無、() 復原値

鉢a (15) 口縁部はゆるく外反し、底部は大きな平底をなす。体部外面の中位から上位、さらに内面にかけて横なでが施され、体部外面下位から底部外面にかけてへら削りされる。底部内面はなで調整される。把手は破損しているが、体部中位に対称的に2つ貼付されたと思われる。淡茶灰色に明るく焼成されている。口径は27.0cm、高さは13.3cmである。

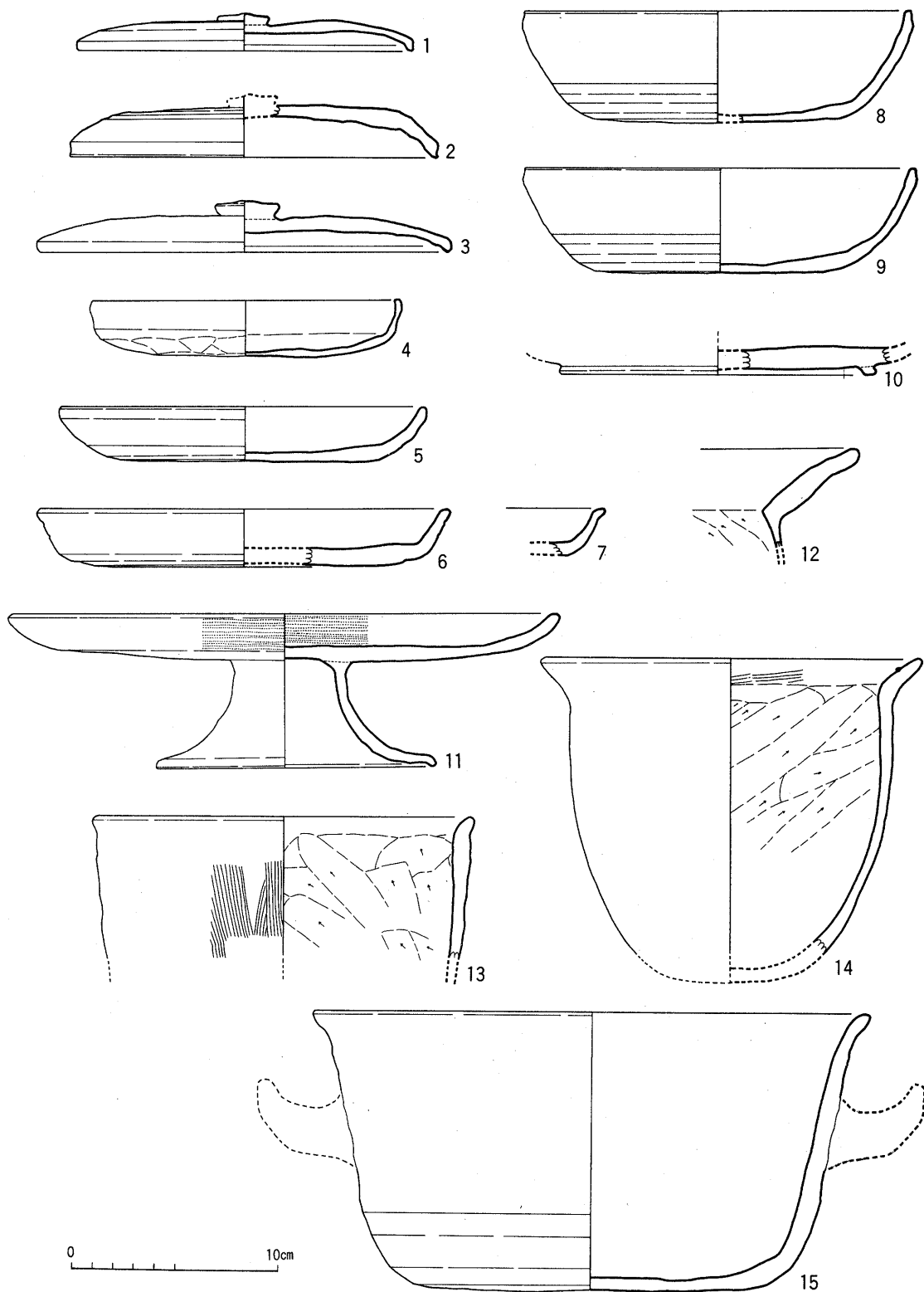


图20 SD001下層出土土器 (1/3)

須恵器 (図21、図版 6、7)

小蓋 a (16~18) 16の口縁部の断面は小さな三角形をなし、17、18の口縁部は大きめの三角形につくられる。口縁部の内外面は横なで、天井部の外面はへら削りされ、内面はなでが施される。16の口径は10.3cm、高さは1.0cm。17の口径は11.3cm、高さは1.8cm。18の口径は11.8cm、高さは1.5cm。

蓋 c2 (20、22) 体部内外面は横なで、天井部外面はへら削り、内面はなでが施される。

蓋 c3 (19、21、23、24) 19、21、23の口縁部断面はやや大きめの三角形をなし、口縁部と体部との境は明瞭に区別される。24は破片であるが、やや退化的で小さくつまみ出された口縁部をなす。調整についてはc2と同様である。

坏 a (25~27) 25、26の体部内外面は横なでされ、体部外面の下位と底部の境はへら削りされて丸味をおびる。底部外面はへら切りされ、内面にはなでが施される。27の器形はやや異なるもので体部は外反ぎみに開き、内外面は横なでされる。底部外面はへら切りされ、板状圧痕がつく。内面はなでが施される。体部外面下位と底部の境は、25、26とは異なりへら削りを加えずシャープな稜をなす。

坏 c (28~42) 最も多く出土した器種である。体部の器形は28~33、35~38のように体部下半と底部との境に丸味をもつものが多く、34、39~42のようにややシャープな稜をなすものもある。体部が外側に大きく開くものはみられない。高台部の断面形はやや大きな四角状をなすものが多く、29~38、42などは端部を上や外側にはね上げぎみにつくるもので、40、41は小さくて低い。体部の内外面は横なでされ、高台部周辺は横なで、底部内面はなでが施される。40の内面全体は横なでされる。体部下位に丸味をもつものは体部と底部の外面の境にへら削りを加えているもので31、36~38はへら削りのあとを残しているが、その他のものは横なでを施してへら削りのあとを消している。

皿 a (43) 口縁部は外反ぎみに開き体部内外面は横なでされる。底部外面はへら切り後、外周に沿ってへら削りを施し、体部との境にシャープな稜をつくる。内面はなでを施す。

壺 b (44) 長頸壺の口頸部破片で、口縁部から頸部内外面は横なでされる。口縁部下方に横なでによる鈍い段をもつ。

小 鉢 (45) 体部外面の中位から内面にかけて横なでを施し、底部外面はへら切りされ、体部下位から底部外周にへら削りをとどめる。口径は9.4cm、高さは8.2cm、底径は6.8cm。

A	B	口径	器高	底径	C	D
坏 a						
1	25	12.3	3.6	8.2	○	×
2	26	12.5	4.1	9.0	○	×
3	27	13.6	2.8	11.0	○	○
皿 a						
1	43	(19.5)	2.3	(16.5)	○	×

表6 S D001下層須恵器計測表 単位cm
A 番号、B 挿図番号、C 内底なでの有無
D 板状圧痕の有無、() 復原値

鉢 a (47) 鉄鉢型土器といわれる器形で、体部上位は丸く内湾し、口縁部上端は細くつまみ上げる。体部外面上位から体部内面中位にかけては横なでされ、体部内面下位はなでが施される。体部外面の中下位は丁寧へら削りされる。底部の形は図のように尖底ぎみのものか、ないしはもう少し丸味をおびるものであろう。

その他46は鉢 b の口縁部である。

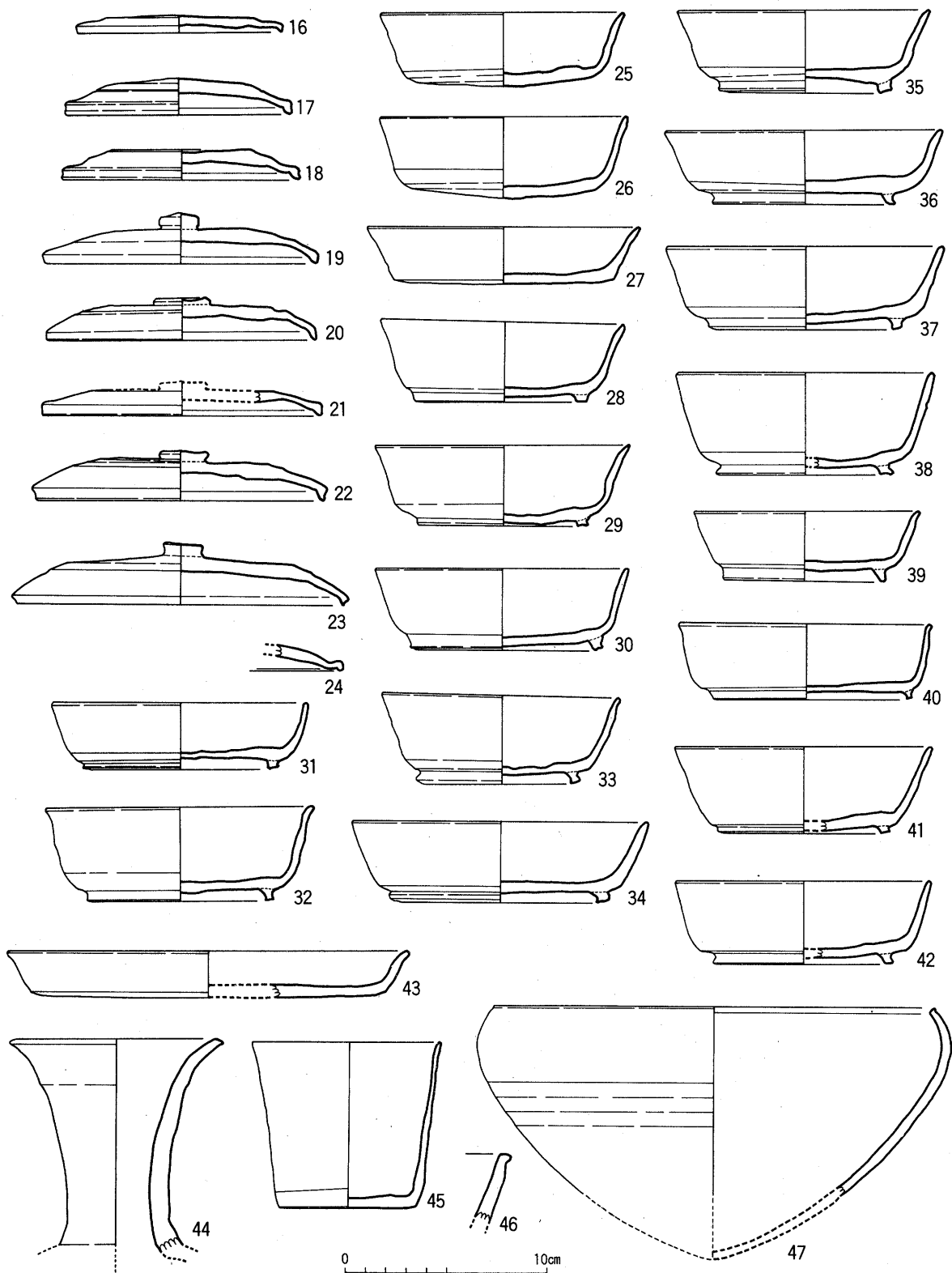


图21 SD001下層出土土器 (1/3)

第6 トレンチ出土墨書土器 (図22、巻首図版、図版8)

須恵器

1の口縁部断面は三角形をなす蓋c3で、天井部外面は体部との境にかぎりへら削りを加える。天井部外面に「元」の墨書がある。S D001上層出土。

2は蓋c2で天井部外面に墨書が認められる、不鮮明であるが「十」と思われる。黄灰色粘質土層出土。

3は坏cで体部はやや直線的につくられ、体部と底部の境はシャープな稜をなす。高台部の断面はがっちりとした四角形である。墨書は体部外面中位に認められるが、破片となって一部をとどめる。S D001下層出土。

4は蓋c2で体部内外面は横なでされる。天井部外面は雑なへら削りが加えられ、内面はなでが施される。つまみの上面に「南」と墨書される。S D001下層出土で上層の破片と接合した。

5は皿aで口縁端部は小さく外反し、体部外面上位から内面全体にかけ横なでされる。底部はへら切りされ、体部外面下位と底部の境はへら削りを加える。底部外面に「南」と墨書される。S D001上層出土。(巻首図版参照)

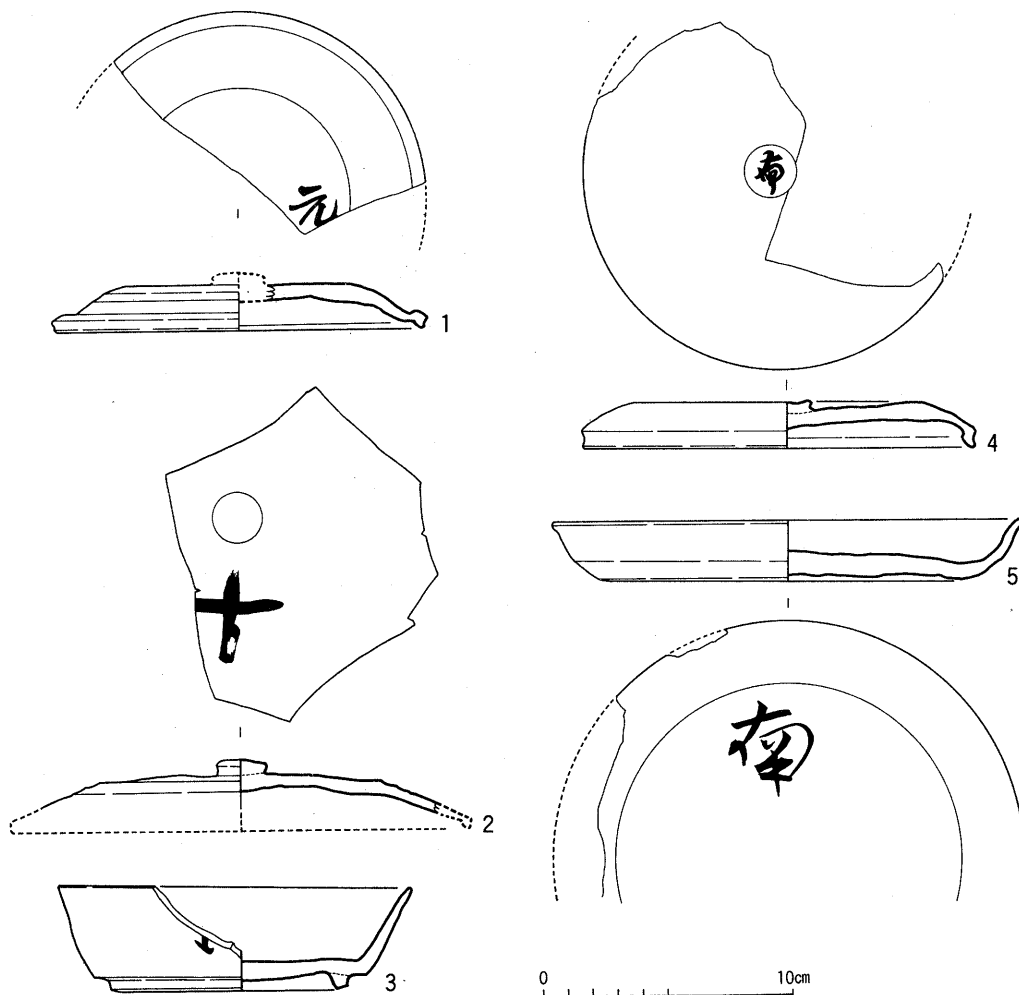


図22 第6 トレンチ出土墨書土器 (1/3)

第6トレンチ周辺出土土器 (図23、図版9、14)

土師器 (1~3)

1は小皿cで口径は12.0cm、高さは1.8cmをはかる。第6トレンチ暗灰色土層出土。2は小鉢aで体部に長めの把手が2つ貼付されると思われ、その1つをとどめる。口縁部は外反し、体部外面は刷毛目調整、体部内面はへら削りされる。第6トレンチ黄灰色粘質土層出土。

3は焼塩土器の鉢と思われ、型づくりによって製作されており、内面は1cmあたり6~7本間隔で編まれた布目がある。口縁端部は磨滅しており、図より若干器高が高くなるかもしれない。第16トレンチ黄灰粘質土層出土。

須恵器 (4~9)

4、5は蓋c3で4の内面は墨が付着し、硯に転用されたものと思われる。4、5は第6トレンチ排土中出土。6は壺蓋aで第6トレンチ黄灰色粘質土層出土。7、8は鉢bで8の体部外面はへら削りされ、底部外面の外周縁に沿って手持ちのへら削りが加えられる。底部外面に板状圧痕が認められる。7、8は第6トレンチ黄灰色粘質土層出土。9は大皿cで体部外面下位にへら削りをとどめる。第13トレンチ黄灰色粘質土層出土。

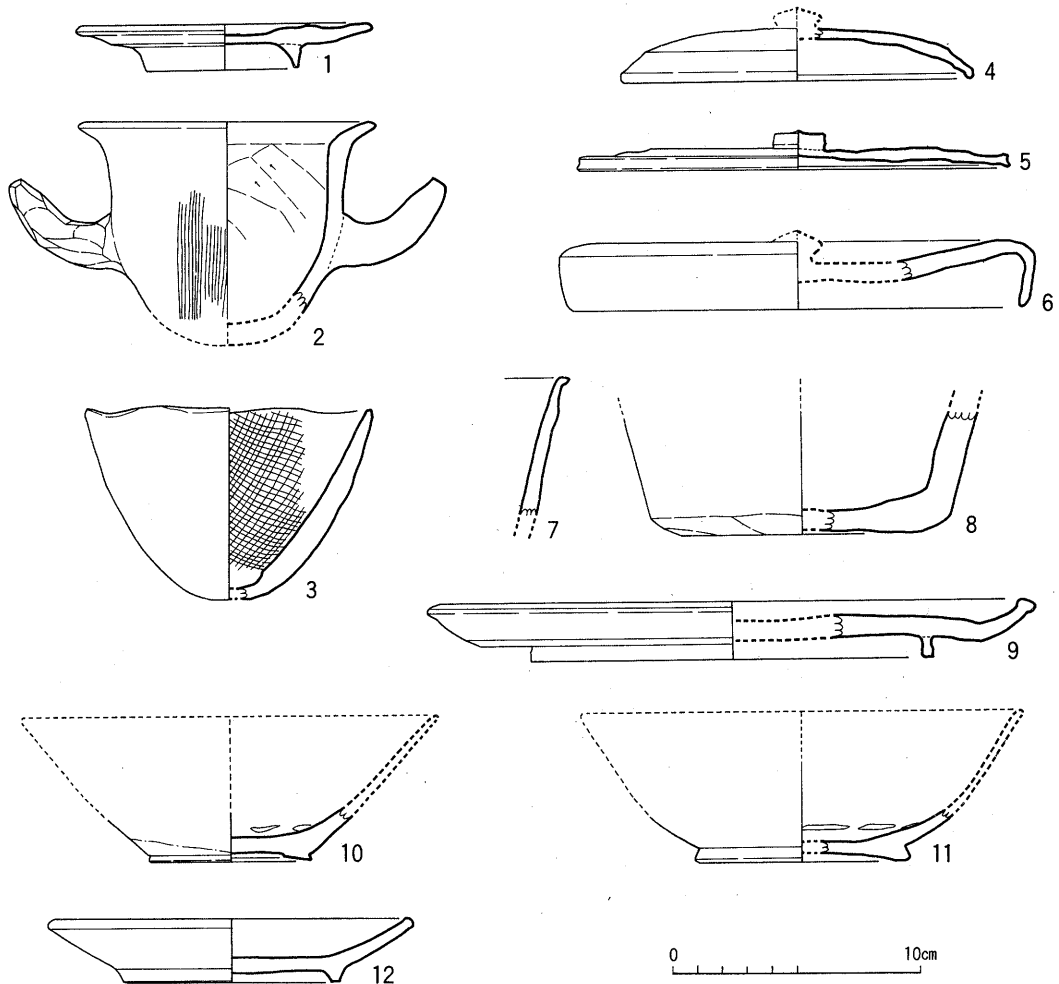


図23 第6トレンチ周辺出土土器 (1/3)

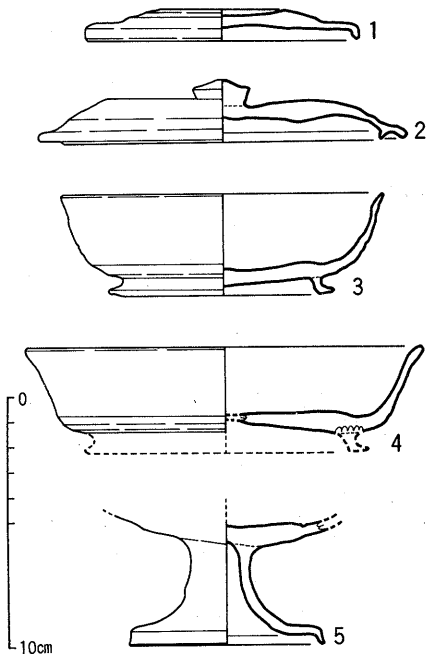


図24 第18・20トレンチ淡茶色粘土出土土器 (1/3)

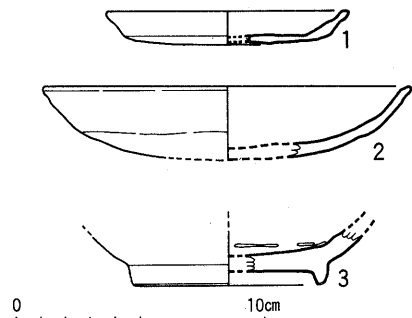


図25 SE005出土土器 (1/3)

A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a						
1	1	10.8	1.4	8.3	不明	○
丸底の坏 a						
1	2	14.8	(2.9)		不明	不明

表7 SE005土師器計測表 単位cm

A 番号、B 挿図番号、C 内底のなでの有無
D 板状圧痕の有無、() 復原値

陶磁器 (10~12)

10、11は越州窯系青磁碗で10はⅡ-4類(図版14-f)。11はⅡ-2b~d類(図版14-i)。10は第6トレンチ排土出土。11は第6トレンチ黄灰色粘質土層出土。12は灰釉陶器の高台付皿で胎土に細かい黒粒を多く含む。第6トレンチ黄灰色粘質土層出土。第18、20トレンチ淡茶色粘土出土層土器(図24、図版12)

土師器、須恵器、陶磁器がある。土師器は高坏、暗文手法をもつ碗cでいずれも破片である。陶磁器は越州窯系青磁Ⅱ類、白磁碗Ⅰ-1類(図30-6)、緑釉陶器破片がある。

須恵器 (図24)

小蓋 a (1) 口縁部は下方に屈折し、内外面は横なでされる。天井部外面はへら切りされ体部との境にへら削りを加える。内面はなで調整である。

蓋 c1 (2) 口縁部に身受けのかえりを有するもので体部内外面は横なでされ、天井部外面はへら削り、内面はなでが施される。

坏 c (3・4) 体部下位はへら削りされ丸味を有するもので、体部内外面は横なで、底部内面はなで調整である。高台は高く端部が横に張るしっかりしたもので4は高台を欠損している。

高坏 (5・6) 5は坏部を欠損するが6と同様な器形と思われる。6の坏部の体部内外面は横なでされ、外面はへら削り、内面はなでが施される。脚部の内外面は横なでされる。2・3・4と同一時期に属するものであろう。

SE005出土土器 (図25)

土師器 (1・2、表7)

小皿 a (1) 底部はへら切りされ、凹凸のある板状圧痕がつく。丸底の坏 a (2) 底部はへら切り後に内面から丸く突出させたもので、内面にみがき b を施す。

他に碗 c の破片、内面に黒漆を付着した碗の破片などがある。

青磁 (3)

碗 (3、図版14-e) 底部破片で輪状高台をなし全面に施釉された後、高台部置付をかき取っており、内面と同様な目あとがつく。釉は暗草色で泡が多く悪い。胎土は灰色でややあらい。

その他白磁碗Ⅱ類1点、白磁片3点、緑釉陶器片1点がある。

木製品 (図版18)

井戸内から出土したものである。aは碗で底部内面に黒漆が残る。ロクロびきされている。bは坏で漆はみられない。cは木釘の打たれた部材破片。

SD010出土土器 (図26、図版10・11、表8)

土師器 (1~11、図版10、表8)

小皿c (1) 底部はへら切りされたものである。

坏a (2~6) 底部はへら切りされる。口径は11.6~12.2cm、高さは2.6~3.4cm、底径は5.7~8.5cm。

碗c (7・8) 7の体部は丸味をもち口縁端は外へ小さくつまみ出される。8の体部はあまり丸味がなく口縁部を肥厚させるにとどめる。

中碗c (9・10) 9はc2で体部に丸味をもち、10はc1で体部は直線的に外側へ開く。

甕 (11) 口縁部は外反し体部上位の内外面に強く横なでを施す。体部外面中位から底部外面には平行叩きがなされ、この内面はなでで凹凸を消している。また別個体の格子目叩きを有する破片がある。

他に土鍋破片、黒色土器片がある。

灰釉・緑釉陶器 (図26-12、図版11-a~e)

12は灰釉陶器で黒粒の入る灰白色の胎土をなし、碗ないし皿の破片 (図版11-a)。b~dも灰釉陶器でbは壺の破片。eは緑釉陶器の破片である。

青磁 (図版11-f~m)

越州窯系青磁I、II類の破片である。

A	B	口径	器高	底径	C	D
坏a						
1	2	11.6	2.6	5.7	○	○
2	3	11.6	2.8	8.5	不明	×
3	4	11.8	2.7	7.3	〃	○
4	5	12.1	3.1	7.4	〃	×
5	6	12.2	3.4	7.0	〃	○
小皿c						
1	1	11.5	2.6			
中碗c						
1	9	12.0	4.3		○	○
2	10	12.4	4.2		○	×
碗c						
1	8	16.0			不明	○

表8 SD010土師器計測表 単位cm

A番号、B挿図番号、C内底のなでの有無
D板状圧痕の有無

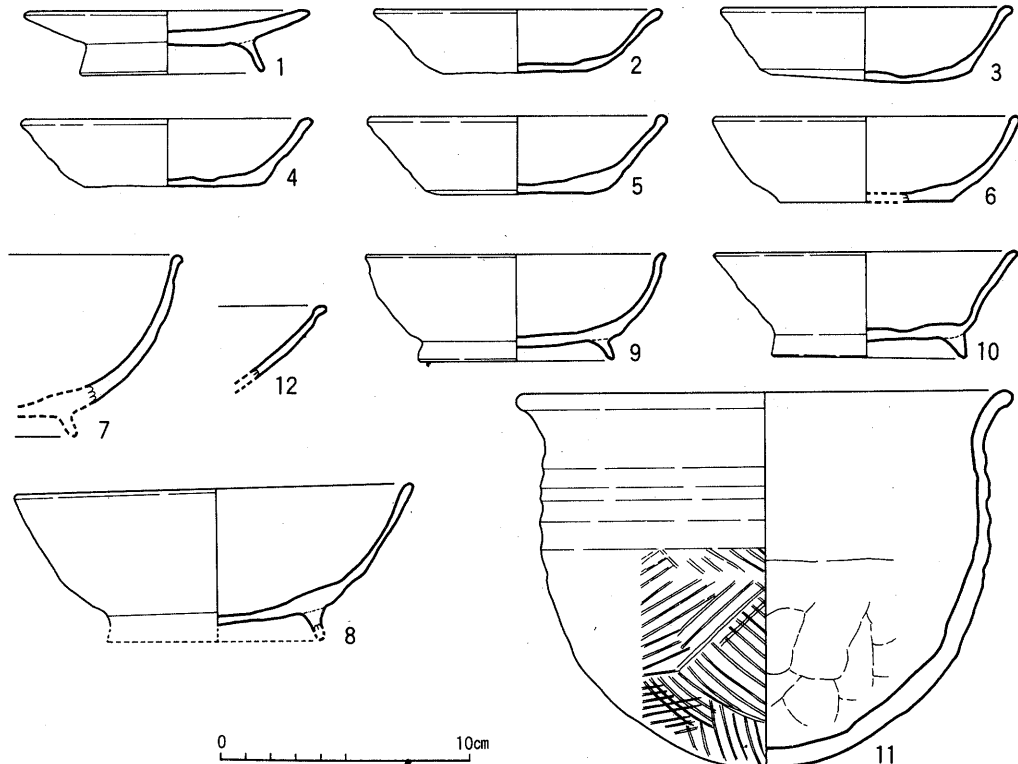


図26 SD010出土土器 (1/3)

S K015出土土器

土師器（図28、図版12、13、表9）

大蓋c（1） 口縁部の断面は三角形をなすもので内外面にみがきaを施す。

蓋c（2） 内外面は磨滅し調整は不明瞭であるが天井部外面はへら削りと思われる。

坏・大坏d（3～5） 坏aに比べ、体部に丸味をもって大きく開くもので、3・5の底部と体部の境はシャープな稜をなし、体部外面から内面全体にみがきを加える。底部外面はへら削りされる。4の体部外面上位はみがきaを加え、中位から底部外面にかけてへら削りされたと思われる。内面は磨滅して調整は不明瞭である。

壺（6） 体部外面上位から内面にかけて横なでされ、体部外面下位はへら削りされる。

小甕a（7） 口縁部は外反し、丸底をなすもので体部内面は縦のあらいへら削りが施され、口縁部との境はシャープな稜をなす。胎土に粗砂を含んでいる。

甕a（8） 口縁部は強く外反し、内面は横の刷毛目を施す。体部外面は縦の刷毛目調整、内面は斜めのあらいへら削りに加え、口縁部と体部の境はシャープな稜をなす。胎土に粗砂を含む。

鉢（10・11） 焼塩土器で外面は指押えによる凹凸が多く、内面はなで調整されている。10の胎土はやや良く、火熱をうけ外面は暗青灰色を呈して傷んでいるが焼成はよい。11は胎土に粗砂を含み焼成良く、内外面茶灰色を呈する。このタイプの鉢は約6個体分出土している。

壺（12・13） 壺形の焼塩土器で3個体ほどあり、胎土、焼成は鉢10・11とよく似ている。型づくりによって製作されたもので12の外面は指押えによる凹凸があり、内面には1cmあたり8本前後の間隔で編まれた布目が残る。胎土に粗砂を多く含み焼成はよいが、外面は火熱をうけボロボロして暗赤茶色に変化し、内面は淡茶色をなす。13はこの種の底部破片で、外面は指押えによる凹凸があり、内面には1cmあたり12本前後で編まれた細かい布目が残る。胎土は粗砂を含むがきめ細かく、内外面は赤褐色を呈する。なお、10、12は破片であり、太宰府町市ノ上遺跡の出土例を参考として図上復原したものである。

^{かまど}竈（14、図版10） 移動式のもので、図27のように本体と庇とを別々に製作して貼付けた後、接合部分に粘土を補足したものである。体部はやや胴張りをもち上部がすぼんだ筒形をなしており、焚口部分は切り取っている。把手は焚口の両側胴部につくものであるが欠損している。胴部外面は磨滅するが縦の刷毛目調整で、内面の中下位は縦方向、上位は斜め方向のあらいへら削りが施される。上端部の内面は横なでされる。胎土は粗砂を含み茶灰色をなす。体部内面上位には煤が付着する。

その他9は器形が不明であるが何かの脚部か器台の破片と思われる。高坏破片も出土している。

*1 市ノ上遺跡の焼塩土器については森田勉氏から資料のご教示をいただいた。明記して謝意を表明する。

A	B	口径	器高	底径	C	D
土師器 坏d						
1	3	14.6	3.2	6.4		
土師器 大坏d						
1	4	17.8	4.4			
2	5	18.8	3.8			

表9 S K015土師器計測表 単位cm

A番号、B挿図番号、C内底のなでの有無
D板状圧痕の有無

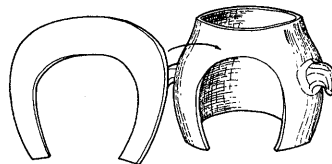


図27 竈製作模式図

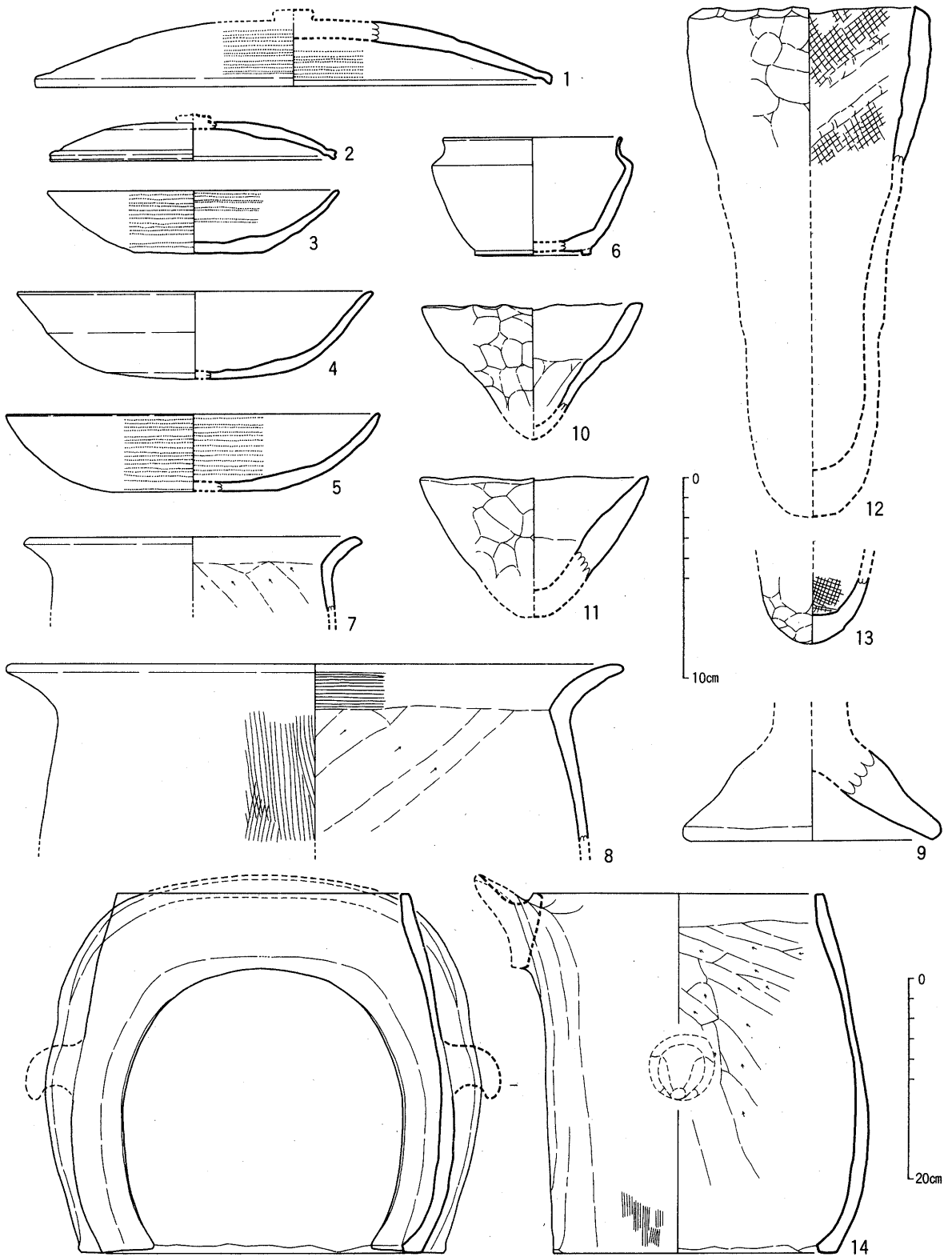


图28 SK015出土土器 (1~13·1/3, 14·1/6)

須恵器 (図29、図版12、表10)

蓋 c3 (15~19) 口縁部の断面は三角形を呈するもので、15~17は端部が丸くしっかりした三角形のものと比べると退格的である。体部内外面は横なでされ、天井部外面はへら削り、内面はなでが施される。19はやや大形のものでS K 015の直上で出土した。

口蓋 a (20) 口縁端部は平坦につくられ、体部内外面は横なでされる。天井部外面はへら削り、内面はなでが施される。つまみを欠損する。

坏 a (21, 22) 体部は直線的に外上方へのび、内外面は横なでされる。底部外面はへら切りされ、内面はなでが施される。体部外面下位にへら削りはみられず、体部と底部の境はややシャープな稜をなす。21は底部外面に2方向の板状圧痕を有する。

坏 c (23~27) 体部は坏 a と同様に直線的に外上方へ開き、25のように口縁部を外反させるものもある。23、24の高台は小さくて低く、25~27の高台断面は四角形をなす。体部内外面は横なでされ、底部内面はなで調整である。25の体部外面下方はへら削りをとどめるが23、24、26、27は横なで仕上げられる。体部と底部の境は坏 a 同様に丸味が少なく、シャープにつくられるものが多い。25の底部外面には板状圧痕がみられる。

碗 c (28, 29) 体部の形態は坏 a、坏 c と基本的に同様であり、直線的に外側へ開く。体部内外面は横なでされ、底部内面はなでが施される。体部と底部の境はシャープな稜をなす。

皿 a (30, 31) 体部は外側に開き、口縁部はやや外反する。体部内外面は横なで調整を行ない、底部はへら切りされ、内面にはなでが施される。30の体部外面下半はへら削りされている。

高 坏 (32, 33) 32は比較的長い脚部で33のような断面三角形の端部がつくものと思われる。脚部内外面は横なでされる。

甕 b (34) 大形の甕の口縁部で、端部下約3cmのところ上方へ屈折して二重口縁をなす。内外面は横なでされ、焼成時に灰をかぶり自然釉がかかる。胎土は精良である。大宰府史跡第64次調査のS X1546から類似するタイプのものが出土している^{*1}。

円面硯 (35) 台部の小破片であるため全体を知り得ないが、外縁の内外面は横なでされ、端部下2cmに低い凸帯を有する。体部にはへら状のもので切り取られた数個の透し孔がある。

その他S K 015からは砥石1点、軽石1点、滑石片1点、チャート剥片1点などの石製品が出土した。

*1 石松好雄ほか「大宰府史跡昭和54年度発掘調査概報」九州歴史資料館 (1980)

A	B	口径	器高	底径	C	D
須恵器 坏 a						
1	21	12.9	3.5	9.1	○	○
2	22	13.2	3.3	9.5	○	×
須恵器 皿 a						
1	30	17.2	2.1	14.4	○	×
2	31	17.2	2.3	13.8	○	×

表10 S K 015須恵器計測表 単位cm

A 番号、B 挿図番号、C 内底のなでの有無
D 板状圧痕の有無

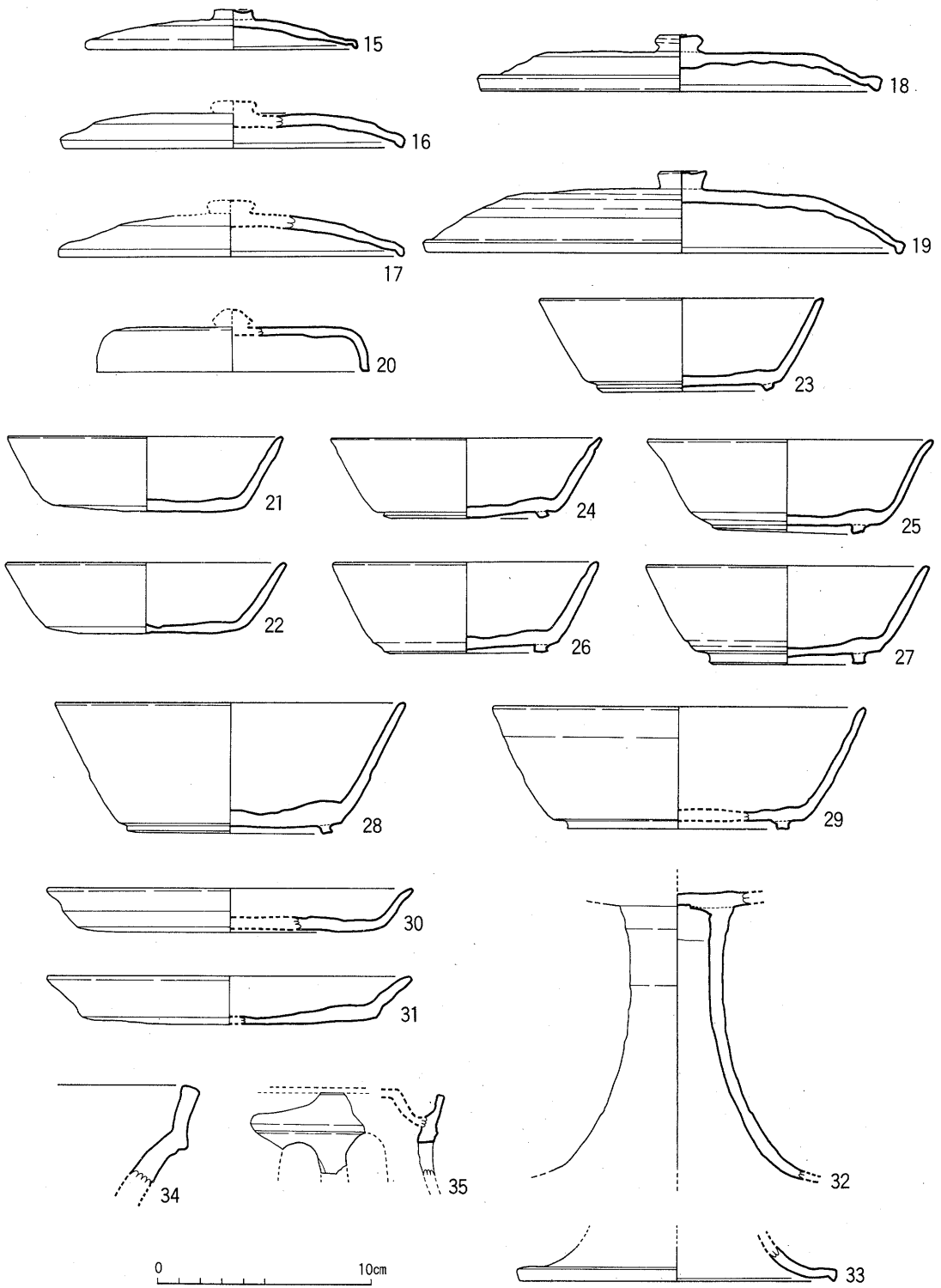


图29 SK015出土土器 (1/3)

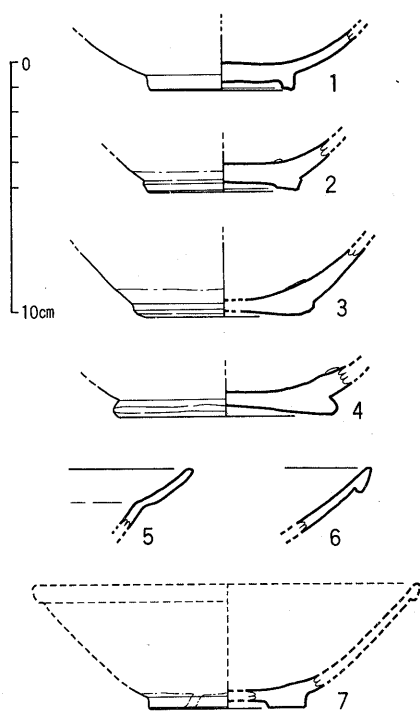


図30 その他の陶磁器 (1/3)

その他の陶磁器 (図30、図版14)

各トレンチから出土したものである。

緑釉陶器 (図版14-a)

碗 (1) 高台は削り出されたもので、内面はみがきcが施される。内面全体から外面の高台部外面まで施釉され、高台みこみは釉をかけない。胎土は須恵質で堅く焼成され淡茶灰色をなす。第23トレンチ表土層出土。

青磁 (図版14-d、g、h、j)

碗 (2~5) 越州窯系青磁で2~4はⅡ類に属し発色の悪い草色をなす釉調のもので体部下半には施釉しない。5は黄緑色に発色する精良なⅠ類のものである。2はⅡ-2 a類でへら削りにより浅い高台をつくる。内面みこみおよび高台端部に目あとがあり、胎土は黒粒を含まず茶黄色味を呈する (g)。第19トレンチ床土出土。3はⅡ-3類であげ底ふうの平底をなす。内面みこみおよび底部の外縁に目あとがあり、胎土は黒粒を含み茶灰色を呈する (h)。第19トレンチ床土出土。4はⅡ-2 b~d類の底部で円板状のあげ底をなす。底部外周はへらなでされている。内面みこみに目あとがあり、胎土は黒粒を含み灰色を呈する (j)。第19-Bトレンチ床土出土。5は碗以外の器形も考えられる。黄緑色に発色する精良なⅠ類の破片で胎土は茶色をおびた灰色を呈する (d)。第2トレンチ上層出土。

白磁 (図版14-b、c)

碗 (6、7) いずれも碗Ⅰ類に属し、6の口縁部は小さな玉縁をなし、胎土は良質で純白色を呈する。光沢のある乳白色の釉である (b)。第18トレンチ淡茶色粘土層出土。7は蛇の目高台で6のタイプの底部である。胎土は茶色をおびた白色を呈し、高台部外面を除き乳白色の釉がかけられる (c)。第3トレンチ上層出土。

2 瓦類

文字瓦 (図31、図版15)

「平井」 1、2は「平井瓦」銘を有するものである。1は細い斜格子目の叩きを有し、左字に陽刻されている。2は正字に陰刻されている。ともにSD010出土。

「佐」 3、4は「佐瓦」銘を有するもので、3は縦に長い斜格子の叩きを有し、左字に陽刻される。SD010出土。4は「作」とも読めるが「佐瓦」の異体字と考えられており、正字に陽刻される。第6トレンチ暗灰色土層出土。

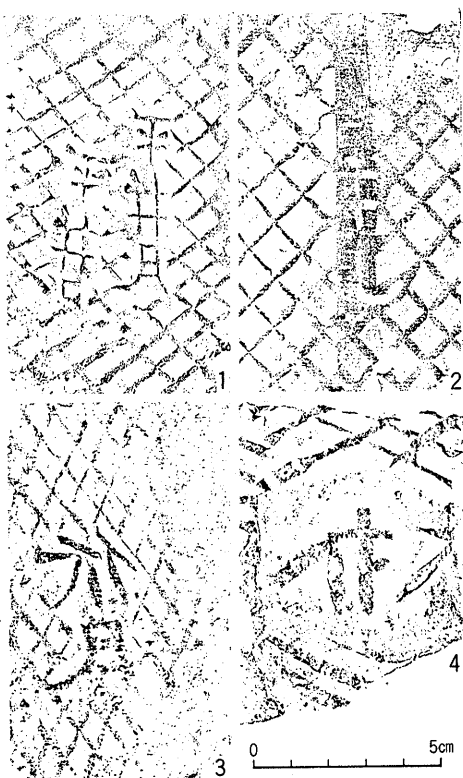


図31 文字瓦拓影 (1/2)

3 石製品、金属製品

打製石器 (図32、図版16)

石 鏃 (1) 半透明の黒曜石を使用したもので細部は丁寧に剥離され、縄文時代のものである。第6トレンチ床土出土

石 匙 (2) サヌカイト製で片面に自然面を残し、両面から押圧剥離されている。縄文時代のものであろう。第16トレンチ黄灰色粘質土層出土。

磨製石器 (図33-1、図版16)

石 斧 (1) 玄武岩質の太形蛤刃石斧で、表面は灰白色に風化している。刃部を欠損し、頭部には敲打痕を残す。弥生時代のものである。第5トレンチ灰砂出土。

その他の石製品 (図33-2、3、図版16)

2、3は滑石製で、全体は刃物で削られている。上部中央は両面から穿孔されており、下方に開く分銅形をなす。

3の表裏面は孔の下方に刃物で陰刻された縦線がみられる。

2、3は第19-cトレンチ床土出土。

鉄製品 (図33-4、図版16)

錐 (4) 四ツ目錐で基部から5cmに柄部の木質が残存し、先端は折れ曲がっている。柄部とのつけ根の断面は一辺5.5mmの方形をなす。長さは12.7cm。S E 005出土。

その他の石製品、鉄製品については表11に示した。

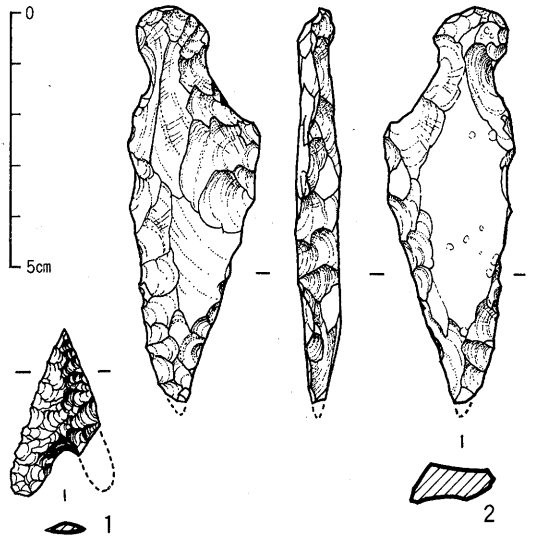


図32 打製石器 (2/3)

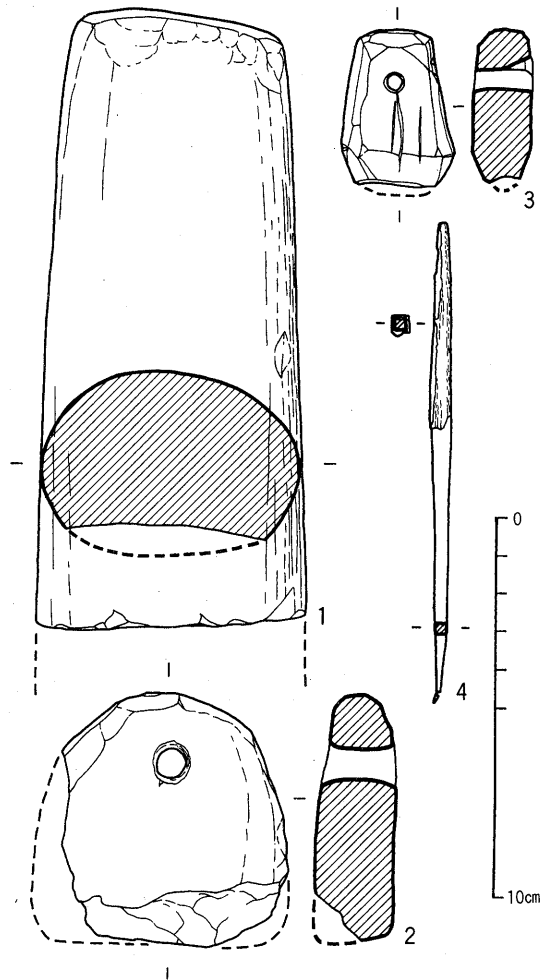


図33 その他の石製品、鉄製品 (1/2)

表11

遺 構	鉄 製 品 ほか	石 製 品
SD 010	釘、不明鉄製品 2	
SE 005	錐 1 (図33-4)	滑石製石鍋片 2
SK 015		砥石 1、軽石 1、滑石片 1、チャート片 1
第6トレンチ 暗灰色土	棒状鉄製品 1	滑石製石鍋片 1、 黒曜石片 1
第6トレンチ 黄灰色粘質土	鉄滓	
第16トレンチ 黄灰色粘質土	フイゴ羽口 1	石匙 1 (図32-2) サヌカイト製石器 1
第17トレンチ 表土・床土		硯片 1
第18トレンチ 表土・床土	鉄滓	黒曜石製剥片石器 1
第18トレンチ 淡茶色粘土	不明鉄製品 2、鉄滓	

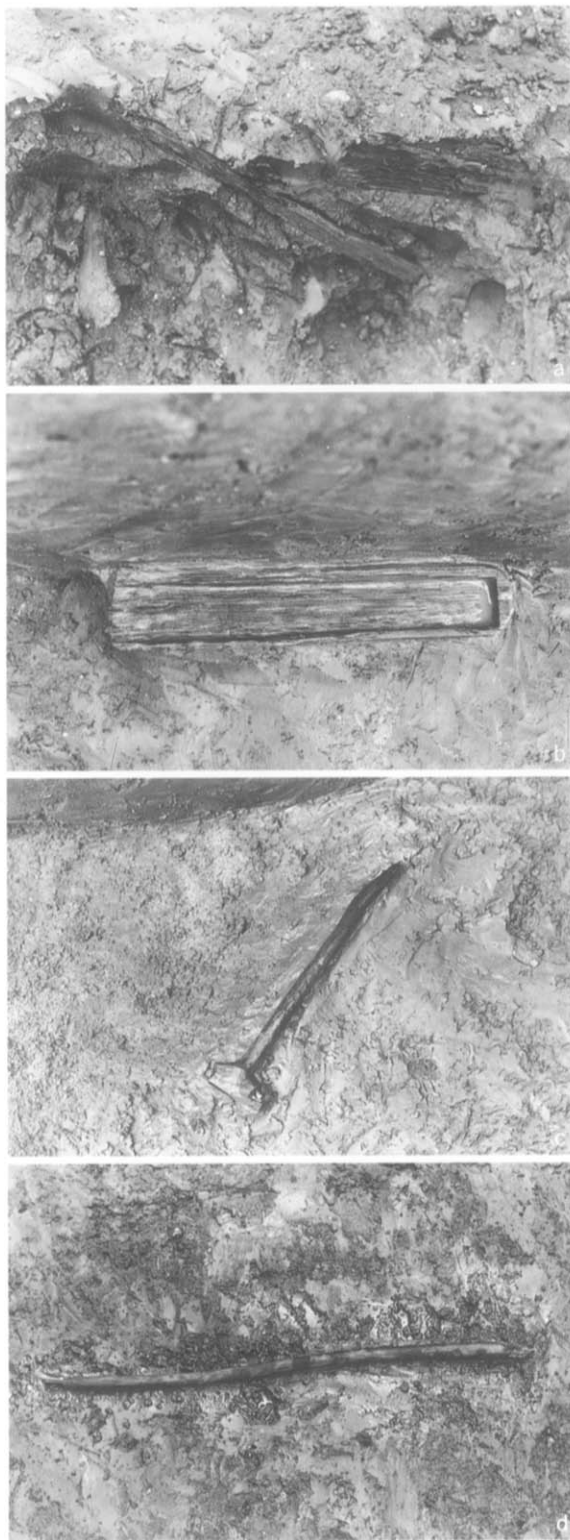


図34 木製品出土状態
 a. 木簡その他 b. 舟形木製品
 c. 手斧柄 d. 丸木弓

4 木製品

S D001下層出土木製品（図35、36、図版17、18）

木簡（図版17） 表裏面に墨書されるが破片で字は読めない。現存する長さは23.5cm、幅は1.7cm。

祭祀用具（図35、図版17、18）

舟形木製品（1～3、図版18—10） 1は角材を鋸で切断し、先端はやや細く削り、内部をくり抜いたもので、底部は舟底形の断面につくる。底部に円孔を穿ち細い棒をさし込んでいる。小口に近い上面の両側辺に細い棒が打ちこまれ端部中央には円孔が穿たれる。一端を欠損するが現存する長さは35.7cm、幅は6.2cm、高さは2.5cm。2は底部断面が四角をなすもので両側面の上位と一方の小口の上面に円孔がある。円孔は側面に3ヶ所ずつ、小口上面に1ヶ所穿たれ中に棒が残存している。長さは21.6cm、幅は7.0cm、高さは3.3～4.6cm。3は粗雑なつくりで両端部は先細りに削られ、上面中央は若干削り込んで甲板を表現したものであろう。長さは18.4cm、幅は4.0cm、高さは2.5cm。図版18—10は1と類似したもので箱形につくられる。

工具、武器、その他（図36、図版17、18）

錐柄（4） 円棒状に削られ、錐を打ちこんだあとがある。長さは6.0cm、直径は2.0cm。

手斧着装柄（5） 二又部分の枝を切断し柄部は丸棒状に、鉄斧の着装部は扁平に削る。長さ32.7cm。

鳴籥？（8） 中空につくられ、上面中央に径8mmの円孔、側面に径4mmの小円孔を穿つ。側面の小円孔は2ヶ所残存するが、位置からみて4孔を穿ったものである。上部に幅1.5mmの溝をめぐらす。外面は黒漆塗りである。現存する長さは2.6cm、最大径は3.0cm。

丸木弓（9） 断面は円形をなし全体は縦に細かく削られる。端部の弭は細かい削りを加えて凸形に整形する。一端を欠損するが長さは99.0cm、最大径は2.2cm。

その他6は一端を尖がらせた断面円形の棒。7は上部の側片に切り込みを入れた断面四角の棒。図版18—11は先を尖がらせた断面半円形の棒。12は板材。他にS D001下層からは編物断片や板、棒状の部材などが出土した。

S E005出土木製品は本文22ページに示した。

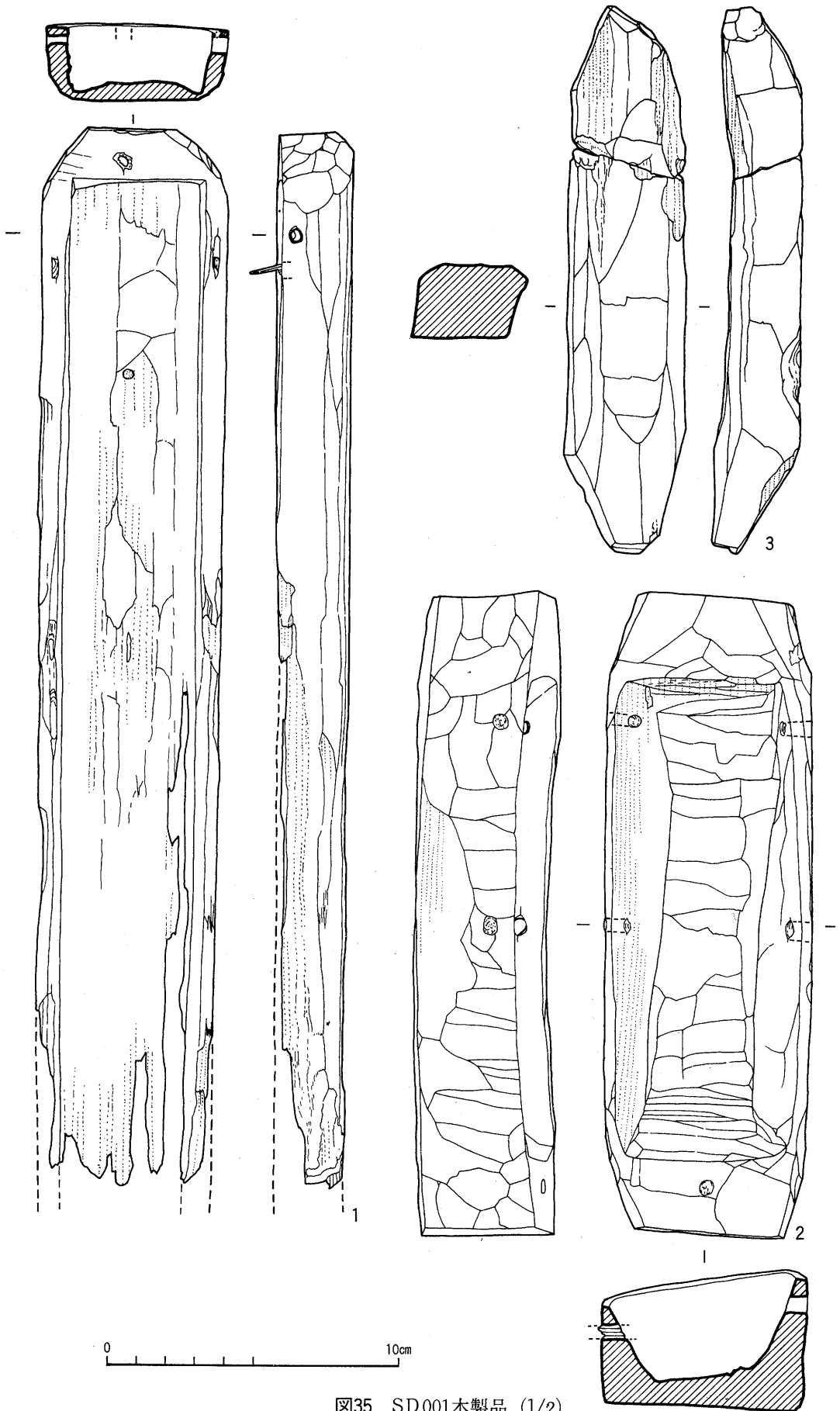


图35 SD001木製品 (1/2)



图36 SD001木製品 (1/2)

Ⅳ まとめ

1 遺跡の特色と年代

遺跡の範囲 今回の対称地域については標高28m以下の低地が多いことから調査以前には遺構の存在について消極的な意見さえ出されたほどであった。しかし発掘調査の結果、遺跡の一部は後世に大きく掘削されたものであって過去には微高地をなしていたことが判明し、先入観からくる外見的判断に注意を与える原因となった。トレンチ設定はほぼ全域におよぶものであったが、現在の市街地には多数の家屋が建て混み、この地域についてはほとんど発掘調査が不可能な状態であった。したがって必ずしも今回の調査において全容を知りえるにはなお資料不足の感を免れないが、おおよそ図37に示すように、遺跡の範囲は現在の西鉄大牟田線より南側の住居地帯と南北に走る国道3号線に沿った住居、工場地域にほぼ限定して考えることが可能である。この点については標高28mコンターを地形図上に表わした場合に、この28mのコンターと遺跡の範囲の限界がほぼ一致する傾向を示していることから立証されうる。こうして今後の開発に対応する1つの材料ともなりえたわけである。

S D 001の性格と年代 検出された範囲内では溝に限らず土壌、池などの可能性も有するが、ここでは延長部の可能性を考慮して一応、溝としておきたい。溝と仮定すると、従来の条坊復原案に対して位置、方位とも異なっており注意を促す。これらの諸点について今後の調査で解明されることを期待したい。年代的には下記に示した土器の編年から8世紀前半から中頃を中心としたものと考えたい。

S E 005の年代 土器から11世紀後半を前後する時期と推定される。このタイプの井戸の盛行する時期については11世紀後半から12世紀後半の実年代が与えられている^{*1}。

S D 010の性格と年代 東西方向の溝で延長部の規模が問題となるが、十条と十一條の間の推定線に平行して走る点注意される。年代については土器から10世紀初頭を前後した時期と推定される。

S K 015の年代 S K 015の土器は甕、竈などの煮沸用、蓋、坏、鉢などの供膳用、焼塩土器など生活容器の諸形態を含むものであることから、集落に関係する遺構として判断されうる。土器は8世紀後半のものであり、一帯に奈良時代集落の存在を推定することができる。

周辺遺跡および条坊との関連 今回の主要な目的は第1に条坊そのものを追求することであったが、調査の外的な制約も如え、十分に遺跡そのものの把握までには至らない。しかし条坊解明の発掘的なアプローチとして二、三の問題点を整理することができる。

第1点は条坊の存在についてであるが、今回の調査において過去と同様、条坊の区画基準を裏づける遺構の検出に乏しい。条坊区画に直行させた多くのトレンチには溝、道路などの遺構は検出されていない点を考慮すると、郭内全体にわたって条坊が施行されていたものか疑問が生ずる。

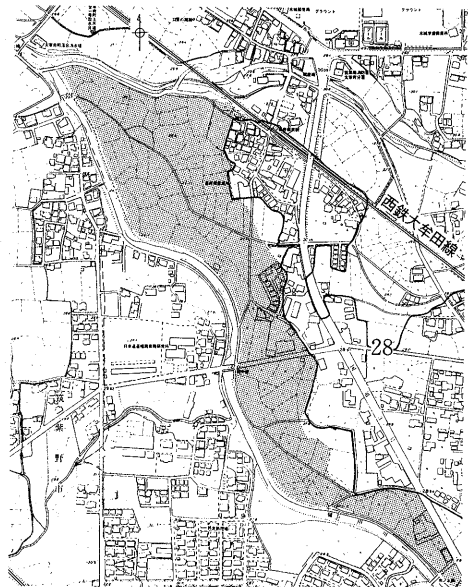


図37 遺跡の範囲

遺構の認められない地域

第2点は検出された溝の年代である。S D001を溝と考えるならば奈良時代には復原条坊案の規格に合致しない区画が存在することになる。次に10世紀前後のS D010ではそのあり方を積極的に取り上げるならば、この溝が直接的に条坊区画そのものに伴うか否かは別としても、条坊の何らかの基準に基づいて設計された可能性は十分考えられ、復原条坊案を是定する材料となりうる。このように奈良時代の溝と平安時代の溝のあり方についても今後、解明していく必要がある。

第3点は今後の条坊解明に計画性と効果的な方法を盛り込む必要性を提案したい。今回の調査対象区域およびこの地域と鷺田川をはさんで南側に所在する市ノ上遺跡^{*2}は奈良から平安時代初頭にかかる遺構を比較的良好に保存している。このような状況は平安時代後半から中世の遺跡が密集する観世音寺、学校院の南側地域と比較して、奈良時代の条坊地域を解明する格好の場と思われる。今後、この地域一帯の詳細な調査が望まれる。

2 土器の年代について

大宰府跡出土の土器については8世紀から15世紀にわたる約700年間の変遷^{*3}を捉えることが可能であるが、なお8世紀前後の土器については資料不足の感を与える。今回のS D001、S K015の土器は8世紀の資料を補足する意味で注目されるものである。

これまでに大宰府周辺で検出された7世紀後半から9世紀初頭前後に至る土器について各段階の標式的遺構として代表されるものに次のものがある^{*4}。

- I、大宰府政庁跡第1次整地層……………7世紀後半
- II、大宰府政庁跡中、南門基壇出土長・短頸壺……………8世紀初頭～前半
- III、……………8世紀前半
- IV、S K1280、1285……………8世紀中頃～後半
- V、S E1081、S K1084……………8世紀後半
- VI、S E1340、筑前国分寺S K053……………8世紀後半～9世紀初頭
- VII、S E400……………9世紀初頭前後

これらのうちII、IIIの資料については個別的にみれば少なくはないが、現在のところ良好な一括遺物が少なく、他地域のもので代用が必要である。

S D001の土器 上、下層については時期的な隔たりはみられない。やや退化的口縁をもつ須恵器蓋c3や、低平化した高台を有し、体部下半のへら削りを横などで消した坏cなど上述のIVの段階の主流となるものを少量含むが、大半はこれより先行する要素を持つ土器の一括資料でありIIIの段階を埋めるものと考えられる。この点から現在のところ8世紀前半から中頃としておきたい。

S K015の土器 須恵器の坏c及び蓋c3からVより若干先行する様相を有すると思われIVに入れる。

第18・20トレンチ淡茶色粘土の土器 器形・手法の特徴はIの中でも古いタイプに属する。

以下に述べる遺構の土器は註*3の土師器編年に基づいている。

S E005の土器 小皿aはやや大きめ、丸底の坏は小さめの傾向を呈する。このことから、S K802からS D1330の間に位置するものと思われ11世紀中頃から後半に推定される。

S D010の土器 坏aはS K678に属し、碗c1、c2のあり方も共通している。10世紀初頭前後に考えられる。

*1 横田賢次郎「大宰府検出の井戸一とくに形態分類を中心として」『九州歴史資料館研究編集』3 九州歴史資料館(1977)

*2 高倉洋彰、横田賢次郎、山本信夫、副島邦弘「観世音寺出土の唐三彩」『考古学雑誌』第64巻第1号(1978)

*3 横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館(1978)

*4 *3のほか次の文献によった。

『大宰府史跡』(1978)

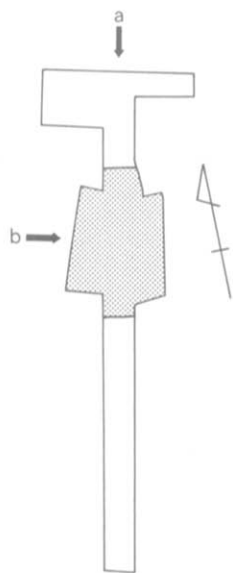
亀井明徳、高橋章「向佐野、長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車関係係埋蔵文化財調査報告』VI 福岡県教育委員会(1975)

図版



調査地区周辺
航空写真

図版1 第6トレンチ



SD001北から



SD001西から



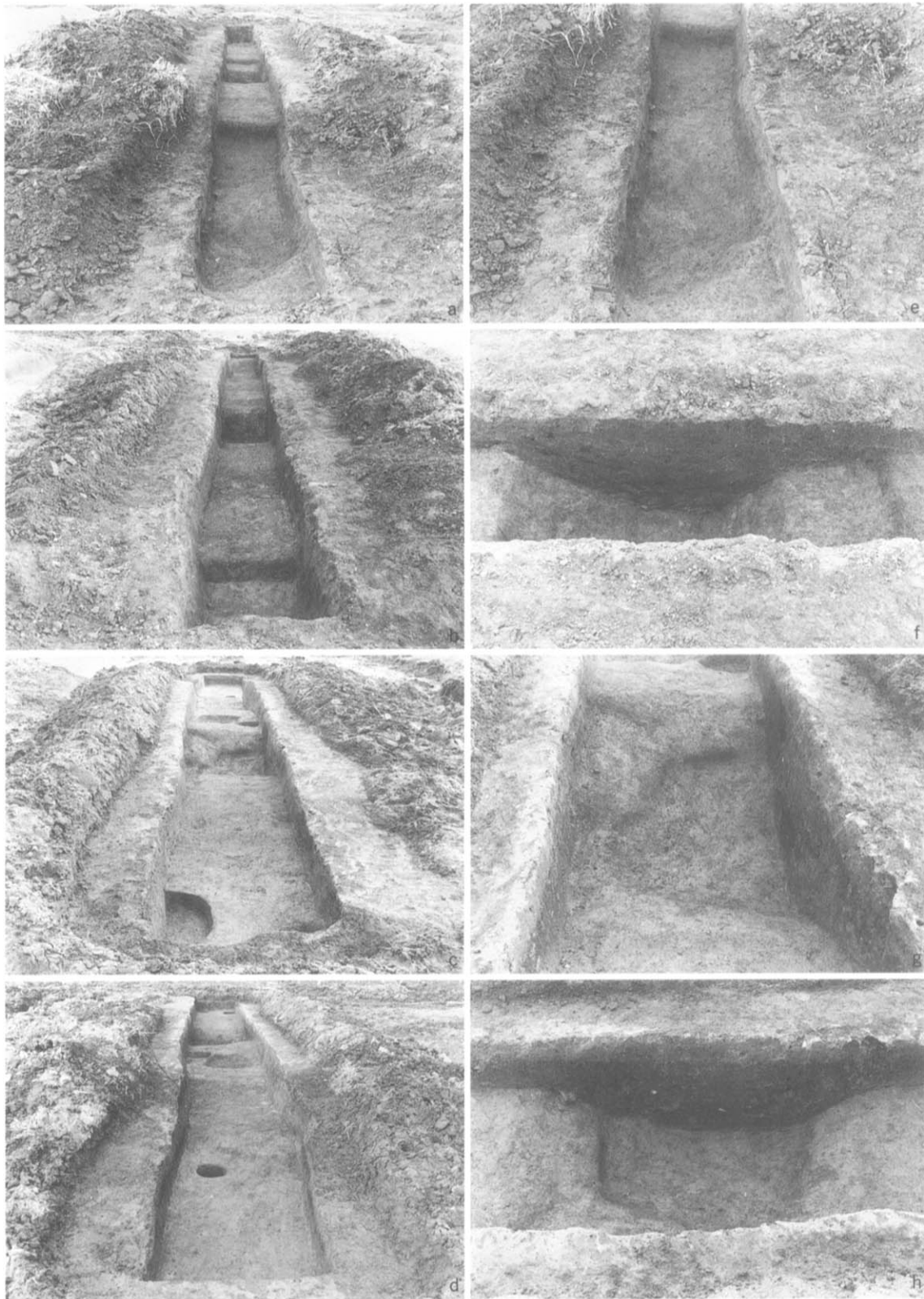
b

図版2 第18トレンチ



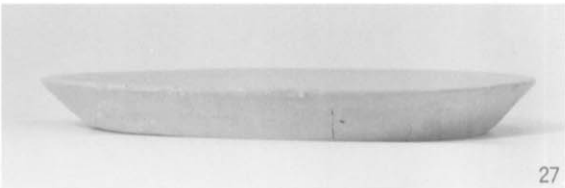
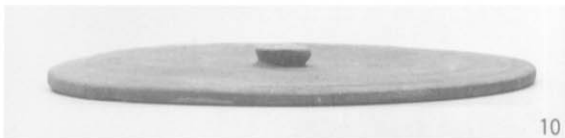
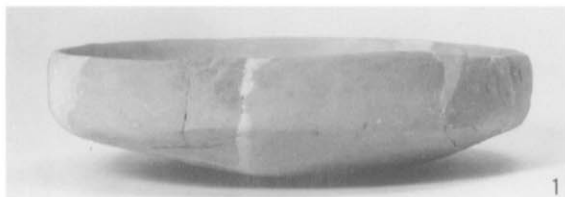
a・東から b・SE005東から

図版3 第19-A・Bトレンチ

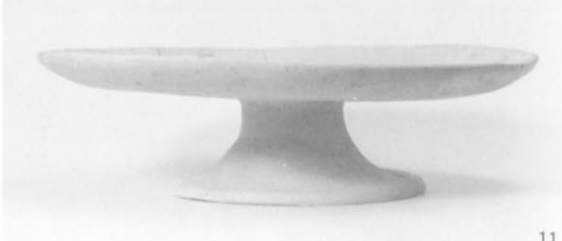
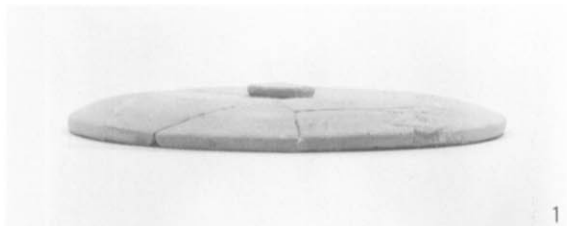


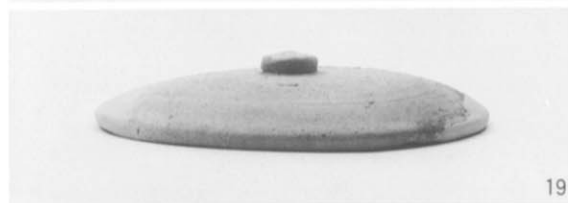
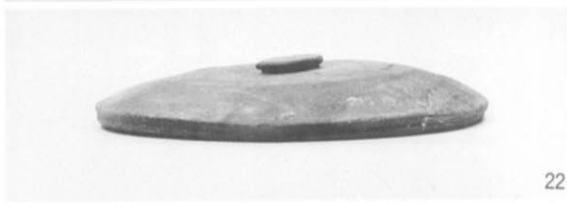
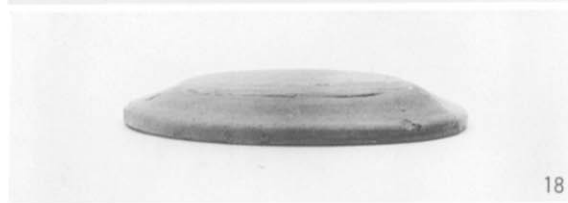
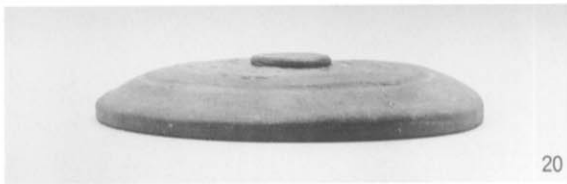
a. b. e. f. 第19-Bトレンチ a. 南から b. 北から c. 北から d. 南から
 c. d. g. h. 第19-Aトレンチ e. SK015南から f. SD010西から g. SD010北から h. SD010東から

図版4 SD001上層出土土器



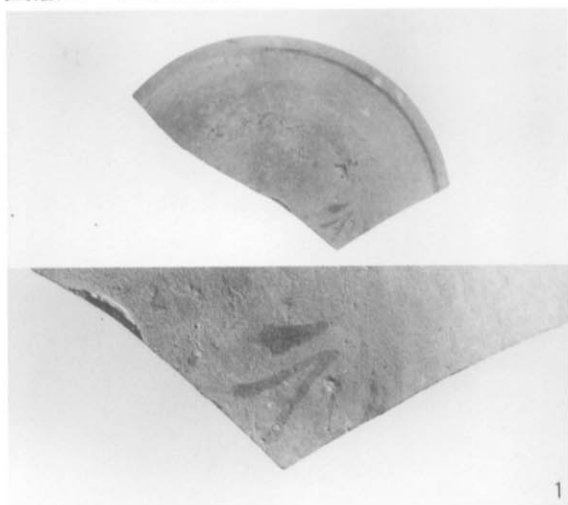
図版5 SD001下層出土土器1





图版 7 SD001下層出土土器 3

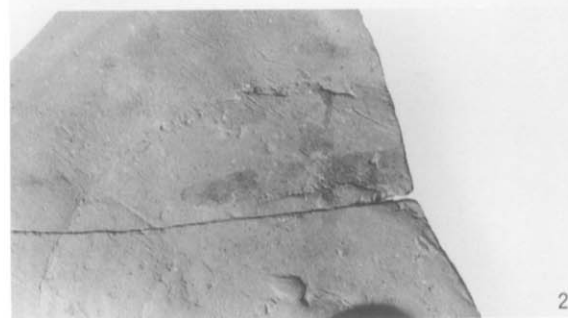




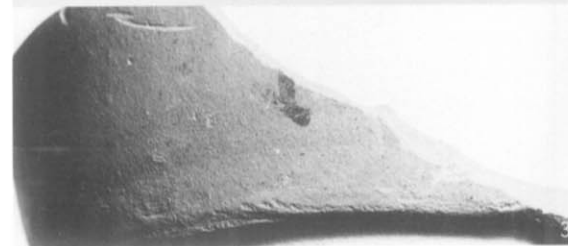
1



4



2



5



3



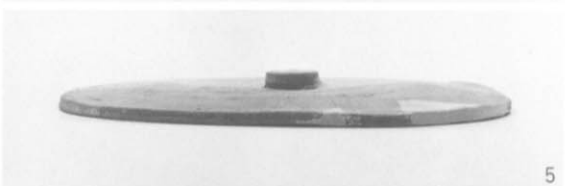
1



4



9



5



12

図版10 SD010、SK015、その他出土土器



1



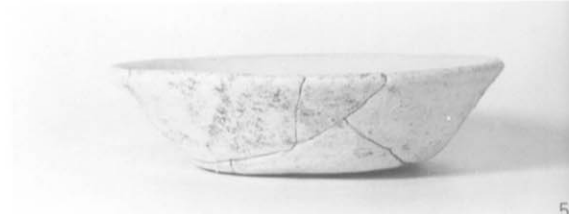
2



3



4



5



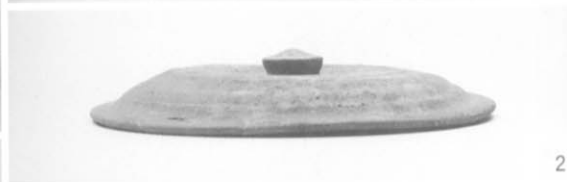
8



9



10

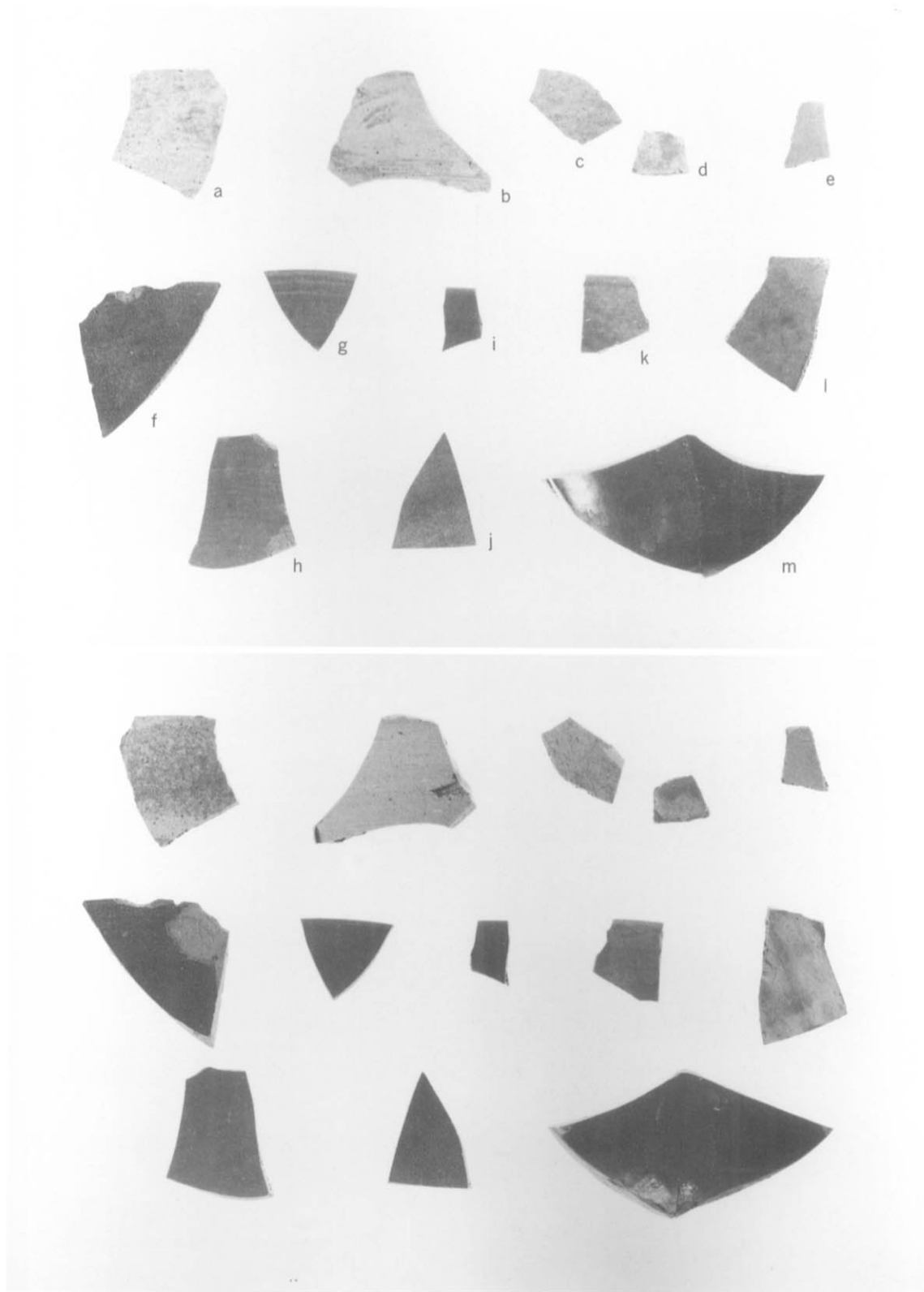


2

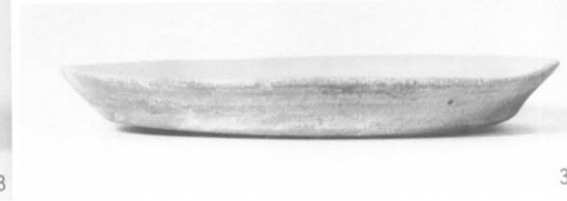
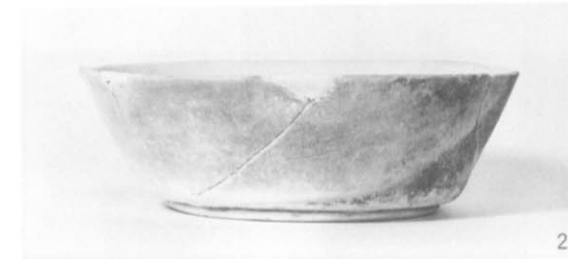
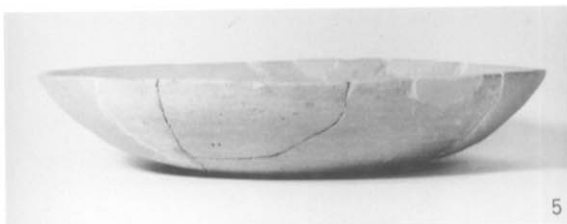


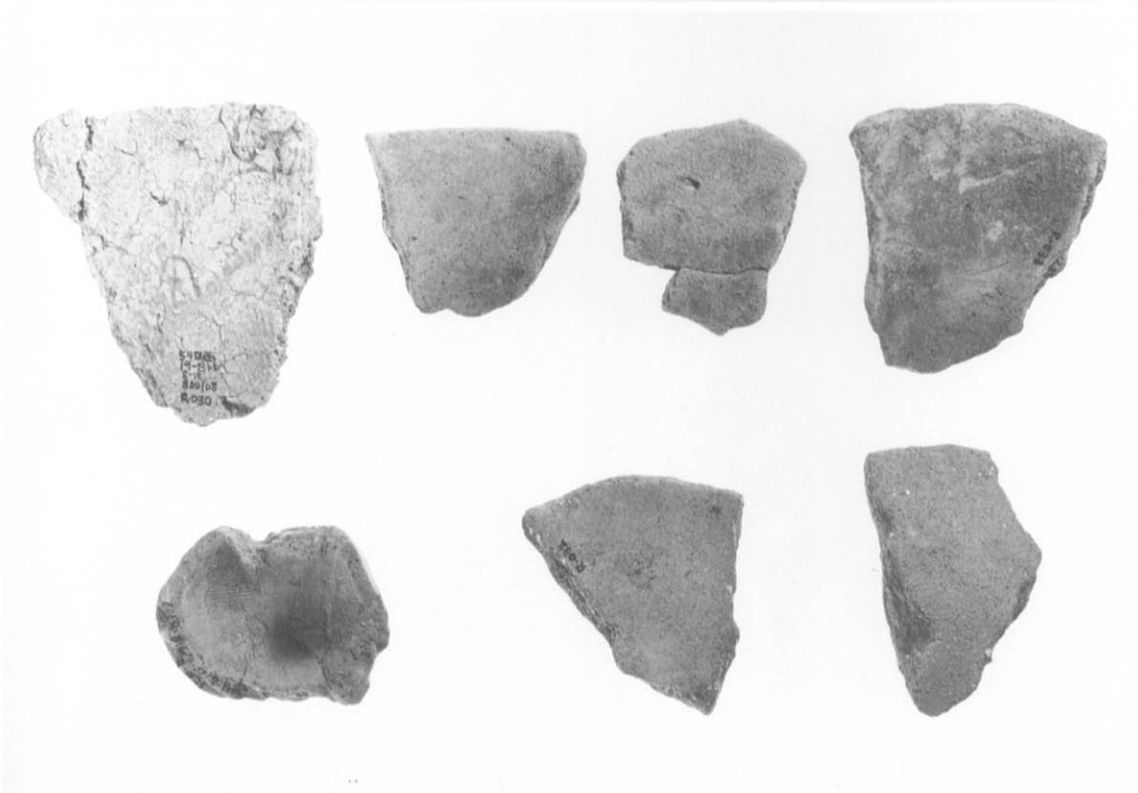
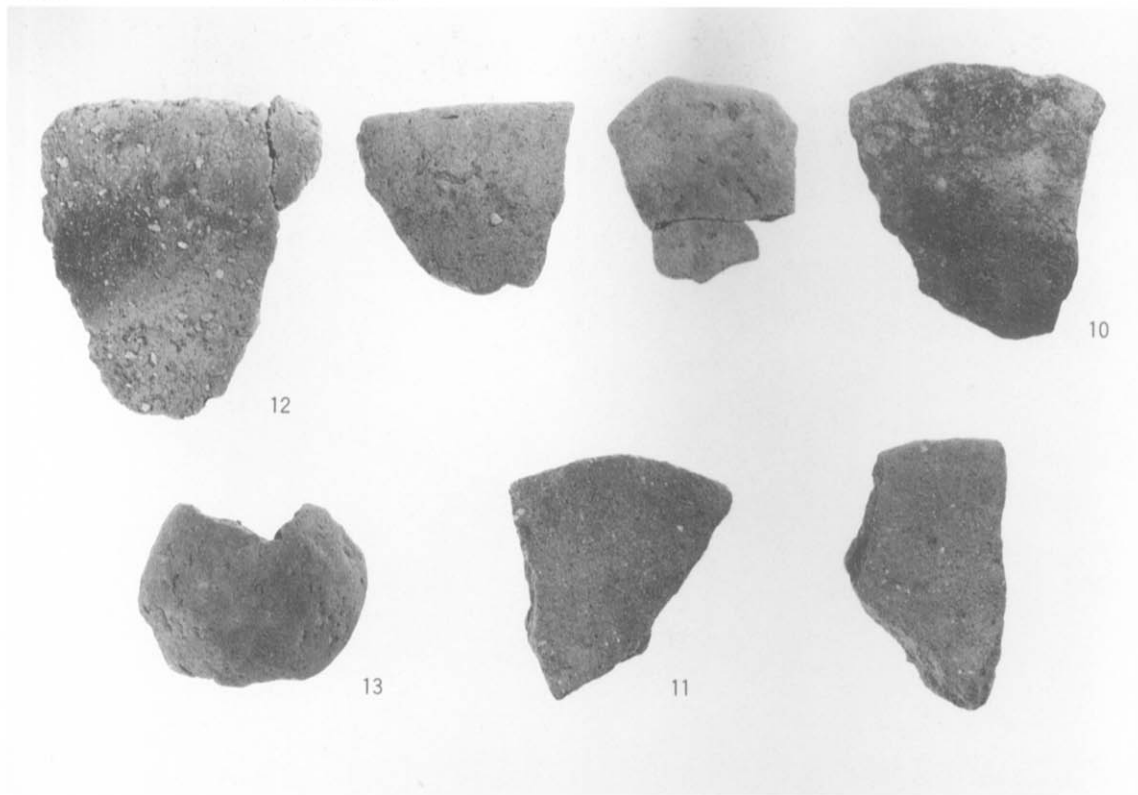
SD010

上. 2行、SD010
 中. 第20トレンチ淡茶色粘土
 下. SK015

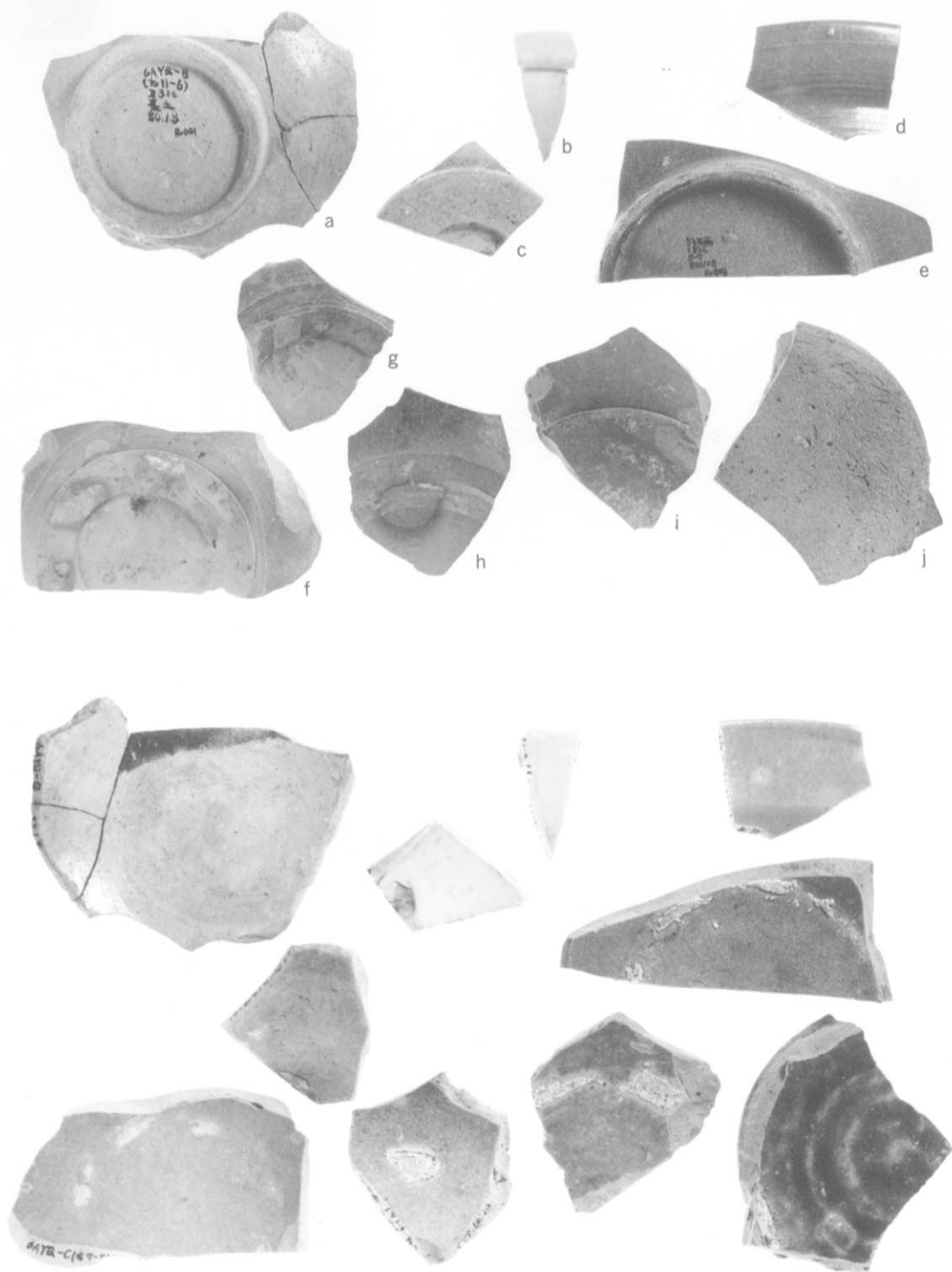


上·外面 下·内面

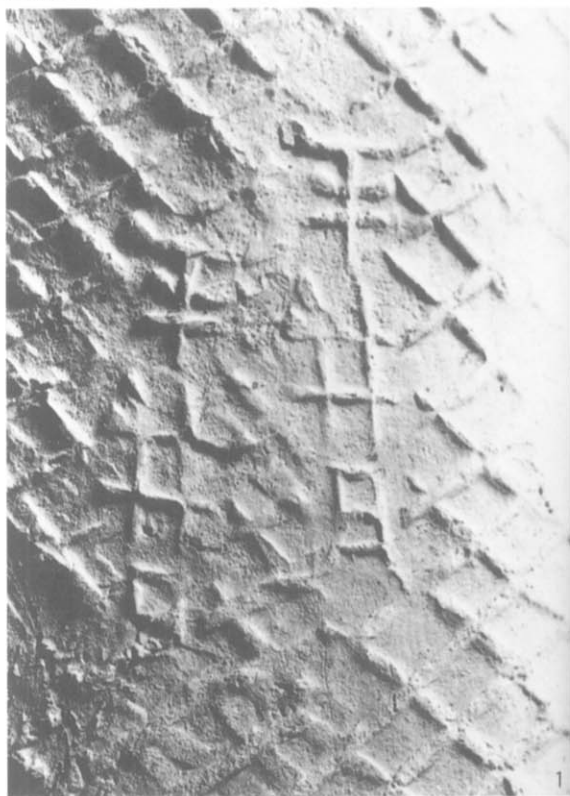


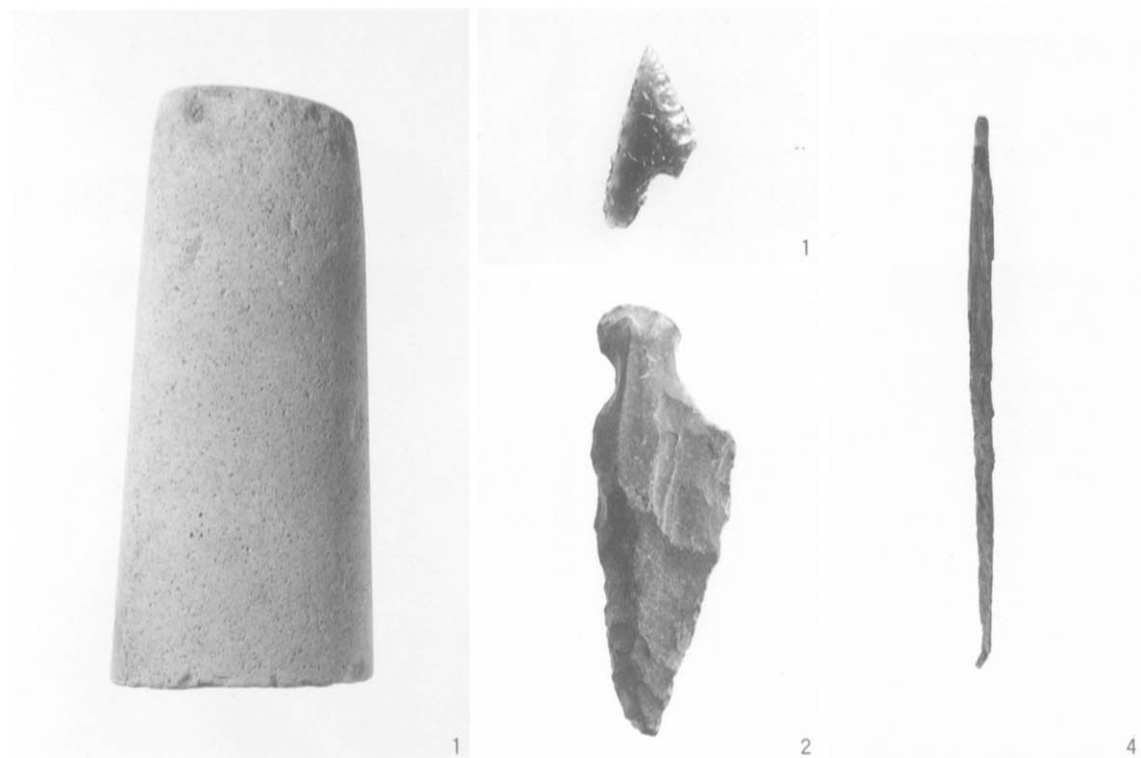


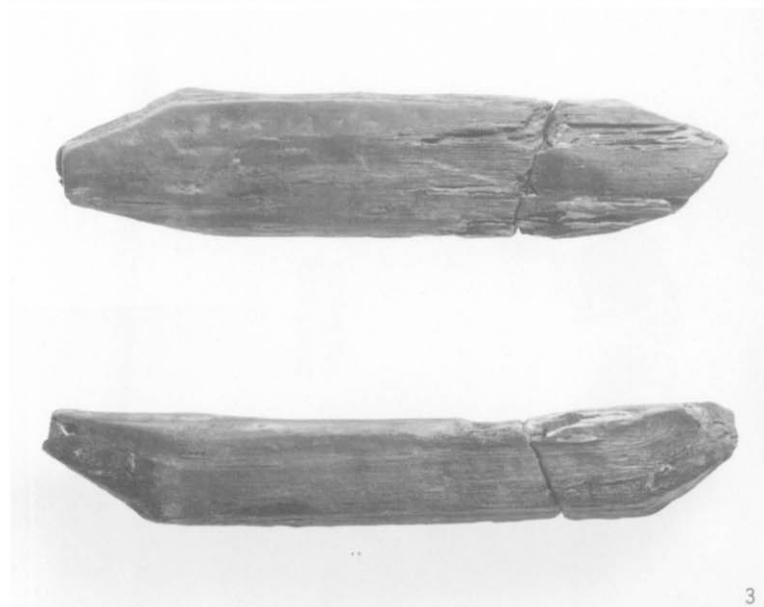
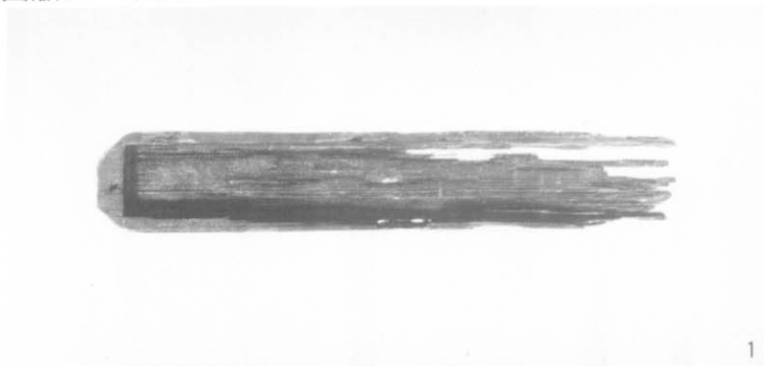
上・外面 下・内面



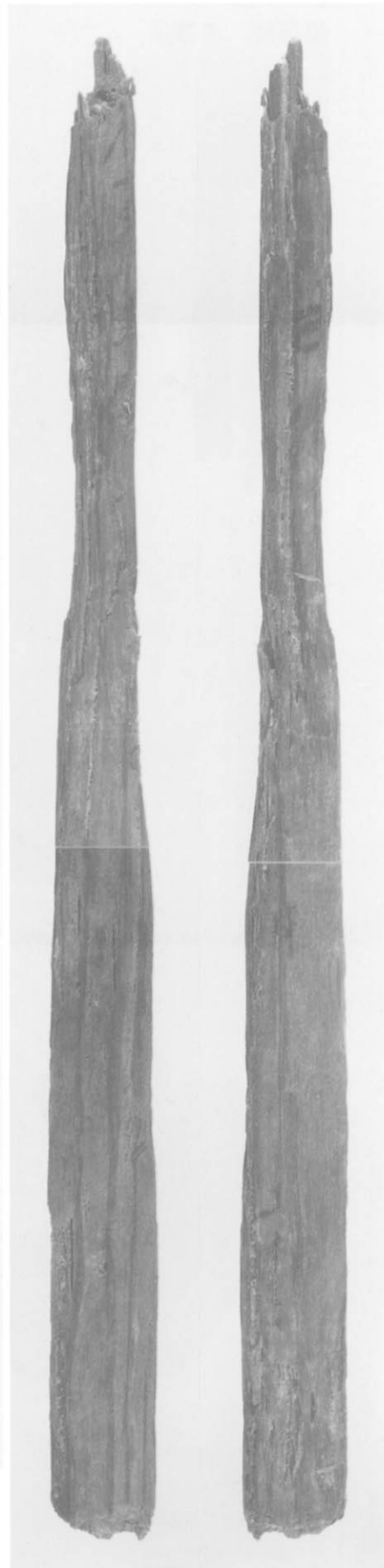
上・外面 下・内面

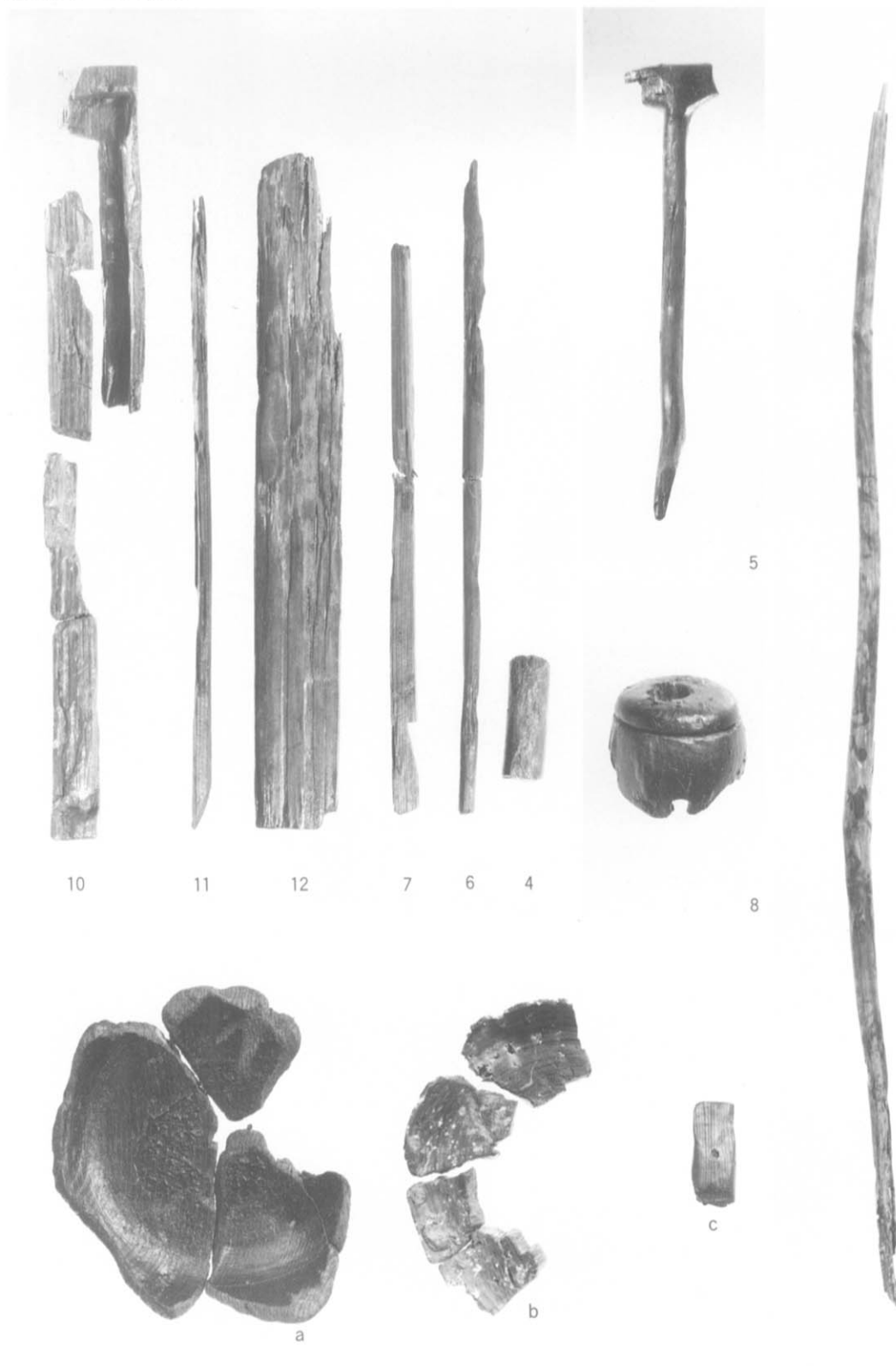






SD010 舟形木製品





上・右・SD001 下尺
下・SE005

付 編

付編 陣ノ尾遺跡第2次調査報告

I はじめに

陣ノ尾遺跡の第1、2次調査についてはすでに報告を行なったが、第2次調査については整理作業を残し、細かな内容を報告するには至っていないかった。したがって第2次調査を補足する形でここに報告したい。位置、環境、調査経過については前回の報告を参照されたい。

*1 山本信夫「筑前国分尼寺跡、陣ノ尾遺跡」『太宰府町の文化財第4集』太宰府町教育委員会（1981）

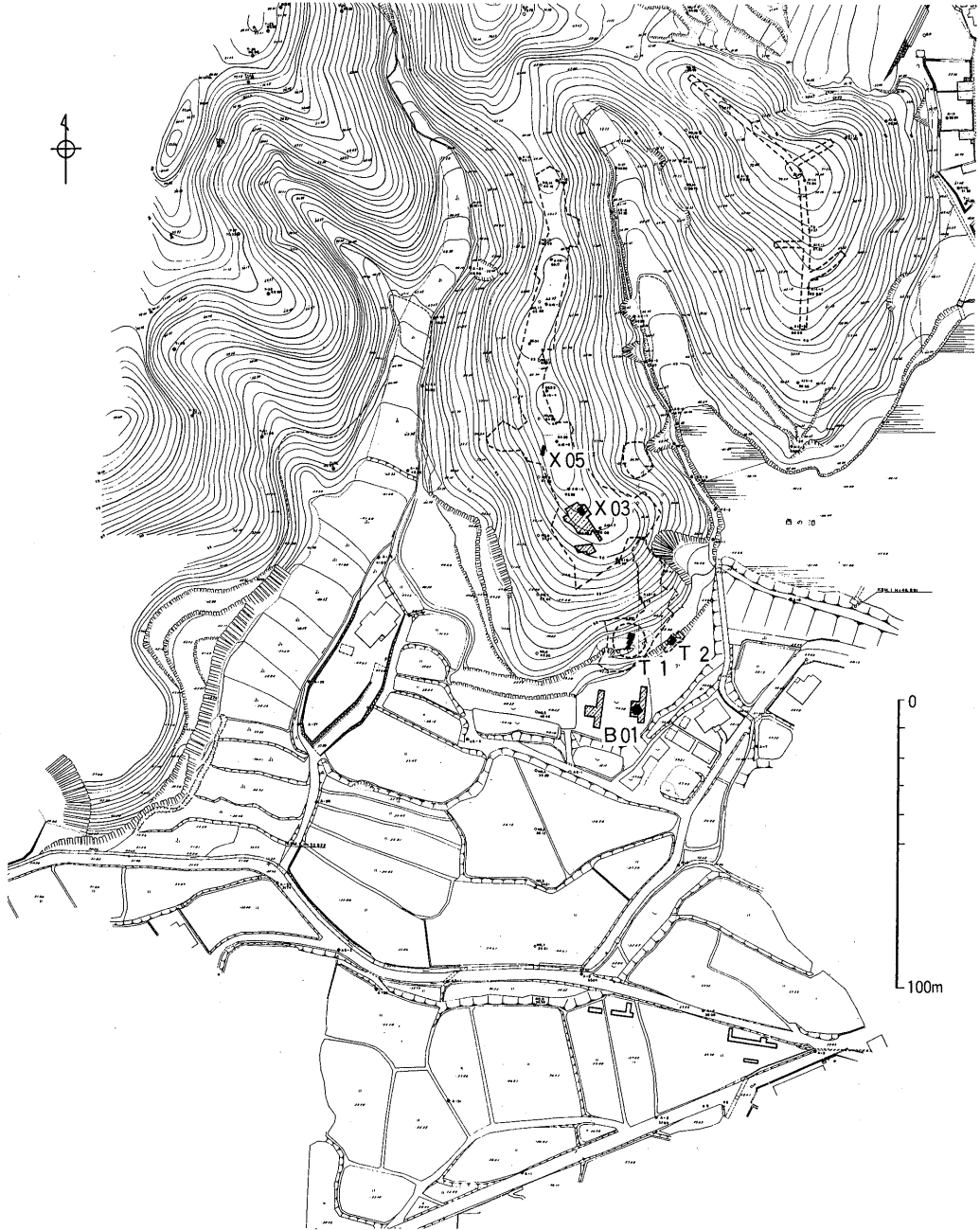


図1 陣ノ尾遺跡全体図 (1/2500)

- | | | | |
|---|---------|---|--------------|
| ▨ | 第1次調査地点 | □ | 国分尼寺跡第1次調査地点 |
| ▤ | 第2次調査地点 | T | 古墳 |
| | | B | 住居跡 |
| | | X | 墳墓 |

II 遺構と遺物

1 陣ノ尾1号墳 (図2～4、図版2～5)

墳丘 (図2・4) 周辺は墓地などが営まれた時に掘削などをうけ墳丘は北側を一部とどめる。南側斜面を利用して墳丘が営まれ北側の地山を段状に削って墳裾としている。SX08の北側は墓地で攪乱されているが1号墳に伴う周溝とも考えられるもので、北側の段、SX08ともに石室中心からそれぞれ約6mの距離をはかる。石室が墳丘中心に位置すると仮定すると径12m前後(周溝を含まない)の円墳に復原されよう。

石室 (図3) 主軸をN12.5°Eにとり、南側に開口する複室の両袖形横穴式石室である。石室は不整な長方形の墓竈に構築されている。盗掘によって奥壁直上をのぞき天井石は持ち去られ、奥室の床面敷石、羨道部壁体の一部を荒らされているほかは比較的、保存状態が良好である。

奥室は床面で長さ2.3m、幅2.0mの長方形プランをなす。周壁の状態については、奥壁に幅1.7m、高さ1.8m前後の上にすばまる一枚石を垂直に立て、両側壁にはそれぞれ長さ1.0m前後の2枚の腰石を据え、上部に0.4～1.0m前後の石材を3～5段ほど持ち送りして積み上げる。奥室の高さは奥壁の部分で約2.0mある。袖石の上部に1段石を積みあげて楣石が架構されていたが、石材が軟弱となり危険であるため調査中に除去した。楣石の高さは1.5mであることから奥室の高さは前室の2倍以下と考えられる。床面は全体に石敷されていたと思われその一部が残存する。袖石の間には第1仕切石がある。

前室は長さ1.4m、幅1.3mで、両側壁とも長さ1.3mの石を腰石とし0.3～1.0mの石を2～4段程積み上げている。立てられた袖石に2段ほど石を積んでいる。床面は袖石の間に第2仕切石があり、右側壁に寄って石敷きが残る。

羨道部は短く八の字形に開き、残りのよい左側壁の長さは第2仕切石さら約2.0mで、壁体は大小の石を不規則に積み上げている。羨道の左側壁南端から西に長さ1.5mの列石あるいはその裏ごめの一部とみられるものが走る。閉塞部は第2仕切石の前に設けられ30cm大の石を乱雑に積み上げている。

なお奥壁から第2仕切石中心までは4.6m、羨道端までは6.6mをはかる。

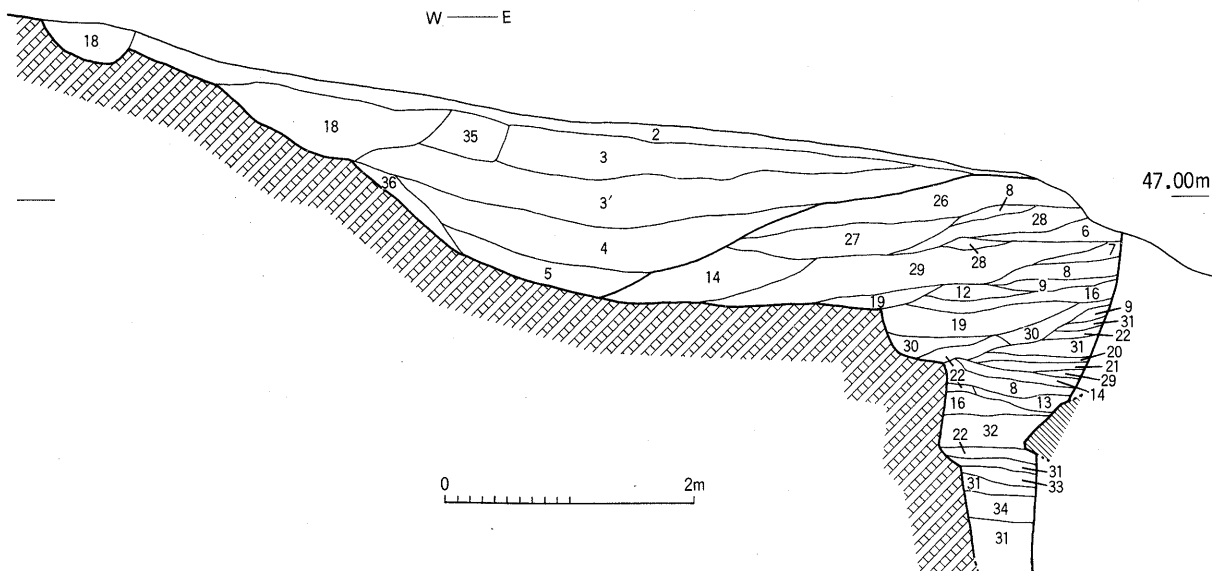


図2 1号墳土層図 (1/60)

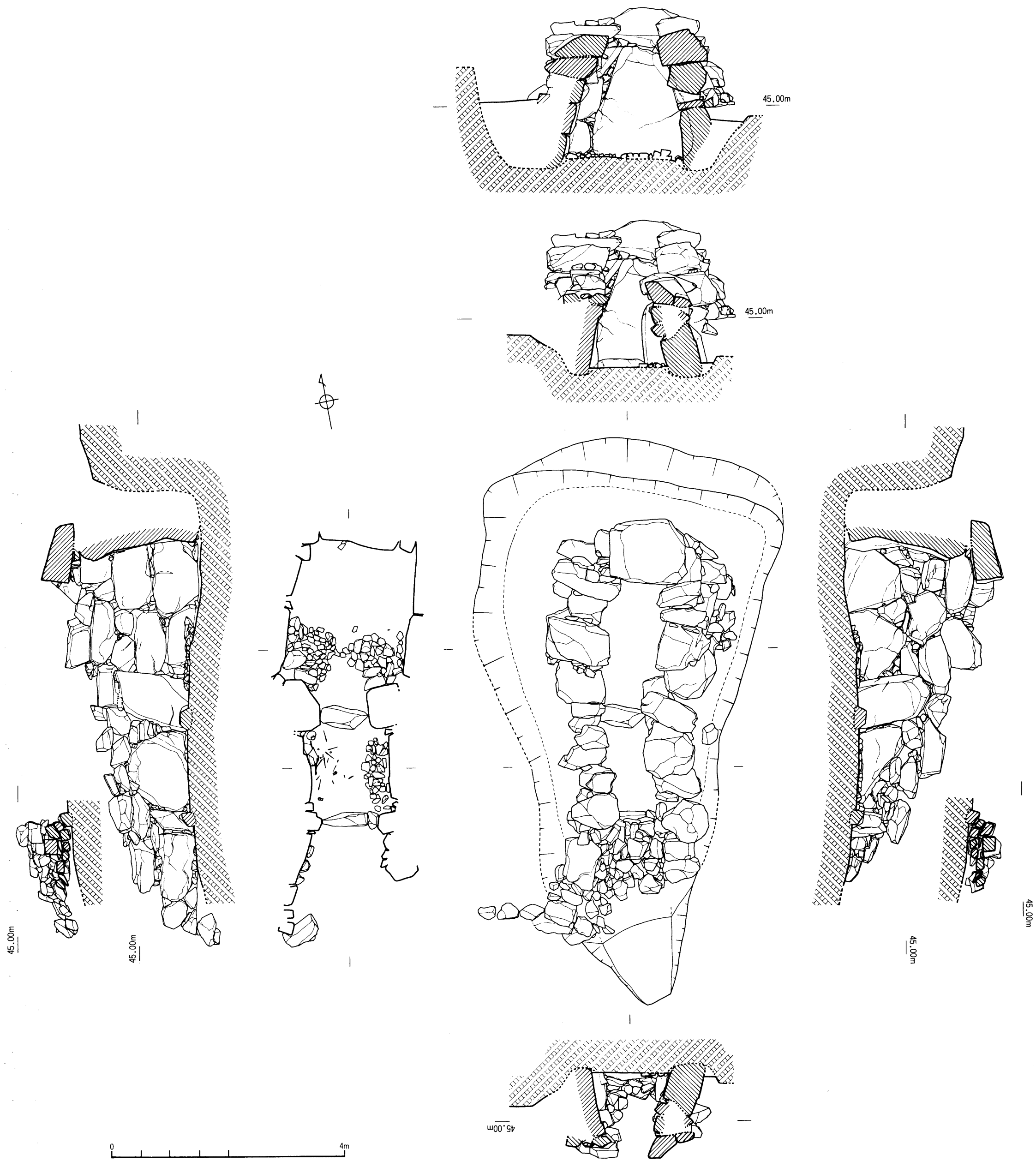


图3 1号墳石室 (1/60)

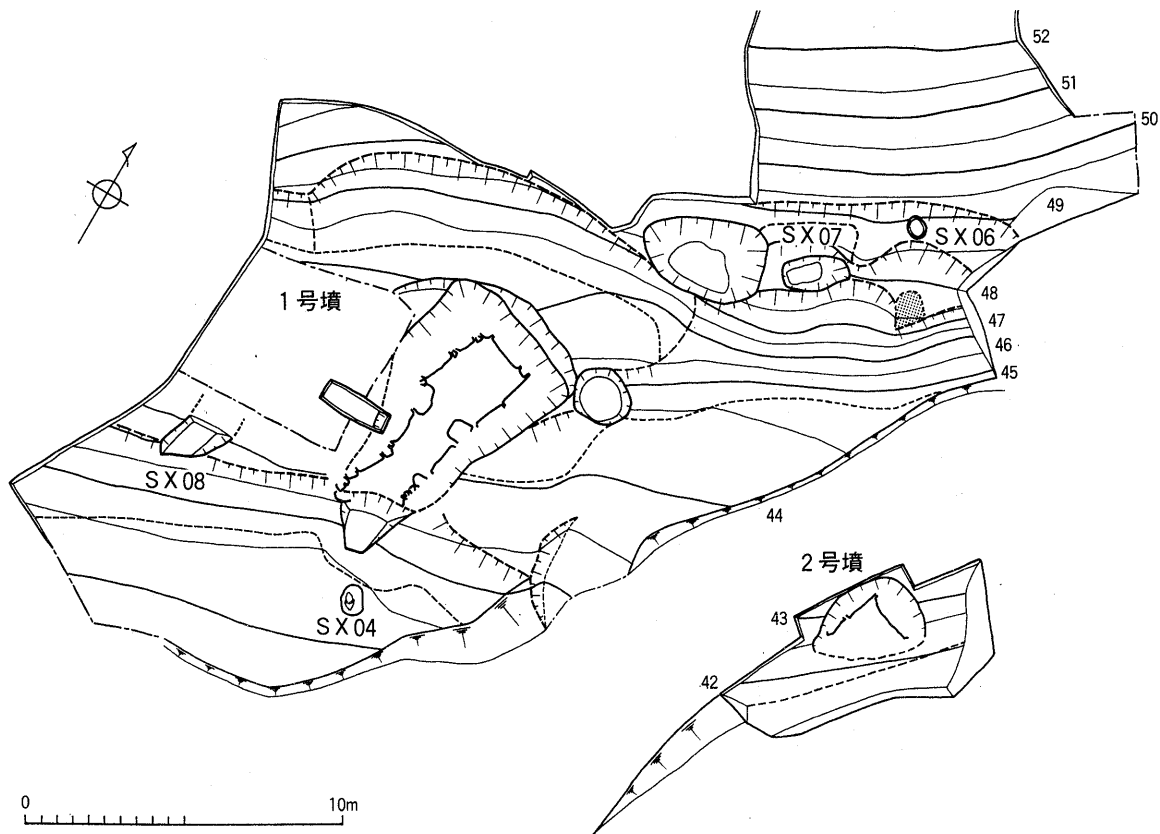
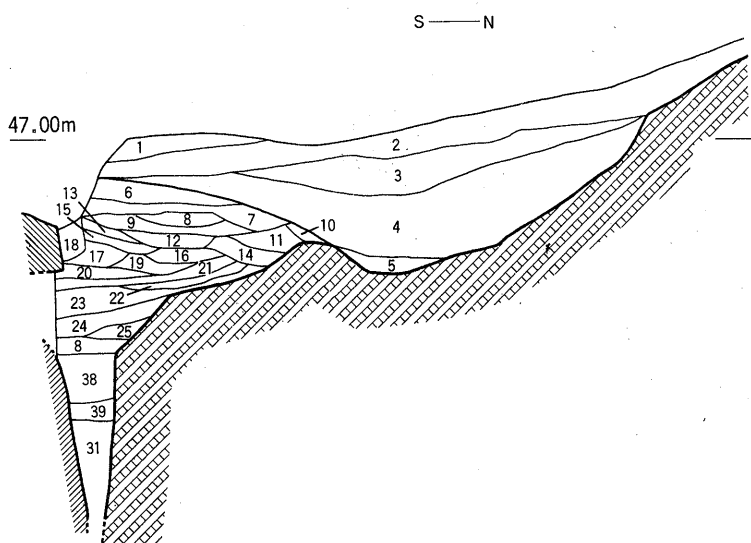


図4 1・2号墳地形図



- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. 攪乱土 | 21. 黄斑灰色粘質土 |
| 2. 表土 | 22. 黒斑茶灰色土 |
| 3. 黄灰色土 | 23. 黒斑茶灰色土、
茶色ブロック入る |
| 3'. 明るい黄灰色土 | 24. 灰色砂質土 |
| 4. 黄茶灰色土 | 25. 暗黄褐色砂質土 |
| 5. 暗黄色砂 | 26. 暗茶褐色土 (旧表土か?) |
| 6. 黄色砂 | 27. 黒褐色土 |
| 7. 茶黄色砂 | 28. 黄斑黒色土 |
| 8. 暗黄茶色砂質土 | 29. 明黄褐色砂質土 |
| 9. 暗黄褐色砂質土 | 30. 明るい灰斑黄褐色砂質土 |
| 10. 淡黄色砂 | 31. 赤褐色砂質土 |
| 11. 暗黄茶色砂質土、
黄色ブロック入 | 32. 黒斑茶黄色土 |
| 12. 暗黄褐色砂質土、
黒斑まじり | 33. 淡黄白色砂質土 |
| 13. 黄白色砂質土 | 34. 茶色粘質土 |
| 14. 暗灰色砂質土 | 35. 黄色まじりの暗灰色土 |
| 15. 黄茶色砂質土 | 36. 暗灰色砂質土、赤斑まじり |
| 16. 灰斑黄白色砂質土 | 37. 木の根 (淡黄灰色土) |
| 17. 黄灰色砂質土 | 38. 白色ブロック入り黄灰色土 |
| 18. 木の根の穴 (暗灰色土) | 39. 暗茶黄色粘質土 |
| 19. 灰斑黄褐色砂質土 | |
| 20. 明黄褐色粘質土 | |

A	B	口径	器高	底径	C	D
坏 a						
1	1	12.6	3.8	8.0	○	×
2	2	12.6	3.7	7.2	不明	×
3	3	13.0	3.8	7.8	〃	○
4	4	13.3	3.5	7.8	〃	×
5	5	14.1	3.7	9.0	〃	×
皿 a						
1	6	13.4	2.1	9.4	不明	○
碗 c						
1	7	14.1	5.7		不明	×

表1 1号墳石室土師器計測表 単位cm
A番号、B挿図番号、C内底などの有無
D板状圧痕の有無

遺物出土状態(図版6) 奥室は荒らされ遺物は少ないが前室では左側壁寄りに遺物が集中して出土した。遺物の位置を次に示す。

閉塞石中……耳環1、鉄釘2

羨道覆土……留金状金具1

前室床面……耳環3、鉄釘3、鉸具2、刀子1、鉄鏃13、輪状金具1、須恵器平瓶1

前室覆土……土師器坏a1

奥室床面……耳環1、刀子1、鉄釘1

奥室覆土……土師器坏a4、皿a1、碗c1

土師器(図5、図版8、表1)

坏a(1~5) 1~4は奥室覆土から出土し底部をへら切りされるもので口径は12.6~13.3cm、高さは3.5~3.8cmをはかる。5は底部をへら切りされ前者よりもやや大きなもので前室の右側壁奥の覆土から出土した。

皿a(6) 底部はへら切りされる。奥室覆土から出土。

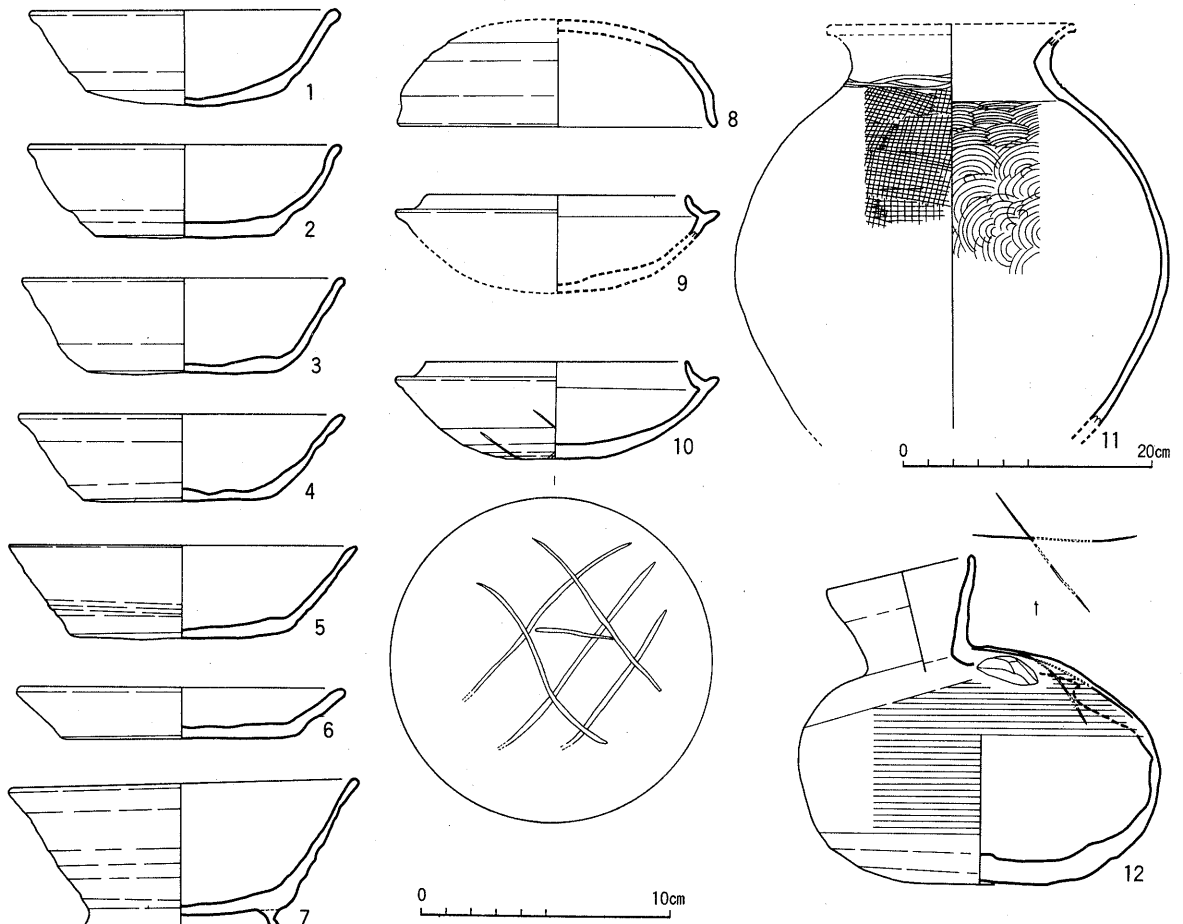


図5 1号墳出土土器(1/3)

碗c (7) 体部は直線的に開く。奥室覆土から出土。

須恵器 (図5、図版8)

坏 蓋 (8) 墳丘西側表土から出土した。口径は12.9cm。

坏 身 (9~10) 9はSX08から出土し、口径は10.6cm。

10は墳丘の西側表土から出土し口径は10.6cm、高さは3.9cm。

底部外面にはへら記号を有する。

甕a (11) SX08から出土し体部外面には格子目文、内面には青海波文の叩きを有する。

平 瓶 (12) 前室床面の左側壁奥から出土した。口縁端部はやや内傾し、外面は肩部から胴部にかけてかき目を施す。

胴部下位はへら削りされる。肩部には一対のつまみを有し上面に「X」のへら記号が刻まれる。

装身具

耳環 (図6、図版11) いずれも銅環に金箔を張ったもので、1、3、4の表面は保存状態がよい。1は奥室床面、3は閉塞石中、他は前室床面から出土した。

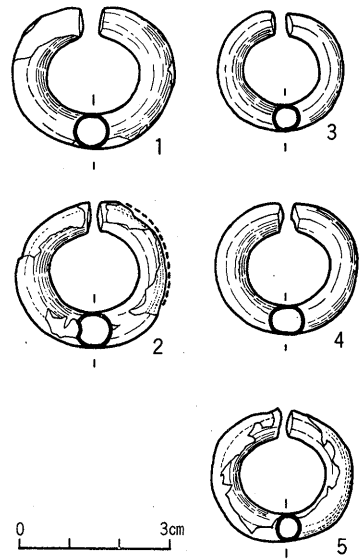


図6 耳環 (2/3)

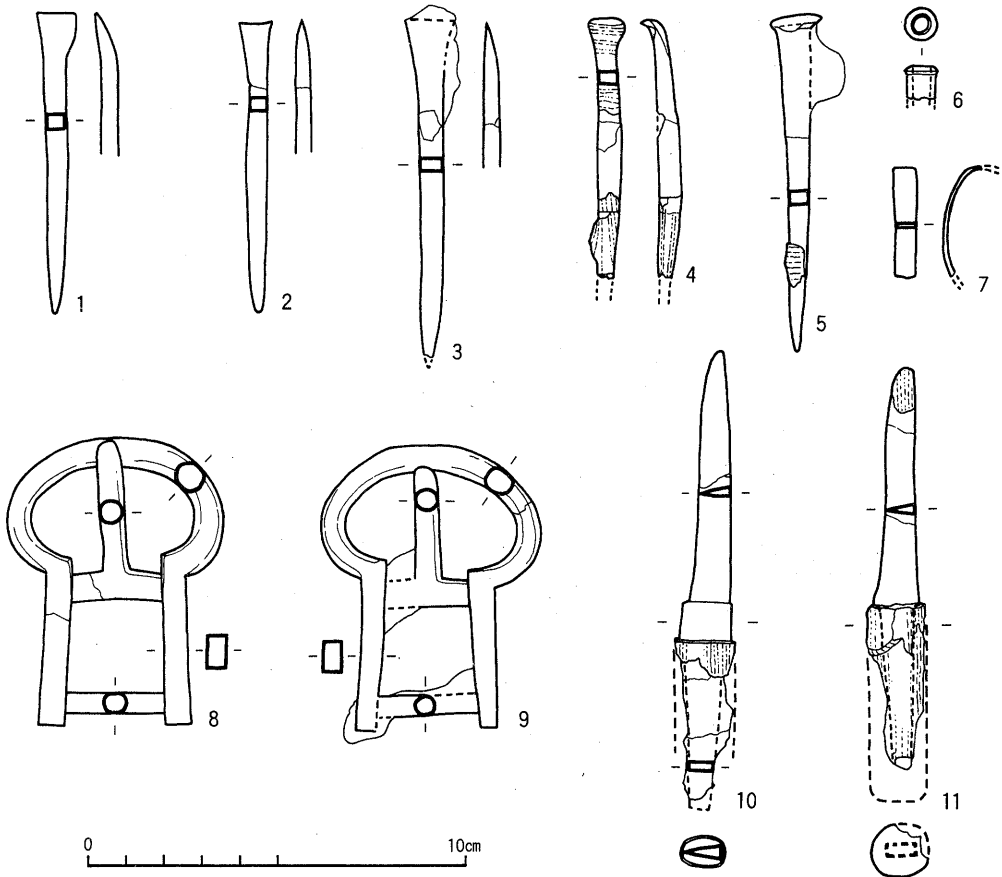


図7 鉄製品 (1/2)

鉄製品

工具類 (図7、図版12)

釘 (1~5) 1~3は頭部を幅広く叩き延ばし、一方に折り曲げない段階のものとも思われるが確定できない。4、5は頭部を折り曲げるもので木質が錆着している。

刀子 (10、11) 茎には木質が錆着し、刃部は研ぎ上げられかなりの使用を物語る。10は身の付け根に金箔の張られた鉄製金具がはめられる。

馬具 (図7、図版11)

鉸具 (8、9) 馬蹄形に曲げた頭部は断面円形に、下部は断面四角につくり、断面円形の横棒を上下にさす。上の横棒の中央に刺金を入れ帯留めとしている。

その他6は留金状金具、7は輪状金具である。

武器

鉄 鏃 (図8、図版13) 10は平根式で形態は^{おのや}斧箭式に属するもの、他は尖根式で1~4は片身形、5~9、11~13は柳葉形および三角形式である。尖根式のもの^{のかつぎ}は篋被と茎の間に凸状の関を有し、4、6は茎に糸を巻いた痕跡がある。身の細部については若干バラエティがある。5、6は浅い^{かえり}逆刺をなし、8、9は短く鋭い逆刺を有する。身の断面は5、8、9が片丸造、6、7が両丸造をなす。完存するものも多く全長のわかる2は21.1cm、3は21.2cm、5は21.3cmをはかる。平根式の10は篋被の部分で平造りされ、篋被と茎の境に段をもつ。茎は接合しないが全長11cm前後のものであろう。

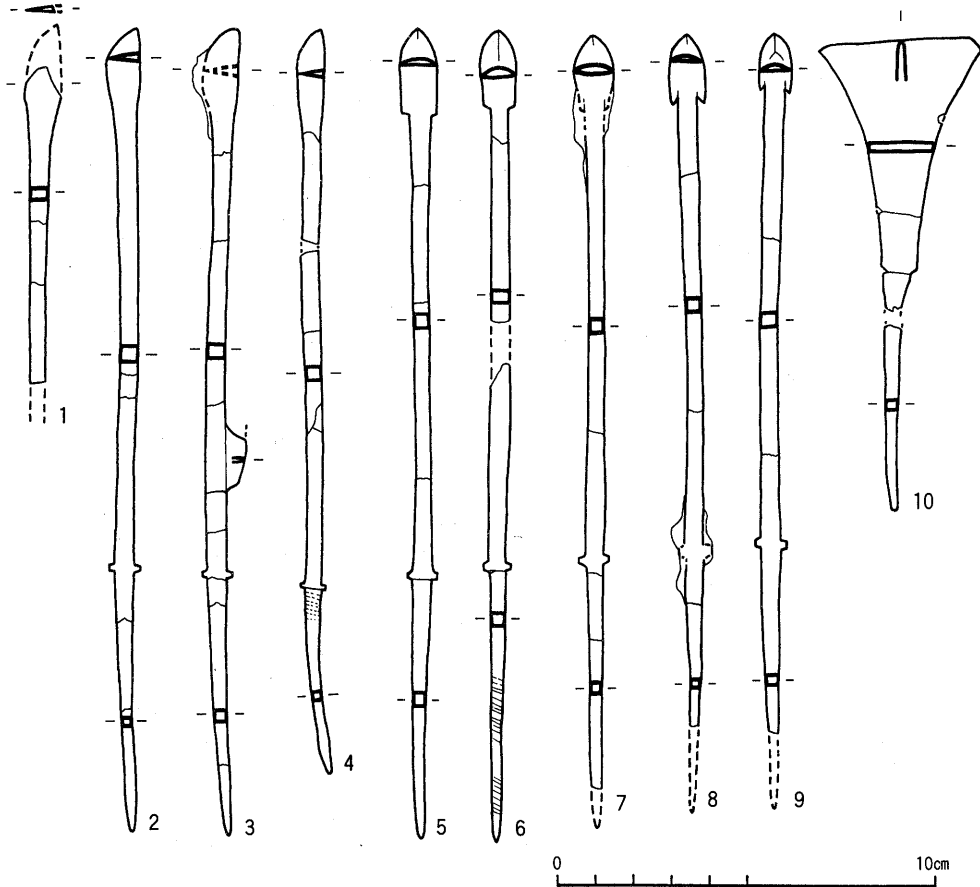


図8 鉄製品 (1/2)

2、 陣ノ尾2号墳

石室（図9、図版7） 周辺は削平をうけ石室の北壁、西壁の一部をとどめる。北壁は1.8m、西壁は0.7~1.0mの腰石を据え上部に石積みを行なう。1号墳との関連を考慮すると北壁が奥壁にあたるものであろう。床面の石敷きは上、下2層認められ、上層は灰が一面にあり、遺物から中世に火葬墓として使用されたと考えられる。下層は本来の石敷きであるが鉄刀子1を出土した他は荒らされて遺物を残さない。また石室の上部は石室を破壊した石材と瓦の破片で覆われており、埋土に近世陶器などを出土しているところから、近世に何らかの人為的破壊が加わったものと考えられる。

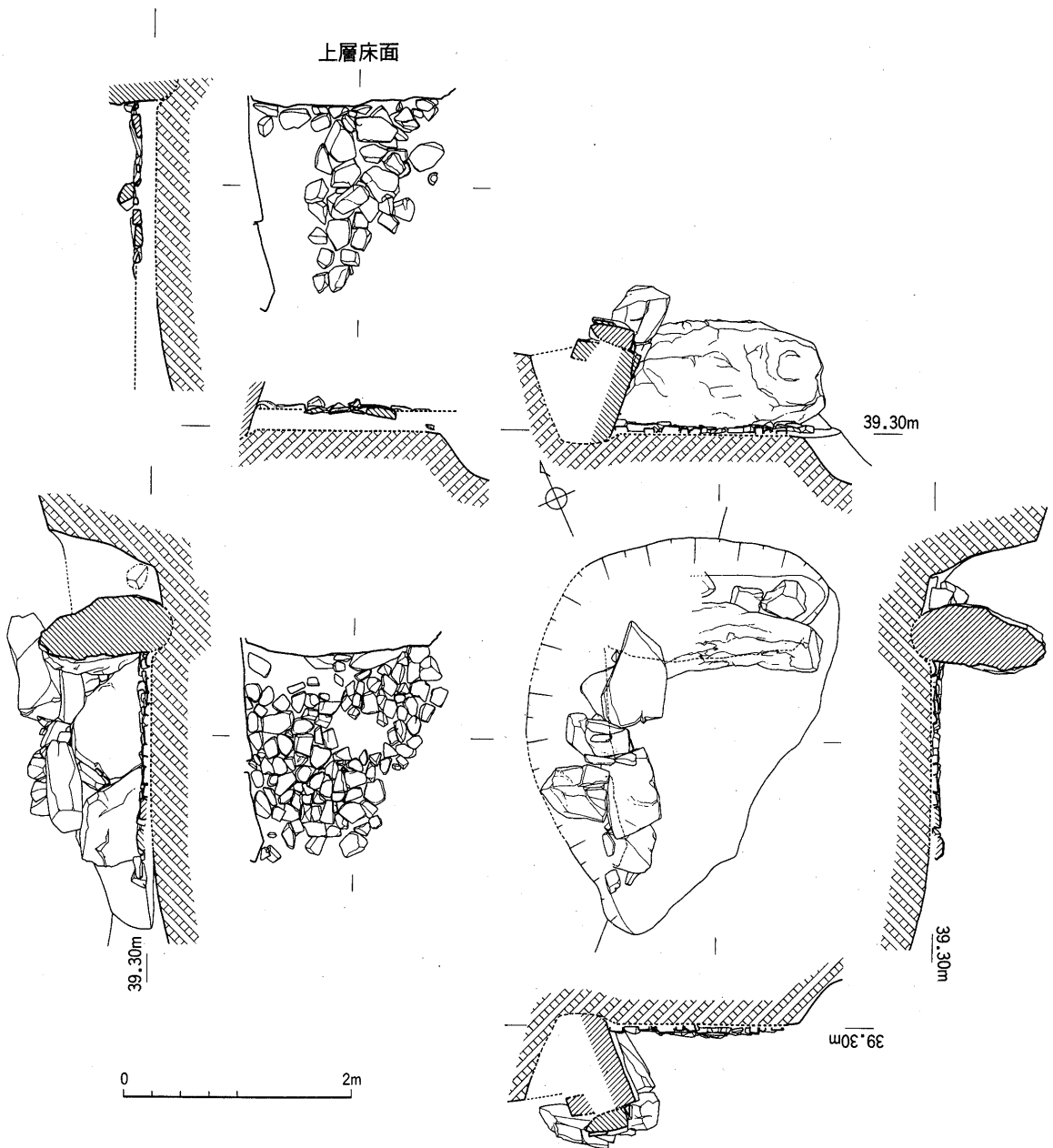


図9 2号墳石室 (1/60)

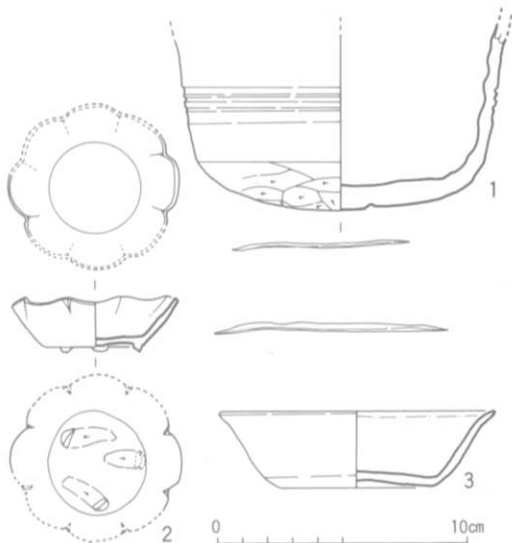


図10 2号墳出土土器 (1/3)

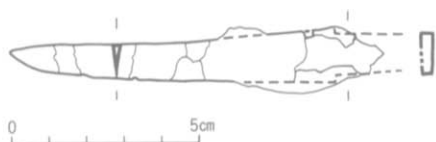


図11 2号墳鉄製品 (1/2)

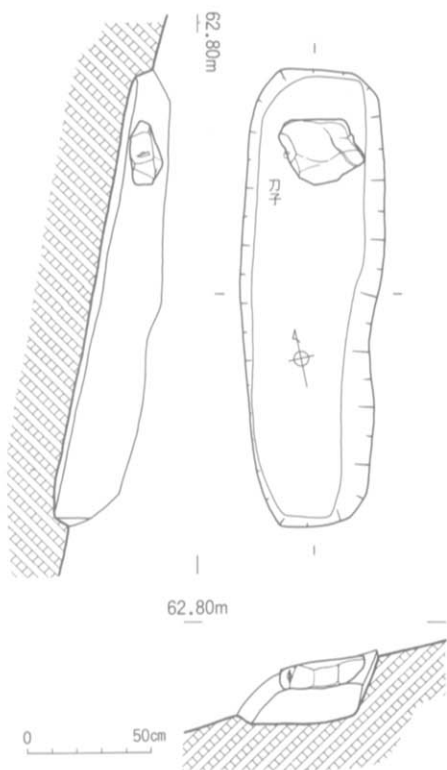


図12 SX05 (1/30)

須恵器 (図10)

碗 (1) 体部が強く立ち上がり碗形をなすものと思われる。底部外面は手持ちのへら削りが施され、「||」のへら記号を刻む。覆土から出土した。

灰釉陶器 (図10、図版9)

小皿 (2) 口縁部を外側からへらで押圧し、花卉を表現する。底部外面は糸切りされた後、3ヶ所を指で外周へびきずって低い高台状につくる。焼台などに乗せるためのものかもしれない。覆土から出土した。

白磁 (図10、図版9)

皿 (3) IX-1dに属するもので全面施釉後口縁部の釉をかき取る。上層床面からやや下方へ移動して出土した。

鉄製品 (図11、図版14)

刀子 下層の床面から出土した。茎の一部を欠損する。

3 墳墓

SX05 (図12、13) 隅丸長方形のプランを有し、土壙墓と推定される。床面は南側に向かって傾斜をなし、北側が幅広く、頭部と考えられる。この頭部と考えられる位置には30cm大の花崗岩が検出され、石の西面に密着して鉄刀子1が出土した。土壙の長さは1.8m、北側の幅は0.5m、南側の幅は0.4m、深さは0.2m。

SX05出土鉄製品 (図14、図版14)

刀子 身の基部は両関で先端部を欠損する。

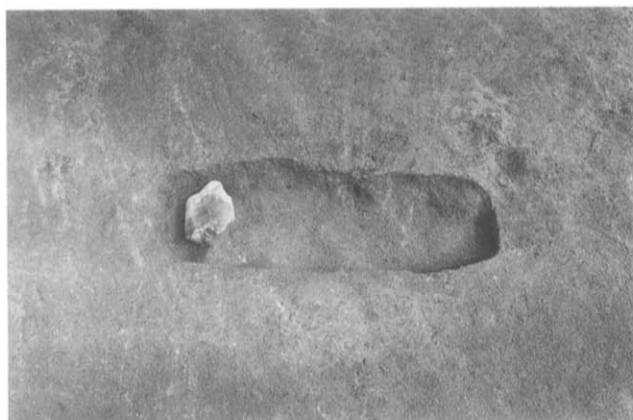


図13 SX05 西から

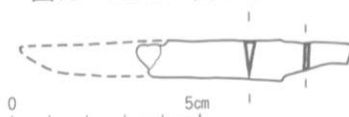


図14 SX05 鉄製品 (1/2)

S X 04 (図15、16) 1号墳の南側で検出された小児甕棺墓である。墓壙は長方形プランをなし床面を一段掘り下げ32°の傾斜で甕を据える。頭位は北側と推定され、北側(上)甕と南側(下)甕は接口方法で合わせる。墓壙床面は上東側を中心に空間をとっていることから、南側壁に横壙を掘って挿入したものであろうか。副葬品などは認められない。墓壙の長さは0.9m、幅は0.7m、深さは0.2m。

S X 04甕棺 (図17、図版10)

1は北側甕である。口縁部は「く」の字形をなし端部を跳ね上げるもので、胴部中位のやや上寄りにふくらみを有する。底部はやや上げ底ふうの平底をなす。胴部外面は刷毛目を施す。2は南側甕で、内側に低く傾斜する「く」字形口線をなし、その内面は鈍く屈折させてつくられる。胴部の上位にはふくらみを有し平底をなす。胴部外面に刷毛目を施す。

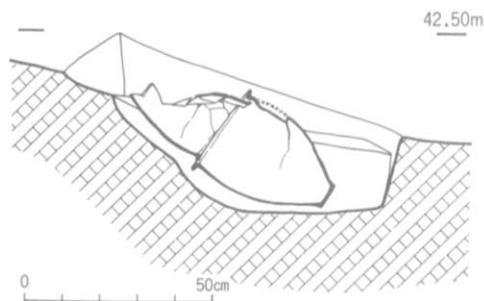
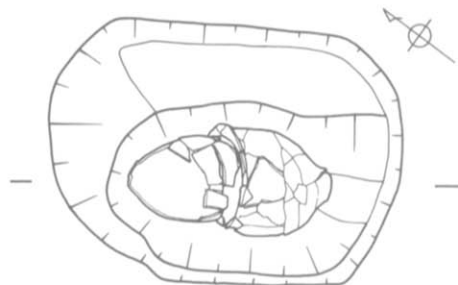


図15 SX04 (1/20)

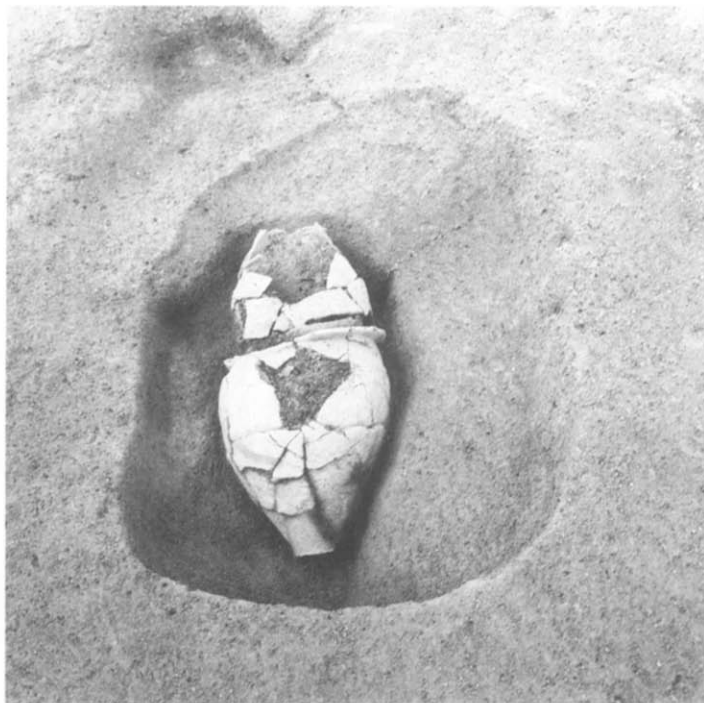


図16 SX04 南東から

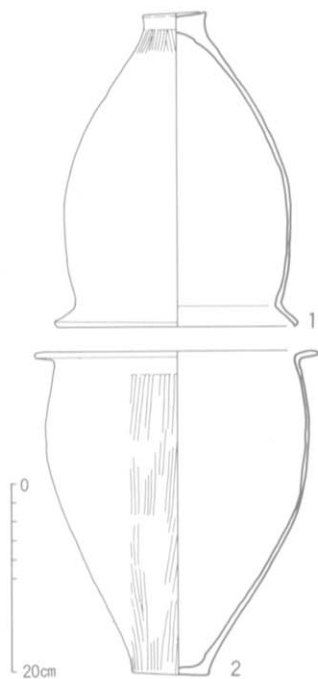


図17 SX04 甕棺 (1/8)

4 その他の遺構と遺物

弥生式土器 (図18、図版9)

壺 蓋 (1) 無頸壺の蓋で焼成前に穿孔された2個一対の小孔を有する。外面はへら磨き後に丹塗りされ、内面は一部になで調整を施す。1号墳南側の表土から出土した。

S X 06 (図4) 上部は削平され楕円形に焼けた底部のみを検出した。埋土は灰層からなる。幅は0.9m、南側は削平され長さは現状で1.2mをはかる。

S X 07 (図4) 2段掘りの土壌で上部に礫積みを持ち、下部は長さ2.1m、幅1.1m、深さ0.4mの不整長方形をなす。墳墓である可能性を有し、上部の礫中から土師器の小皿を出土した。

S X 07出土土師器 (図18、図版9)

小皿 a (2) 底部は糸切りされ板状圧痕を有する。口径は7.5cm、高さは0.8cm、底径は6.5cm。

S X 07周辺出土土器 (図18、図版9)

坏 a (3) S X 07の東側の包含層から出土したもので、底部を糸切りされ、板状圧痕を有する。口径は12.5cm、高さは2.5cm、底径は9.0cmである。

東側谷部出土土器 (図19、1~8、図版10、表2)

丘陵の東側の谷部包含層から出土したものである。

土師器

坏 a (1~3) 3は磨滅のため不明瞭であるが1・2は底部をへら切りされ体部外面から内面全体に横なでを施す。2の体部外

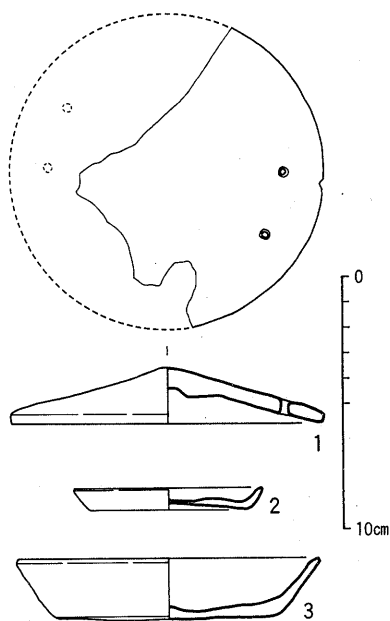


図18 その他の土器 (1/3)

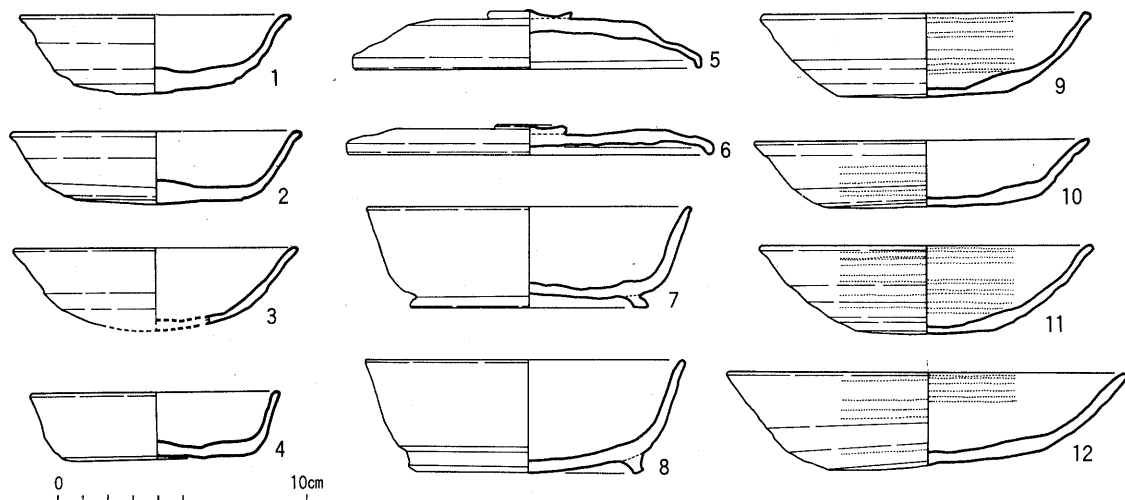


図19 包含層出土土器 (1/3)

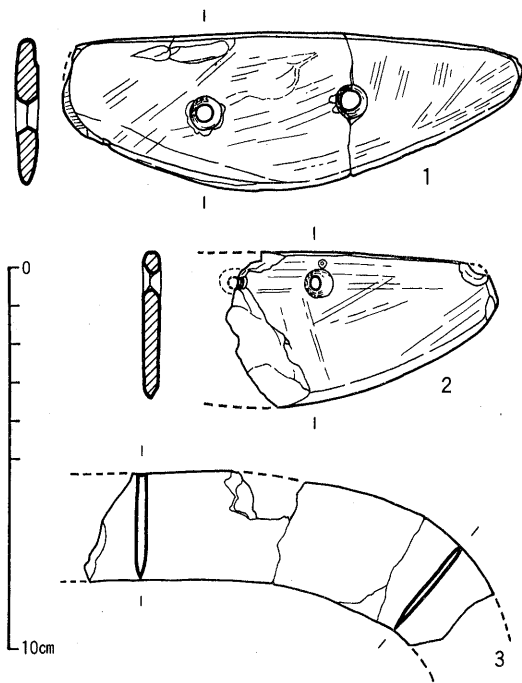


図20 石製品、鉄製品 (1/2)

A	B	口径	器高	底径	C	D
土師器 坏 a						
1	1	(11.0)	2.6	6.6	×	×
2	2	11.8	2.9	6.8	×	×
3	3	(11.6)	(3.3)		不明	不明
須恵器 坏 a						
1	4	10.2	2.7	7.8	×	×
土師器 坏 d						
1	9	13.4	2.3	7.2		×
2	10	13.5	2.7	8.4		×
3	11	13.6	3.6	5.6		×
4	12	16.2	3.7	8.4		×

表2 包含層土器計測表 単位cm

A 番号、B 挿図番号、C 内底などの有無
D 板状圧痕の有無、() 復原値

面下方にはへら削りをとどめる。口径は10.0~11.8cm、高さは2.6~2.9cmで淡茶褐色を呈する。3は淡茶灰色を呈し1、2とは異なる胎土、色調をなす。

須恵器

坏 a (4) 底部はへら切りされ体部外面から内面全体に横なでを施す。体部外面下方はへら削りされる。

坏 c (7・8) 体部下方に丸味を有しやや大きめの高台が貼付される。

蓋 c (5・6) 5は口縁端部がやや長めに屈折するc2、6の口縁部は三角形に近いc3である。

その他土師器の椀c、小甕a、高坏、皿a、須恵器の大蓋c、平瓦片などが出土した。

北側尾根出土遺物 (図19、9~12、図版10、表2)

丘陵北側の包含層から出土し、器種は土師器の坏a・dのみである。

土師器

坏 d (9~12) 底部はへら切り後、丁寧にへら削りされ、体部には丸味を有し内外面にみがきaを施す。9の外面のみがきaは省略されている。

その他の石製品・金属製品 (図20、図版14)

石包丁 (1・2) 1は小豆色の凝灰岩質石材を利用し、表裏から穿孔されている。2は灰青色の粘板岩質石材を使用している。表面の孔の上に途中で穿孔を変更したあとが認められる。1・2とも1号墳南側の表土から出土した。

鉄鎌 (3) 両端を欠損する。身の幅は2.9cm前後である。1号墳の盛土を切ったピットから出土した。

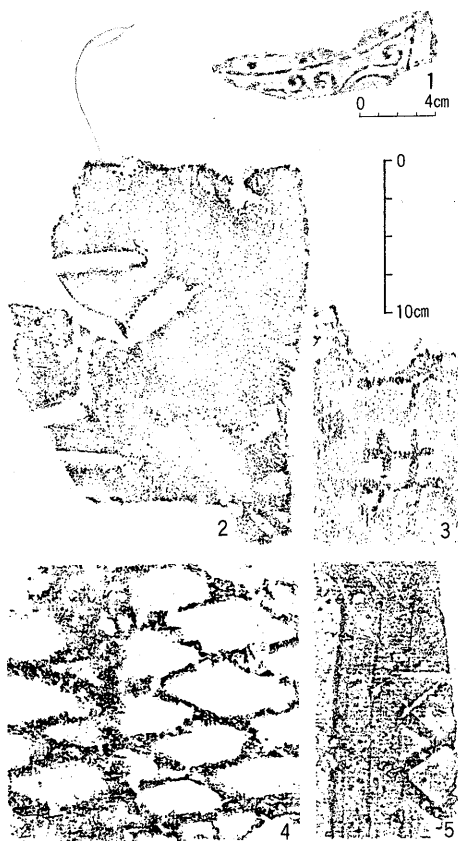


図21 軒瓦、文字瓦、平瓦拓影
(1・1/4、2～5、1/2)

瓦類 (図21、22、図版15)

軒瓦 (図21—1) 1は均正唐草文軒平瓦の破片で、瓦当の左半分および下端部を欠損する。この種のは般若寺跡、大宰府史跡第64次^{*2}について3例目の出土である^{*3}。瓦当面の詳細についてこれら完形品の出土例からみると、中心にC字形文様を向かい合せ、2葉単位の唐草を左右に3回転流し、4回転目を単葉にして留めるもので、本例の破片に示される唐草文は2、4回転目のものにあたる。上外区珠文は各々10個、脇区珠文は2個と推定される。2号墳石室の覆土から出土した。

文字瓦 (図21—2・3) 2はへら削りされた平瓦の凸面にへら描きを有するもので一応、文字として扱ったが断定はできない。文字および記号にしてもこの種のへら描きされた瓦は大宰府において2例ほど知られるのみで、類別が少なく貴重である。SX06周辺の表土から出土した。3は「平井」と刻印された平瓦の破片で「平」の文字は欠損する。2号墳周辺の表土から出土した。

平瓦 (図21、22、図版15)

4、5は平瓦の凸面拓影でいずれも大形の斜め格子を有する。2号墳石室覆土から出土した。

6～8は平瓦凸面の横端に均正唐草文の叩きを有するもので3点ある。7は下端(あるいは上端)部に近い破片であり、表面はへら

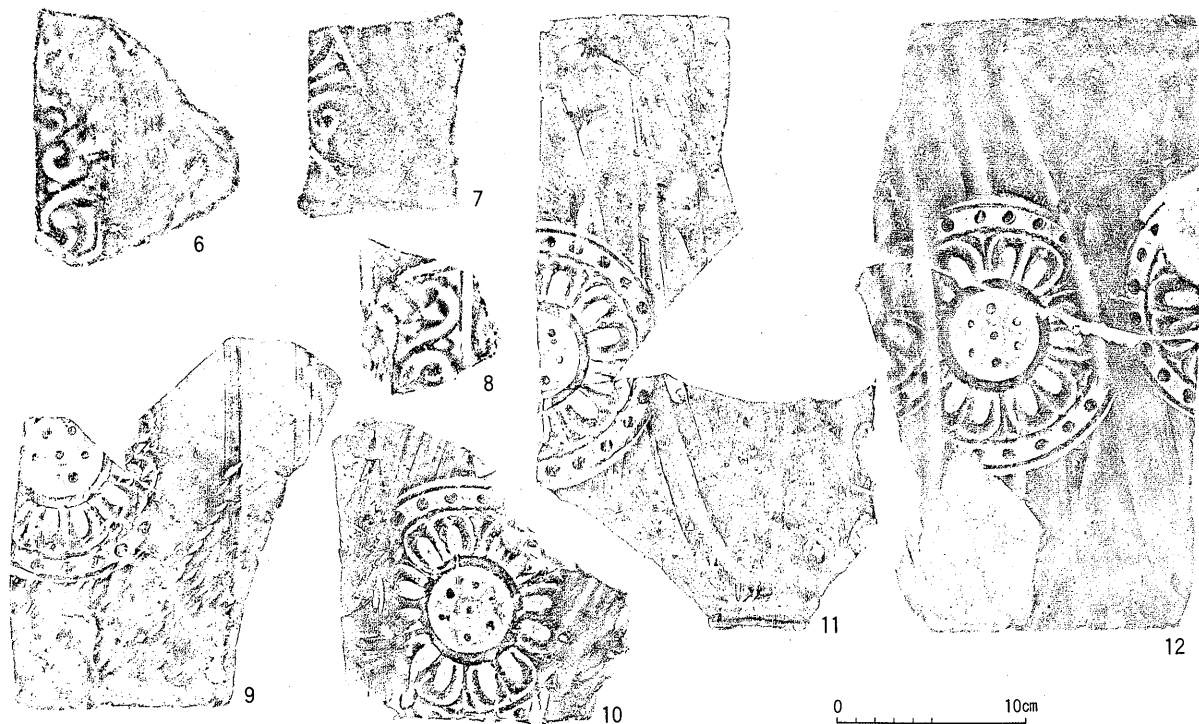


図22 平瓦拓影 (1/4)

削りされている。9～12は同じく平瓦の凸面に複弁八弁蓮華文の叩きを有するもので、10は下端（上端か？）部に、その他のものはほぼ中央部に文様が叩かれている。12は模骨にあてて表面をへら削りした後、平瓦を分割する前に連続して文様を叩いたもので、9はさらにその後に縄目がついているものである。この種類の平瓦については筑前国分寺のみで出土例が知られ、この文様と類似する軒丸、軒平瓦も出土している。6～12は2号墳石室覆土から出土し、12はS X 06周辺の表土から出土した破片と接合した。また9～12のタイ

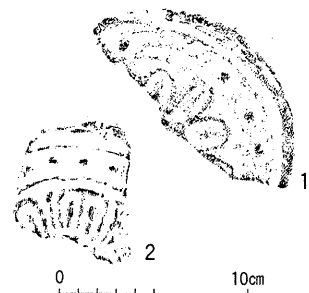


図23 筑前国分尼寺出土軒瓦 (1/4)

プの瓦はS X 06の上層で1片、2号墳石室の覆土で約70片、その他で10片ほどあり、とくに2号墳石室覆土に集中している。石室覆土では他にも文様を有していない瓦片が多数出土していることから、何らかの理由により意識的に瓦を集めて石室の上に捨てたものと思われる。

筑前国分尼寺跡第2次調査出土軒瓦（図23、図版15）

この調査についてはすでに報告を行なったが、軒丸瓦を図示し、遺物の補足を行っておきたい。1、2とも暗茶灰色土から出土したものである。

- * 1 高倉洋彰、高橋章「般若寺跡」『大宰府史跡昭和54年度発掘調査概報別冊』九州歴史資料館（1980）
- * 2 石松好雄ほか『大宰府史跡昭和54年度発掘調査概報』九州歴史資料館（1980）
- * 3 この資料については高橋章氏のご教示をえた。
- * 4 森田勉ほか『筑前国分寺跡昭和52年度発掘調査概要』福岡県教育委員会（1978）
- * 5 山本信夫「筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡」『大宰府町の文化財第4集』大宰府町教育委員会（1981）

Ⅲ まとめ

1 1号墳の特色と年代

墳丘 規模については北側の墳裾部の検出から直径12m前後の円墳と推定した。この半径6mの数値は石室の全長約6.6mともほぼ近似した数値をとっており、墳丘が何らかの規格にもとづいて設計された可能性を有するならば、規模を割り出す1つの目安になるものと考えられる。

石室構造の特色 奥壁から第2仕切石中心の距離は4.6mあり、奥室の長さ（袖石の内側をはかる）の2.3mを丁度2倍した数値となっていることがわかる。このことから石室の構築に際しても何らかの規格にもとづいて設計された可能性を有する。奥壁については石積みにかわって一枚の巨石を立てるものであり、構造上における技法の簡略さが見うけられる。奥室天井の高さは前室の2倍以内におさまっており、この点からみても横穴式石室の構築に次第に技法の粗さがとり入れられる時期のものであろうことが推察されうるのである。前室の第2仕切石の前面に閉塞部が設けられる点や、第2仕切石を変換点として羨道部が外に開きぎみのプランをなすことなどからみて羨道部には天井石が架構されなかった可能性も考えられよう。

出土遺物の示す年代 古墳の造営の年代については前室床面、墳丘の周辺表土、S X 08から出土した須恵器が参考となる。その中でもとくに時代的変遷の特徴が明瞭な坏蓋および坏身の製作技法や器形などの特徴は小田富士雄氏の編年^{*1}に照らしあわせるとⅣA型式の範疇におさまるものであろう。石室などが攪乱をうけており、遺物の詳細な内容についてはなお不明な部分が多く、確実な年代を把握するに資料不足の感を免れないが、他にⅣ型式を前後する須恵器破片などは検出されていない点を強調

するならば、1号墳は6世紀末頃に造営され、短期間のうちに廃棄されたものと推定することができよう。また2号墳については時代的推定につながる資料そのものを欠くために、1号墳との関連を考慮してこれと前後した時期を想定しうる。

1号墳の指定と保存 当町に多数残る歴史時代遺跡や出土品から、大宰府の社会、文化の断片を十分うかがい知ることができるが、大宰府の造営以前の歴史的段階については、必ずしも十分な資料にめぐまれているとはいえない。こうした折りに陣ノ尾遺跡の調査中、町の文教委員会の視察などが行なわれ、1号墳の保存に対する意見が町当局にも寄せられた。そこで町教育委員会は1981年7月13日、太宰府町文化財専門委員会に陣ノ尾1号墳の指定と保存に関する審議を検討願い、その結果8月6日、太宰府町の第1号指定文化財として今後は保存と整備を図っていくよう答申をえたのである。

2 弥生時代小児甕棺について

成人用大形甕棺などと異なり小児甕棺に使用する土器の多くは日常生活容器の転用として考えられている。こうしたことから墳墓に限らず、日常生活容器にその類例を求めると鹿部東町土器溜^{*2}（福岡市）、金山11号住居跡^{*3}（朝倉郡夜須町）の日常生活容器や道場山K35、K49甕棺^{*4}（筑紫野市）などの小児甕棺などの出土例をあげることができる。陣ノ尾SX04に使用された上（北側）甕と下（南側）甕は口縁部の特徴によって大きく異なっている。上甕は「く」字形に屈折し端部をはね上げる特色を有するもので、このような特色をもったものに鹿部東町土器溜の類例があげられる。鹿部の例は時期的には従来、「高三瀆式」として設定された形式に併行し、後期初頭に位置するものと推定されるものである。下甕はやはり「く」字形口縁をなすが傾きはL字形口縁に近く、端部は肥厚して丸味を有するもので、金山11号住居、道場山K35、49号甕にみられ、甕形土器の時代的変遷を考慮するうえでは中期末に位置すると推定されている^{*5}。こうして従来の見解のうえでは形式的時代差として捉えられるものがセットとして出土したことは注意される。

3 歴史時代の土器について

1号墳石室出土の土師器 土器は石室覆土から出土したものであるが完形品が多く、歴史時代に石室を墳墓として再使用した際の供献あるいは副葬品ともみられるものである。器種は土師器の坏a、皿a、椀cで、出土状態からみて図5—5の坏aのみは他のものと分離されうる。

この時期の類例は大宰府史跡の編年が参考になる^{*6}。器形と手法ならびに法量については近いものとして筑前国分寺SK053、大宰府史跡SE1340、SE400出土例があげられる。年代的には9世紀初頭前後に推定され、5はやや口径が大形であるがSE400の型式の中におさまるものである。

SX07出土の土師器 上記に使用した編年によると小皿aの法量に適合するものはSK823以降のものであり13世紀後半から14世紀後半頃と推定される。

東側谷部出土土器 8世紀代を中心としているが、一部は平安初頭に下る土師器を含んでいる。

北側尾根出土の土師器 上記の編年によると坏dの占める割合が多くSE1081、SK1084に併行する段階のものと考えられ、年代的には8世紀後半に推定される。

*1 小田富士雄ほか「野添、大浦竊跡群」『福岡県文化財調査報告書』第43集、福岡県教育委員会（1970）

*2 高倉洋彰ほか「鹿部山遺跡」日本住宅公団（1973）

*3 井上裕弘「金山遺跡」『夜須町文化財調査報告書第4集』夜須町教育委員会（1981）

*4 川述昭人、橋口達也ほか「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XYV」福岡県教育委員会（1978）

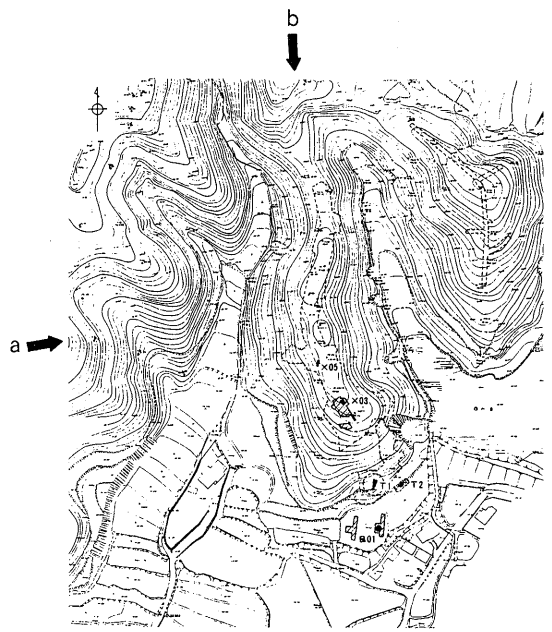
*5 橋口達也、森田勉ほか「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI」福岡県教育委員会（1979）

*6 横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4九州歴史資料館（1978）

横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集』2九州歴史資料館（1976）

版 図





図版1 遺跡全景



a・西から b・北から

図版2 1号墳



南から

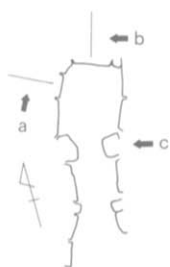


閉塞状態
南から

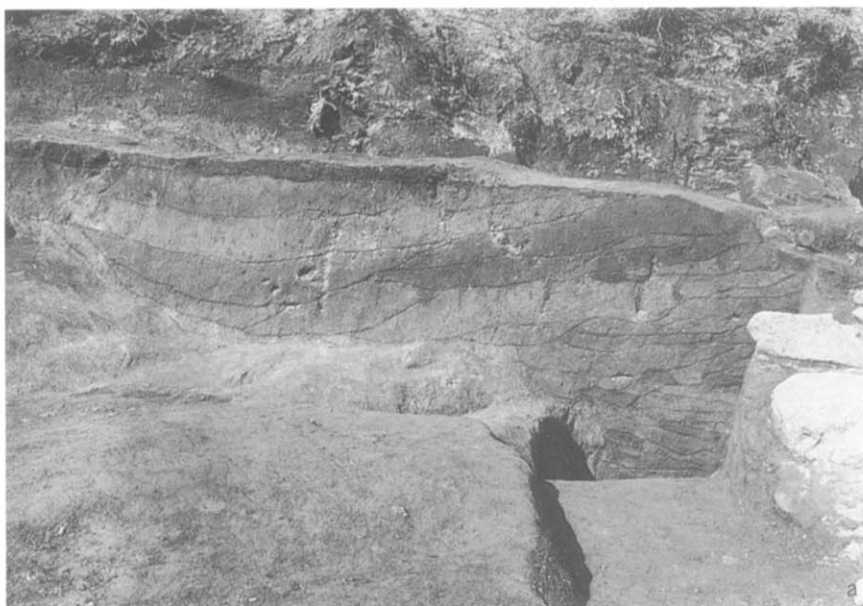


閉塞石除去後
南から

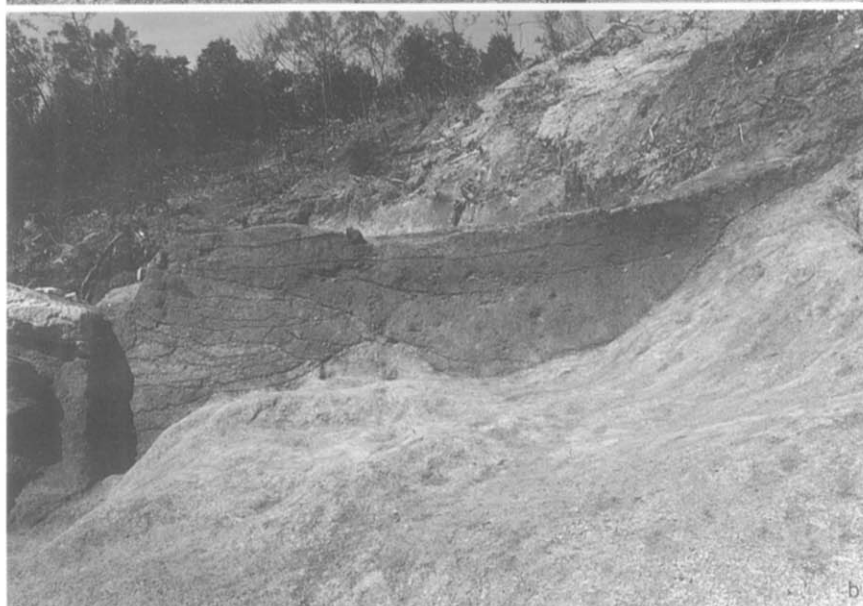
図版3 1号墳



墳丘
東西土層
南から



南北土層
東から



石室内全景、閉塞石、前室、奥室、東から

図版4 1号墳細部



a 閉塞石
北から

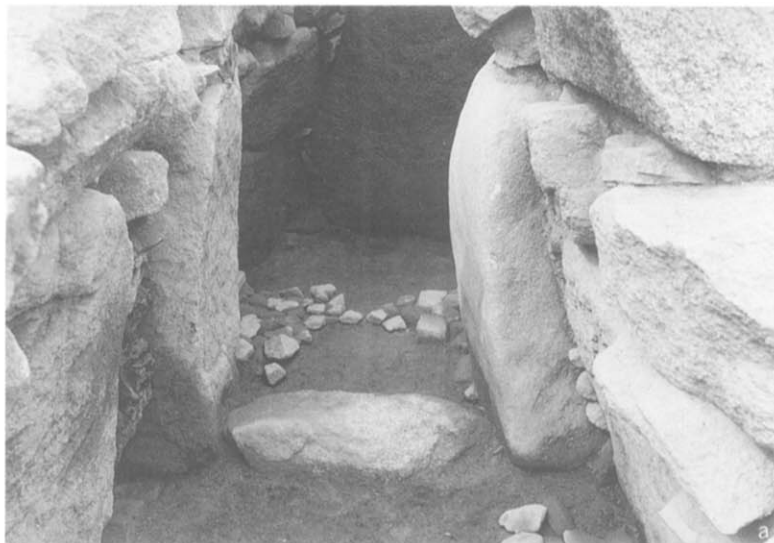


b 羨道側壁



c 奥室から前室

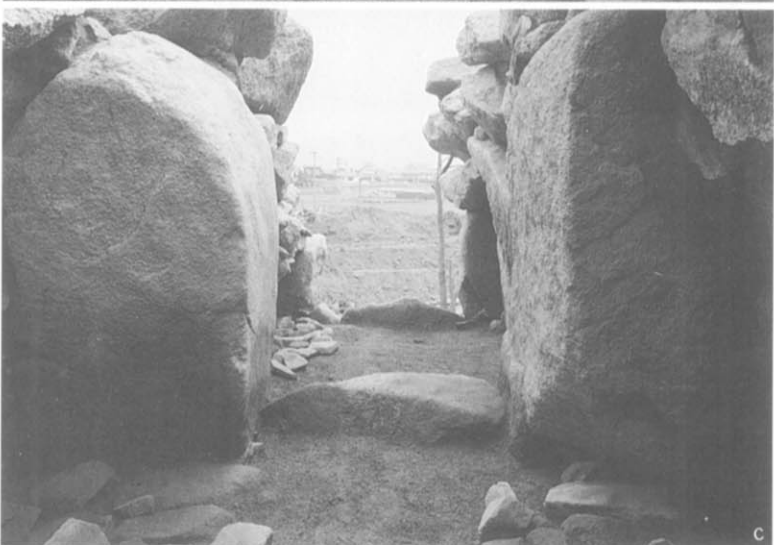
図版5 1号墳細部



奥室
袖石

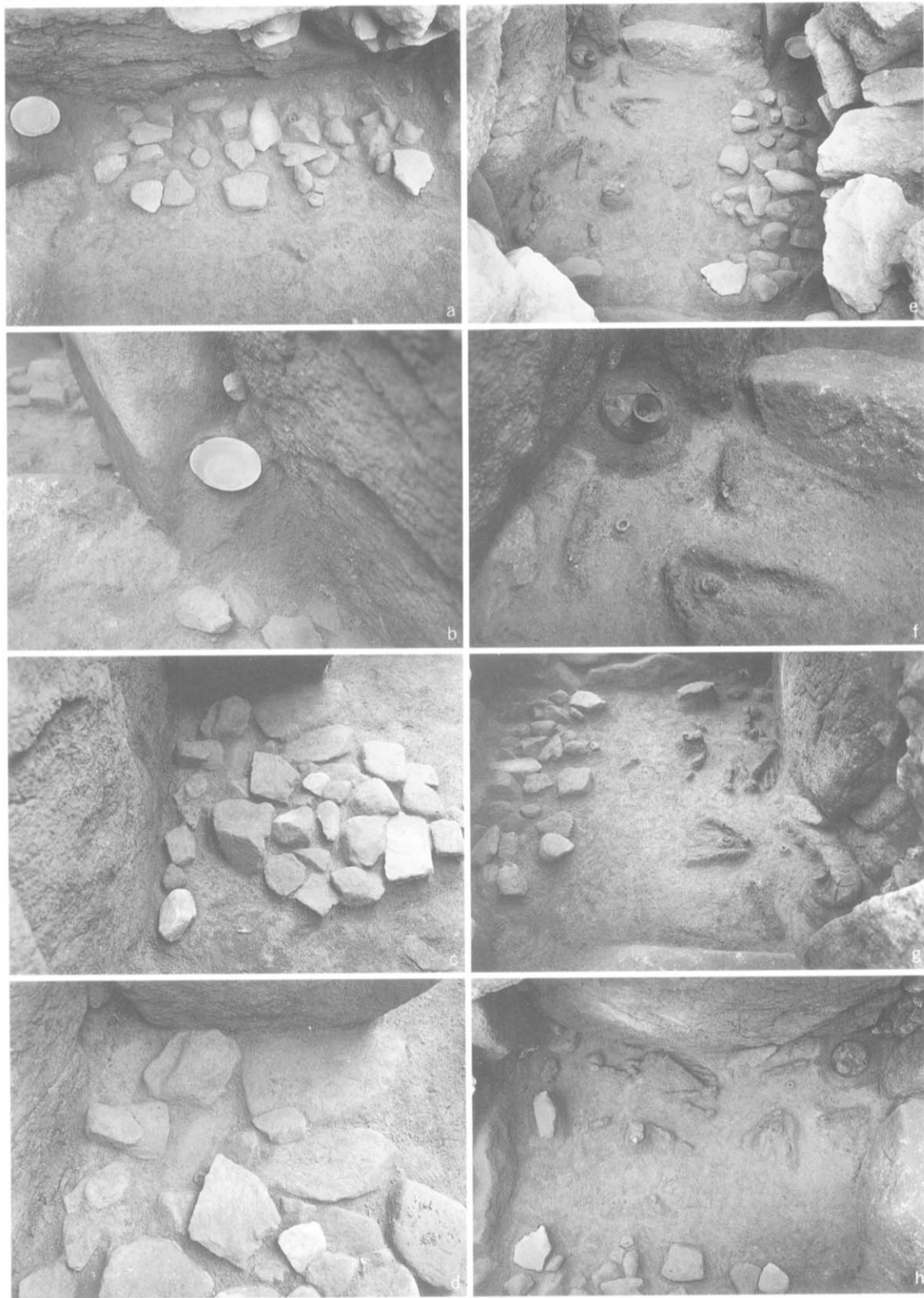


奥壁



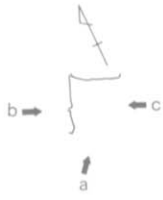
奥室から開口部

図版6 1号墳遺物出土状態



a, b, e~h 前室 a, 土師器、耳環 西から b, 土師器 c, d, 耳環、鉄器 北から
c, d, 奥室 e~h 土師器、須恵器、耳環、鉄器 e, f, 南から g, 北から h, 東から

図版7 2号墳



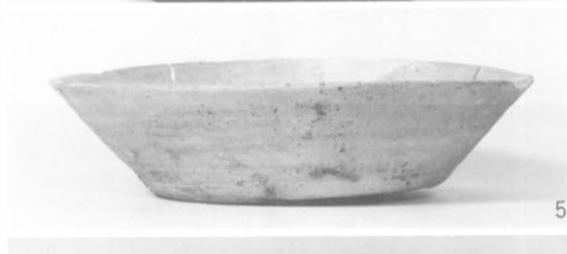
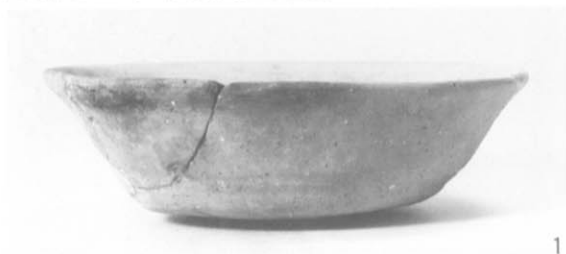
石室
南から



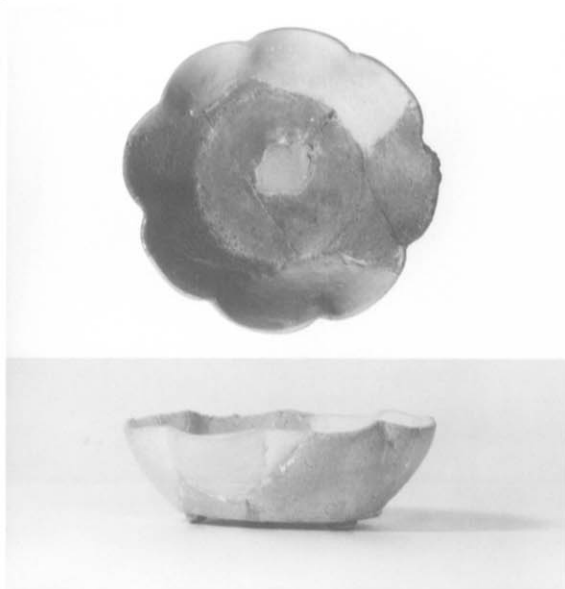
石室
(2次使用面)
西から



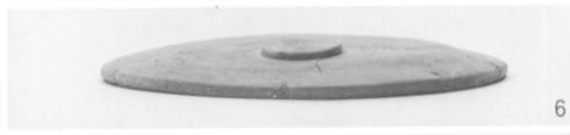
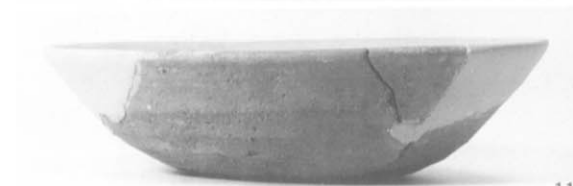
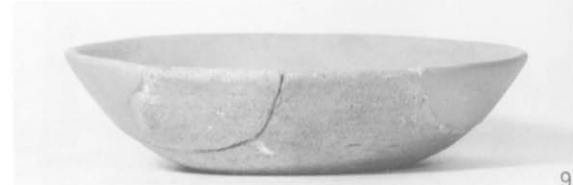
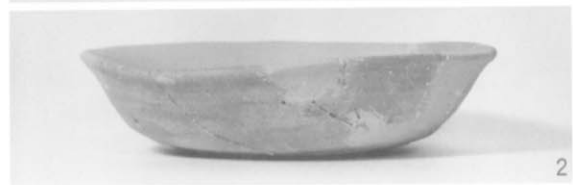
土器出土状態
(2次使用面)
東から

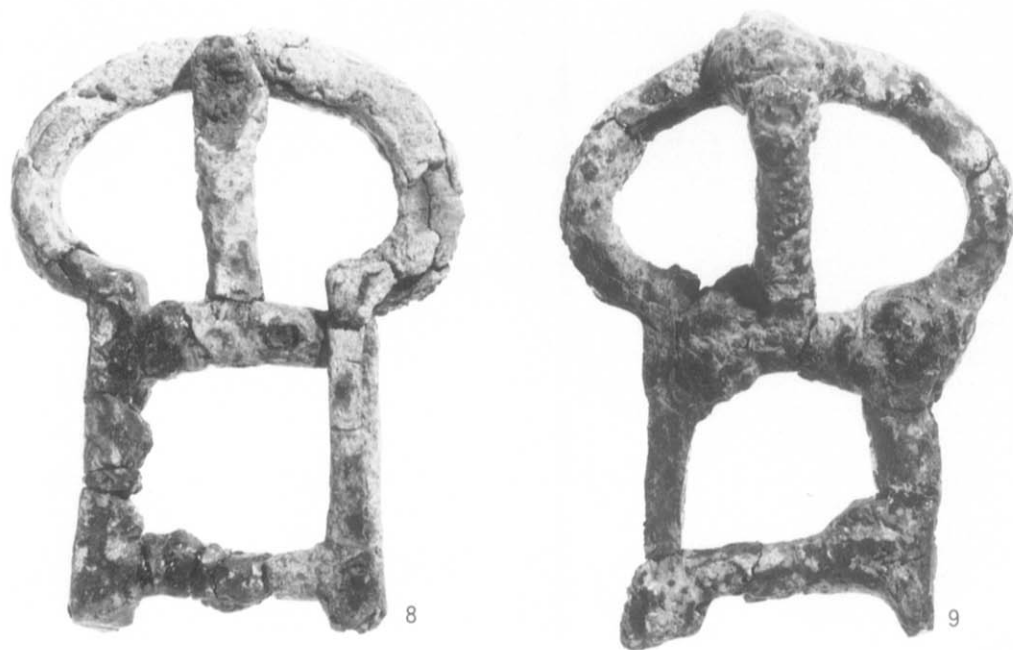


図版9 1号墳、2号墳、その他出土土器

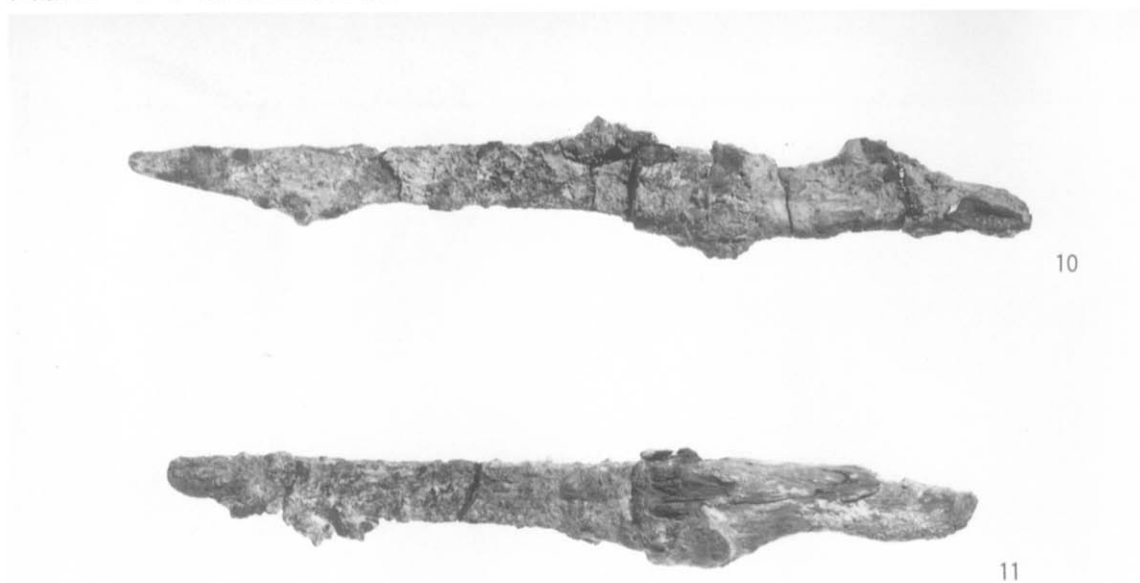


图版10 包含層出土土器、SX04甕棺

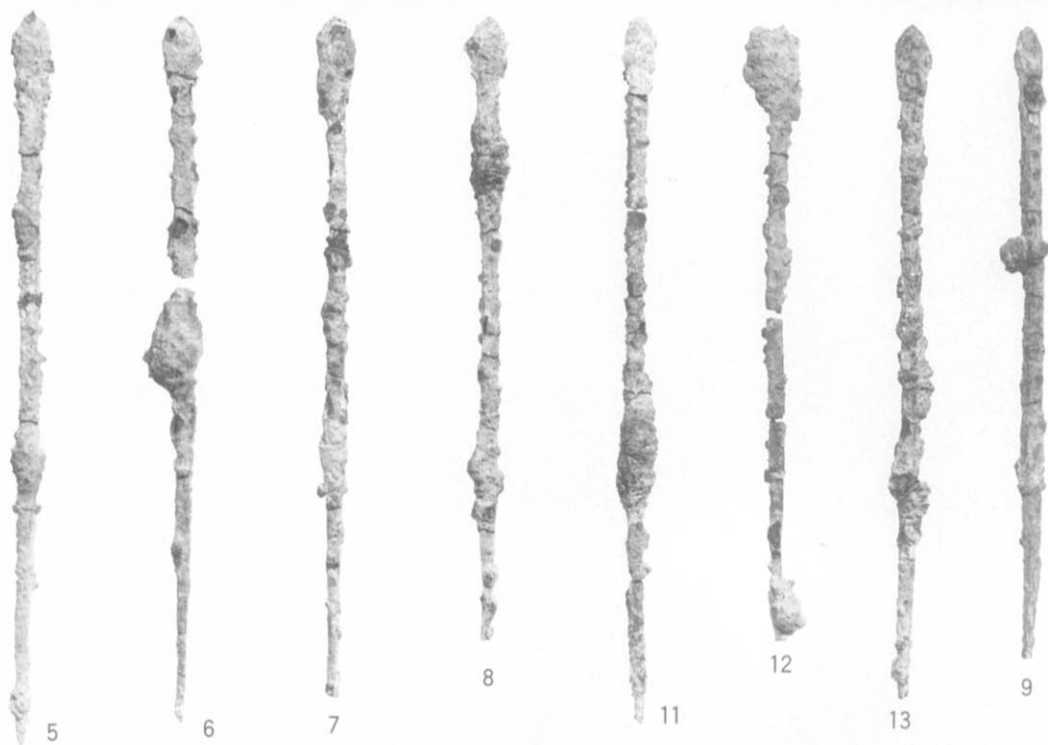


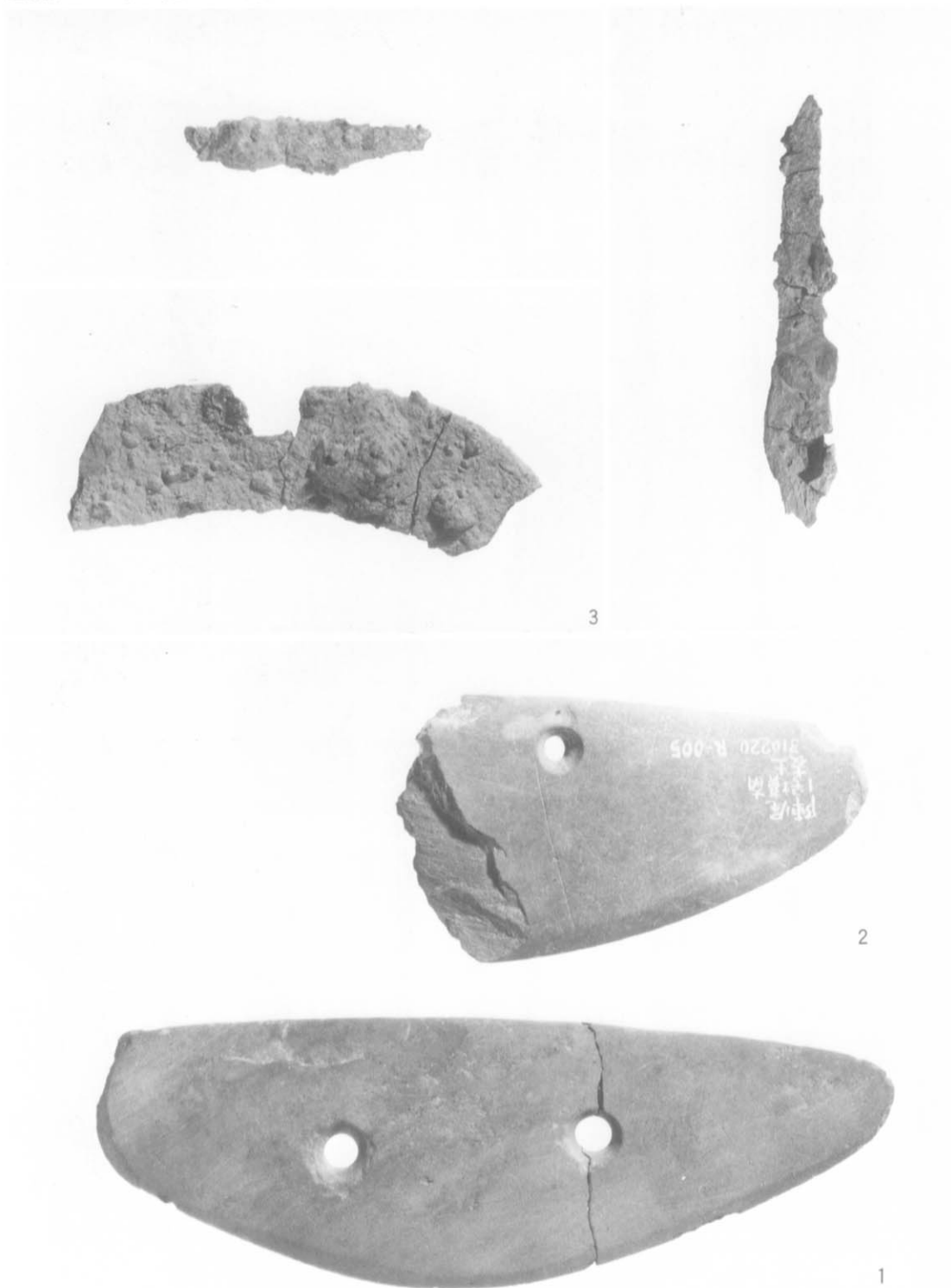


上・耳環 下・釵具



4 5 1 3 2
上・鉄刀子 下・鉄釘





上右・2号墳鉄刀子 左上・SX05鉄刀子 左中・鉄鎌 下・石庖丁



1



1



7



2



2



6



8



10



9



11



12

大宰府条坊跡

大宰府町の文化財第5集

1982. 3. 31

発行 大宰府町教育委員会
福岡県筑紫郡大宰府町大字観世音寺86

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目5番15号
